

# アランと共に (1)

高村昌憲





ペール・ラシェーズ墓地（パリ 20 区）にあるアランことエミール＝オーギュスト・シャルティエの墓

## 一 持つことと見ること

---

ドイツ軍に機密漏洩したという冤罪でユダヤ人のドレフュス大尉が逮捕された、所謂ドレフュス事件がフランスに起きた一八九四年は、一八六八年生まれのアランが二六歳の時でした。アランは、人権を擁護したエミール・ゾラたちのドレフュス派を支持するようになっていました。他方、アランと同世代の一八六二年生まれのフランスの作家で政治家であったモーリス・バレスは、ドイツの脅威を心配して第一次世界大戦前に軍部を支持する反ドレフュス派でした。そのバレスが書いた『スパルタ紀行』の中で、アランは次のような文章を目にしたことを一九〇六年二月二日のプロポで書いています。バレスは「人間は、手を持っているから動物の中で最も賢いのである。驚くべき考察である」と書きました。

しかし、バレスは猿のことを忘れていると言ってアランは反論します。猿は足でも物をむから、四本の手を持っているのと同じです。更に、猿の中には尻尾でも物をむ機能を持っているものもいるのですから、五本の手を持っているのと同じです。人間は動物の中で一番優れているからといって、その特殊性をすべて引き合いに出すのは間違っています。人間が優れているのは手を持っているからではなくて、きちんと物を見ることが出来る両眼を持っているからである、とアランは言います。幾何学を成立させているのは両手ではなくて両眼です。ほんの短い一瞬でも、二つの物のうち容積が大きい方や、二点の距離を両眼で知覚することが出来ます。数量的認識に関して言えば、角度の測定を可能にするのも両眼です。このことは大変重要であるとアランは言います。

猿は四本の手を持っていますが、ものごとを認識する上で重要なことは、猿の場合は手で触った後にやって来ます。物に触って、匂いを嗅ぐ嗅覚が、見ることの視覚よりも優位になっています。脳を調べるとそれが証明されます。「ところで嗅覚は幾何学と関係ありません。嗅覚は情熱の代理人です。猿は物の数量を測る代わりに、愛したり憎んだりする」のが猿であるとアランは言います。人間はすべての面で猿より優っている訳ではありません。「それ故に、人間は猿が完成された姿であると考えるのは合理的ではなく、鯨が魚の一種であり、蝙蝠が鳥の一種であると言うのと同じように合理的ではない」とアランは言います。正に、アランは詩人です。

詩人は自然を愛し、社会の不正を憎みます。詩人は猿にも鯨にも蝙蝠にも成ることが出来ます。これ等の動物たちには、人間よりも優っている点が沢山あります。自然を理解する能力はその一つです。人間社会の言葉や制度に無知であっても、動物たちには自然の言葉であるその印を読みとる力が所有されています。

そして、アランは自然と同一のものとして帽子やテーブルの事物の言葉を聞こうとします。帽子やテーブルを回転させて理解しようとし、帽子やテーブルには人間が決めたサイズの印や長さの表示が付いているから、私たちはそれ等を簡単に理解したつもりになっています。しかし、Lサイズは帽子ではありません。九十センチはテーブルではありません。「男たちも女たちも空を見上げて」為す術がありません。理解するということが出来ないのです。それに反して、喜びや悲しみや感動するという「感情の伝染」は、人間にとっても容易に行われています。それを可能にしているのは宗教ではなく、敢えて言うならノルマンディーの風土であるとアランは言います。それは「自然との関係に依存するもので、無意識なものであり、視覚的想像力と手の微妙な動きの中にもある」と言います。一つの印から人は多くのことを次から次へと想像しながら理解していくもので、それ等は自我よりも頑なではなく、注意力も余り必要としていません。その結果、アランにとっての存在論は、肉体という自然に重心を移行させる逆説を採用せざるを得ません。何故なら、同じ故郷の者同志がそのことを知っただけで今まで以上に深く理解し合えるのなら、自我よりも人が提出する印の方、つまり自我に関して言えば自我の属性としての肉体を沢山理解しようとするからです。そして、自分が存在しているのは肉体があるからであるという認識に至る存在論は、その儘自我の

中を吟味するのではなく、人や自然が提案したものを吟味することに繋がっていきます。「自分が提案することよりも人が提案したものを沢山理解する」のでしょうか、敬虔なカトリック信者が信じているように「テーブルの足下に祖先の霊がいるということを仮定する前に、人が提案したものを吟味するのであって自我の中を吟味するものではありません」とアランは言います。

事物と宗教は無縁です。動物たちと宗教とも無縁です。人間と事物との関係、あるいは人間と動物たちとの関係とは、愛したり憎んだりする感情の中核を構成するもののようです。故郷が同じである、あるいは出身学校が同じであるという印だけでお互いの理解が可能になることは良くあります。ほんの些細な印ですが、この事象は自我の中をいくら探し回っても無駄なことを暗示しています。人が提案するもの、自然が提出するものを良く見ることです。アランは帽子を色々な角度から良く見るが大変に良いと思うようになります。次から次へと視覚的想像力を働かせ、手を使って帽子を回転させていきます。人間が、事物や動物たちや社会や自然から受け取る力、つまり環境の与える力が如何に大きいかをアランは指摘しています。

人間が動物よりも優れている点は、手を持っているからではなくて、眼で見て認識する能力が高いからです。手を使い、高度な武器を製造出来るから優っていると判断しているかの如き人々は、支配する者が崇高であり優れていると認識する誤謬に気付きません。支配者が何時の世でも正しいのなら、この世に戦争は起こりません。戦争無き歴史が無いように、権力者や支配者が常に正しい訳ではありません。何故なら、正義とは代数学の定理のように不変ではなく、時代とともにその内実を変容させていく側面も必ずあります。正しいその流れを人は理解しなければなりません。正しく見て感じなければなりません。不変を過信する心は、必ず現実の裏切りに出会います。この世は体系化されません。アランの初期プロポはそのことを私たちに教えてくれています。(完)

## 二 ゴヤのデッサン

一九〇六年二月一八日のプロポで、アランが話題にしているのは絵画です。アランは偶然にもゴヤのデッサンを見ます。そこに描かれていたのは怪物たちですが人間に似ています。「小さな額で眉しかなく粗野な顎をもった怪物、恐ろしい口をしていて幾つもの唇をもった怪物、節くれ立った手をぴんと伸ばして奇形の体をした怪物は猛禽のようで、笑っているだけで鼻も眼も額も無い怪物です。何人かの若い娘たちや、がっしりした体の男たちは、これ等の怪物たちの情熱に火を付け、掻き立てるためであるかの如く其処におります」と書くアランにとって怪物たちは、それまでの「宗教的で神話的絵画の報いを受けさせるためにある」と映ります。あるいはサロン（官展）画家たちが描く余りに端正な人物像は、現世の泥である現実の汚辱とは無縁です。モデルの人物は実際の人間のように見えますが、虚構であることに変わりなく、虚構は別のものと呼び寄せ、怪物に似ています。絵画の中で余りに美しいものを夢想する者たちは却って醜く見えるとアランは言います。

見えるように描けば良いと考えて近代リアリズムは発生しましたが、果たしてそれが真実であるのかという疑問は残ります。キリストの人物像も、天使の翼も見えないから描いては不可ないと審判する者は、水中に差し入れた棒も曲がって見えるから折れていると認識するのでしょうか。地上は動いているように見えないから、太陽や星々が回っていると認識するのでしょうか。水中から棒を引き抜かなくても真直ぐな棒であることを認識する推察力が真のリアリズムであるなら、想像力も虚構も真実と共にあって良い筈です。サロン画家が描く美人像も、ゴヤが描く怪物たちも虚構であると見て仕舞ったアランの眼は、他方では科学的認識への信頼が広く社会性へ繋がるべきものと見ていました。それは第一次世界大戦後に（正確には大戦中の一九〇五年に『芸術体系』を執筆した後）、アランの思考は詩歌や文学や芸術の世界へ敷衍していきましたが、決して宗教の世界と同衾することはありませんでした。

「正しく見て、正しく絵を描いて、正しくものを書くようにしましょう。黄経局年鑑が太陽系のことを叙述するのと同じやり方で、あらゆるものを見るように努めましょう。黄経局年鑑という本は有益なものです。それ故にそれは美しい本なのであり、そして私たちはその美しさを当たり前に思います」とアランはこのプロポを結んでいます。黄経局とはフランス革命時代に創設された機関で、天体暦、航海暦、航空暦などを作成した処です。地球は静止していることが美しいのではなくて、太陽の回りを回り自らも自転している事実が美しいとアランは言っているのです。あるが儘の事実が美しいと言うアランの思想は、過去に生きていた歴史上の人物や未来に期待される人間が美しいのではなくて、現在生きている人間やあるが儘の自然の姿や色彩が真の美しさであることを思い出させてくれます。思えば、如何に私たち現代人は〈現在〉を見過ごしてきたことでしょうか。そのことを思えば美人画も怪物たちも絵画である限り同じ虚構ではないかとアランは見ます。

美しいのは絵画でなくて地球であり、自然であり、人間ではないのかと一九〇六年当時のアランは芸術至上主義たちの美を〈自由思想〉の範疇に入れていないようでした。『わが思索のあと』を読むと解りますが、アランが芸術について本格的に思考し始めたのは、第一次世界大戦へ参戦したときでした。フランス軍の上官の素人画家と、ダ・ヴィンチやモネやセザンヌの絵端書を見ながら芸術論を語ったのが『芸術体系』を叙述した始めでした。〈現在〉を破壊してゆき、人間の生命を破壊してゆき、全てを破壊してゆく戦争の中からアランが見たものは、あるが儘の生命と自然の美を表現してゆく芸術であったのは必然の方法でもありました。詩を音楽、散文を絵画や彫刻や建築に譬えたアランの詩論は、正に〈現在〉の側から見た考え方もあります。詩は誰が読んでもその感じ方は同じであるが、散文は読む人によって感じ方や認識が相違するという〈現在〉の見方は、絵画や彫刻や建築を見る人が今立っている位置によって違って見えるところ

からきています。詩を舞踊、散文を歩行に譬えたポール・ヴァレリーの詩論が、詩の〈未来〉の側から定義した言葉であるのに対して、アランの見方はあくまで〈現在〉における機能的側面を探求した方法論です。

因みに、ヴァレリーの定義によれば、詩は行き先が分かっているなくても良くてその姿が大切です。舞台上の踊りにおいても、歩いて行く先が何処であるかは左程問題ではなくて、踊る姿が重要であるのと同じです。しかし散文は、歩いて行く先が何処であるかが問題となる歩行と同じであり、行き先の〈未来〉を問題にしています。詩は〈未来〉において意味するものが定かである必要はないが、散文は意味する〈未来〉のことがクリアでなくてはならないとヴァレリーは考えます。恰もドイツの脅威に脅えるフランス人のように、ヴァレリーの詩論は〈未来〉という時間を念頭に置いて書かれ、第一次世界大戦を予言することも可能でした。これに対してアランの詩論は、〈未来〉を非在化して〈現在〉の機能的な方法論からその存在を直感する極めて独自の思考に基づいているのは明らかです。何故なら、〈有益なもの〉は〈現在〉だけに存在するものであることを、アランは十分に推察していたからです。従って、必要以上に未来への危機感を煽って現在を支配しようとする独裁的為政者の手法とも無縁でした。(完)

### 三 孤島の経済

---

一九〇六年三月一五日のプロポで、アランは経済の原則について独自の考えを述べています。或る島で生活する少人数の人々のことを想像して言っています。人々の生活は、各々が持っている天賦の才に従って働き、その島の生活は全てが彼らの労働によって成立しているのが分かります。そして、もしもその中の一人が生産を止めて消費するだけであったならば、一人分の生産が無くなるのは自然なことです。あるいは生産とは関係のない仕事ばかりに時間を使い、例えば金やダイヤモンドで島民の功績としての徽章ばかりを作るならば、他の人々はその人の分まで働くか、消費を少なくしなければなりません。一般的に、或る人の無為や贅沢は、他の人々に辛い労働や対価となる報酬の少ない労働が齎されることになるだろうとアランは言っています。

しかしながら、現実の私たちの社会に目を向けるならば、この島の経済の原則が通用しなくなっているのが分かります。金、銀行、設備、軍隊、警察、美術というものが生産という真の豊かさを見えなくさせており、生産とは直接関係の無いものが社会には沢山存在しています。アランがこれ等の無為や贅沢を攻撃しようとする、造詣が深い経済学者は次のように主張します。「贅沢が無くなれば、労働者の多くが職を失うことになる。そして、無為というものは何もやることのないことであるが、仕事が無ければ仕事をしたいと思う人々が増え、人々の給与を下げさせるのである。その結果、働きたいと思う人が一人いれば労働力の供給を齎し、かくして或る人々の無為と贅沢は他の人々を豊かにしていく」と言います。

しかし、専門家の見解が何時も正しいとは限りません。原子爆弾を産んだ物理学者たちは、それ故に専門という領域に孕んでいる危険性を十分に了知していなければなりません。経済学者たちが抱えている危険性も同じです。現実の社会を豊かにするために、経済学が必要であるとは限りません。時には専門家は、現実社会において間違いを犯すことすらあるのです。経済学どおりに社会は変化していく訳ではありません。専門という回路の中から、時には教養という見識が欠落して、正しい社会的判断の不能に陥っている専門家たちがいることも又あり得ることです。専門用語を駆使して論文を完成させることは重要ですが、それ以上に専門家たちに課せられていることは、専門用語を知らない人々に対しても理解させる説明能力を所有していることです。そのためには自らの見解を一般の人々に説明出来る優れた表現力と構成力が必要であり、専門の知識を持たない人々を納得させるだけの傍証も必要になります。それは正しく教養の高さであり、公正さでもあります。科学は教養と同一ではありません。教養は科学の応用です。ダーウィンの〈進化論〉という科学がその応用を間違えて運用したために多くの悲劇を生んだことは、二十世紀の歴史が証明しています。動物は進化している、人間も進化している、という科学の思想はナチスによるホロコースト（ユダヤ人大虐殺）の思想的背景となりました。〈ドイツ民族の進歩のために〉ユダヤ人を絶滅させようとした思想は、全体主義思想を助長させるのに左程時間はかかりませんでした。同様に、〈アジアの発展のために〉我が国が中国や東南アジアで行った侵略行為のことも周知の如くです。

一八五九年に『種の起源』は発表されましたが、弱いものは滅び強いものが残り征服していくという生物学の応用が、先ず植民地支配のバックボーンになっていた事実は否定出来ません。十九世紀後半の植民地支配の思想的根拠に、ダーウィンの進化論が利用されていったのです。植民地へ向けられていたこの全体主義はやがて〈国〉へ向けられ、〈国を守るため〉の軍国主義という全体主義に変容していった時代にアランはプロポを書き始めています。アランはこの全体主義思想の危険性を逸早く看破して、共和制支持者として活動しました。ひたすら健全なる個人主義の成熟を願って、個人の思考を優先させたフランス社会の水先案内人として、個人の思考や感情を大切にします。一九〇六年に書き始めた『一ノルマンディー人のプロポ』は、そのようなアランの自覚に基づいて〈社会〉を意識して書かれた新聞記事でした。個人を大切

にする民主主義の精神にも、その裏側には必ず〈社会〉が宿っていることを証明しているものの一つが、アランの初期プロポでした。それらは正にアランの思想の原風景でもあります。

ダーウィンの〈進化論〉という専門用語も、その応用を間違えば戦争の世紀に変容させる程でしたが、そのような「不正は年老いた娼婦のように、化粧されて」現代においても生存しています。「化粧をする前の彼女の素顔を見なければなりません」とアランは現代社会の不正に対して忠告しています。明晰な理論と傍証によって訓練された感情と知識、つまり情操と教養は専門用語に隠されている類推の悪魔を、孤島で生活するロビンソン・クルーソーのように白日の下に晒すことになるでしょう。(完)

## 四 愛の言葉

---

イポリット・ラングロワ将軍（一八三九—一九一三）は元老院議員に立候補した時に、若者が貧乏であることから救済してくれるのは愛であると表明しました。その前にラングロワ将軍は「私は博愛主義者です。私は若い兵士を愛したように貧しい人々や弱い人々を愛します」との言葉を口にしますが、その言葉を聞いたアランは一九〇六年四月十日のプロポで反論しています。先ず、将軍の言葉を次のように分析します。

平等であること、公平であることを求めても無駄であり、自然の中に平等はありません。平等を確立したいとする法律は、自然に逆行するものでしかないでしょう。何故なら、自然というものは不平等そのものであり、生きる者がいれば死ぬ者もいるのですから、平等であり続けることは自然に逆行するものです。しかし、この平等よりも美しいものがあるとラングロワ将軍は言っています。それは愛だと言っています。この愛があるから人はひどく不公平であっても許せます。愛すること、それが自然の中の公平さを超えて、この上なく完全なる公平さを志向する精神の醜さを許すのです。死ぬ者と平等である必要はなくなります。愛ある者は、生きる者を許します。炭鉱で働く若者は、有毒なガスを吸い込んで泣いています。夜も働くために泣いています。鉱山の株主たちへ収益を保証するために働いています。働きながらも、博愛の空気の匂いが自分たちの周りに流れていると感じたならば、若者たちはその時気分良く働くようになるでしょう。このようにラングロワ将軍は言っているとアランは分析します。社会制度は隣人の愛の上に築かれていることを要約して言っているのですが、果たしてそれは真実でしょうか。アランは否定します。否定して次のように言っています。

「全く違います。将軍！ 若者たちや生活に困っている者たちは、博愛の空気の匂いのことなど少しも気にしていません。彼らが気にしていることは感情ではなくて、お金のことです。彼らの魂が干涸らびて弾力を失っていることは本当ですが、愛されていないことなどは気にしていません。お金で物を買いたいだけです。彼らが慈善の行為を素直に認めようとしなないのは、慈善という行為の背後に隠されている不公平の影がちらついているからです」とアランは言います。

若者たちの愛は、他人から貰うためのものではなくて、純粹に与えるものであった筈です。アランの感性は直ぐにそのことを直観し、慈善という行為の偽善性を見抜いています。慈善とは、人間を平等に見ない者が行う行為であり、〈文化〉になり得るものではありません。他方、野生の動物たちが傷ついた仲間を見捨てるように、自然は本来的に過酷であり、非情でさえあります。弱肉強食という不平等は常に自然には付きものですし、愛が命取りになることすらあり得ます。傷付いた仲間を助けようとするれば、自らもライオンに襲われることになることを、野生の動物たちは本能的に承知しています。平等であることと愛が両立する時とは、非常に難しい状況が克服されて、恰も母親の愛情に極限化された姿を見るように、偉大な愛を所有する時でもありましょう。しかし、自然は愛を極限化しません。自然は不平等であることを許容します。傷付いた仲間を守ろうとする慈善は自然のものではありませんし、平等を理想とする〈文化〉のものでもありません。慈善とは、人間の不平等への反省に基づく憐憫の感情であり、人間を差別化する精神の行為でもあります。そこには愛は不要です。慈善行為の恩恵を授かる者にとって、愛は重荷であり、人間の優劣を決定付ける屈辱になることすらあるのです。愛という感情における最大公約数は無意味であり、政治的で物理的作業のみが救済として可能です。つまりお金だけの援助が一番の薬なのです。政治はこのことだけに専念すべきであり、法律は母親の感情の領域にまで介入すべきではありません。愛してもいない者を愛せよ、と言うくらいに理不尽な政策はないのです。

政治が人間の感情までも支配する政策を実行したとするなら、それは人間の家畜化政策に繋がるものでもあります。つまり個人の健全な思考や判断力を奪う政策であり、民主主義を根底から否定する政策でも

あります。個人の自主的思考や自発的精神を信用しない独裁者のために、嘗て国家主義や全体主義の思想が利用されましたが、現代ではスポーツにおける勝利至上主義がそれに酷似しています。勝敗に固執してチームが勝つために個人の自由は許されず、自己犠牲が社会性と混同した精神形態を生んでいます。スポーツと同様に、セックスと映像（スクリーン）を大目に見れば、社会のことを思考する個人の能力は、家畜のように無力化が可能であるという〈3 S 政策〉のことを、我が国では余り口に出して言う人がおりません。傍観者的視線を許容し、真の批判精神を稀薄にし、短絡的興味に終始する現代のスポーツとセックスとスクリーンは、もしかしたら自発的な民主主義精神を蝕んでいるのかもしれない。あるいは戦後間もない頃にGHQとともに、米国の民間検閲支隊（CCD）が秘密裏に私信まで開封して徹底的に行った検閲の影響が、今でも影を落としているのかもしれない。

ラングロワ将軍が貧しい人々や弱い人々を愛しますと表明した言葉にアランが危険を感受したのは、それが実は政治による個人の感情や思考領域への介入であることを敏感に嗅ぎ分けたからでしょう。我が国においても戦前まで、愛の言葉は臣民に向かって言うものでした。一人の男性が一人の女性に向かって言うことすら、いわば市民権が与えられていなかったと言えます。愛は大衆に向かって言う言葉ではなく、一人の人間の前で言うものです。（完）

## 五 天災と宗教

---

一九〇六年四月五日のプロポでイタリア、ナポリ地方にあるベスビオ山の噴火から、自然に対峙する人間の思考についてアランは言及します。もう少し正確に言うなら、自然の力について人間が採用する思考の方法であり、この方法を人間の意志に純化したときに湧出する宗教というものの性格です。一九〇六年のベスビオ山の噴火は、火口の外観を変える程に激しく、山の標高も低く変えたと言われています。このときナポリ地方の人々は、溶岩流が来る前に自分の家にあったキリスト像などの偶像を持ち出して教会の中でそれ等を潰すことになるのですが、それ等の行為は滑稽に見えても「或る種の道理に叶っている」とアランは言います。

「溶岩流の方向や速度のように、小石の落下も幾つもの状況に左右されます。初速、比重、粘性そして角度です。更に、私たちが恐怖を感じるの怖いと思う時であり、自然の法則に無知である時でもあります。安全と思う時は、私たちが穏やかな気持ちでいる時でもあります」この時は恐怖はありません。つまり自然の法則を知っている者には恐怖は無く、勝手に我が儘な主人にお世辞を言わなければ生きる権利がないような者の方が恐怖を多く感じ、その恐怖心も高くつくことになります。何故なら、火山の溶岩流や小石は低い方へ流れ、ガスが発生するときの圧力によって飛ぶ距離も或る必然性の結果であるからです。しかし、勝手に我が儘な主人の方は必然性の結果が不明瞭ではっきりしません。「私たちは奇跡によって救われることよりも自然の法則に従って殺される方を愛しています。……ローマ時代の禁欲主義者たちがそうでしたが、皇帝の寛大さも怒りに劣らず恐ろしいものでありました」とアランは一九〇六年四月十三日のプロポで極論を言います。

ナポリ地方の人々が偶像を持ち出すのは皇帝が怖いからではなくて、それとは少し事情が違っています。自然の力は、神の怒りや気まぐれによるものと信じられていました。「一度放り出された小石であっても、物理的原因が無くてもその軌道は変えることが出来ると彼らは信じていました。そのことは自然の力を前にしてそこから逃げ去ることよりも、祈る方が有益であると信じた理由にもなっていました。もしも神が火山の怒りを鎮めたならば、寺院の高い天井は葉で出来た農家の屋根よりも脅威であり、畏れ多いものになるでしょう。しかし、神が火山の怒りを鎮めないとしても、誰もわざわざ山小屋へ出発することはしないでしょ。かくして彼らは賛美歌を教会で歌い、逃げ出すことは考えれば考える程、不条理なことになるのでした。奇跡を信じる者にとっては、北フランスのソットヴィルの平原にいることも、ベスビオ山の噴火口の縁にいることも同じことなのです」とアランは言っています。このことは人々の信仰が単なる科学思想に基づくものでないのは明白ですが、それ以上に重要なことは人々が信じる力が生活の力にもなっていくことです。ローマ皇帝を恐れる人々の恐怖心とは異なり、「大災害が繰り返される国であっても決して人の住まない不毛の砂漠にはならず、冷めた溶岩流の傍にやがて太陽の光に暖められる一軒の小屋が建ち、葡萄の実が熟し、教会には鐘楼が建ちます。鐘の音は人々に希望を与え、葡萄の木は厭な思い出を忘れさせて呉れます。そして、子供たちも大きく成長していきます」とこのプロポを結んでいます。

現実を正しく見て、科学的思考を重視したアランでしたが、彼は人々の生活から宗教を全て否定したマテリアリストでも社会主義者でもありませんでした。この現実を正しく見ることは、この現実生きる人々、生活する人々を肯定することであり、現代社会においても尊重すべきことです。苛酷な自然の力を前にして生活を奪われた人々に対して、アランは神の存在を否定しません。天災や事故に遭遇してもそこから立ち直り、再び葡萄が実る豊かな大地になることの方が思想よりも大事ではないかとアランは言っているのです。ベスビオ山の度重なる噴火によりその土地を放擲するマテリアリストよりも、自然の脅威を脅威とせずそれを乗り越えていく信仰の力によって、豊かな農作物や人間の成長を齎す宗教の真の力を

アランは認めています。それは徒に人間に恐怖心を植え付け、その恐怖心によって社会秩序を維持させようとしてきた邪宗とは異なります。自然を前に逃避したくなる気持ちに勇気を与え、敢然と立ち向かっていく強い意志を所有した冒険者と同質の精神です。冒険者は自然に向かって挑戦する者ですが、決して人間を攻撃する者ではありません。人間が恐れを感じたり暴力的脅威を感じる宗教や教団というものは、必ず宗教の本来性や本質を喪失させた邪宗に間違いありません。

我が国の天皇制についても同じです。天皇を神として、嘗て朝鮮半島や不毛の大地であった満州をナポリ地方の人々のように緑豊かな土地に変えていった人々の天皇制であるなら、アランも認めたことでしょう。しかし、神格化された天皇への恐怖心から戦前の社会秩序を構築していった為政者たちや軍人たち、そして人間感情の豊かな表現をも隠蔽した芸術家たちを蔓延させていった天皇制であるなら、アランは決して放任しなかつたろうと思います。真っ暗な階段で大理石の立像を見ても、白い幽霊を見たという人は多いのです。大理石の立像と分かれば恐怖心は鎮まりますが、白い幽霊だと信じる者は地獄のことも頭から離れず、数々の迷信の中で自由な意見や行動を縛りながら生きていくことになるでしょう。それは自然の猛威に立ち向かうナポリ地方の人々の信仰と全く異質と言わねばなりません。

同様に、我が国においても三宅島の雄山の噴火が鎮まれば、島を離れた人々の中にも島の生活へ戻る人々がいるに違いありません。同様に、平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災の被災者たちの中にも、再び大津波が来ると分かっているにもかかわらず、再度その地に我が家を構築する人々はいるでしょう。何故なら生まれた土地を大切に思い、鎮守の森を護ろうとする人々の心は、確率や打算を超えた人間の感情であり、意思であり、英知でもあるからです。それは必ずしも天皇制のためではないでしょうし、白い幽霊とは異質な宗教に近い感情が成長しているからに違いありません。何故なら、大理石の立像にも宗教は必要であるからです。(完)

## 六 王者支配制的な人間

---

我が国の天皇制の話をもう少し続けてみたいと思います。天皇は要らない、天皇は最早憲法で規定すべきものでもないと言ったとき、私が或る勢力の脅威を感じて恐怖心を抱き、我が国の社会がそのような構造であるならばそのときこそ本当に天皇制は破棄する必要があると考えます。人々の自由な意見の表出が可能でない社会は、確かに現代でも多くの国々において存在しています。そして、人々の偏見によって暴力的脅威を感じる人々がいることも否定出来ません。しかし、仮に天皇制を否定する意見が力を得ることによって、我が国の人々は他国から身の危険を感じるでしょうか。ユダヤ人のように他国の人々から迫害を受けることに繋がるでしょうか。事情は反対です。天皇制を否定すれば、アジアの国々からより強い信頼を得ることになるのは自明ですが、私たち日本人は天皇を何時までも神のように絶対的存在者として心の中で見做し、そのような見方に矜持すら抱く者が以外と多くいることも又事実です。天皇は日本の誇りであり、〈象徴〉であるという訳です。日本国憲法改正を唱える必要があるならば、正に第一条〈天皇〉を削除すべきだろうと考える人々の意見も加味すべきだろうと思います。宗教は憲法で護っても構いませんが、立憲君主制の国制でないのなら天皇を憲法で規定すべきものでもない筈です。憲法第一条を削除したために、仮に一部の人々の間で軍国主義が復活したとしても、そのときこそ民主制に基盤を置く共和制が健全に機能することになるでしょう。国制が健全に機能することは、反対意見の人々を一掃させて仕舞うことではない筈です。

勿論、手続きに時間がかかる多数決で決定していく民主制が、常に最良の優れた制度でないことは、既にプラトンの時代から言われてきました。民主制の国家が自由の極限に至れば「その自由放任のために、さらに大きく力強いものとなって、民主制を隷属化させることになる。……過度の自由は、個人においても国家においても、ただ過度の隷属状態へと変化する以外に途はないものようだからね」（プラトン『国家』藤沢令夫訳）とプラトンはソクラテスの口を通して述べています。寡頭制国家は民主制国家へ変化させ、やがて自由の風潮がすみずみにまで行きわたって〈無政府状態に侵されざるをえないこと〉を指摘しています。民主制国家の極限の状況を次のように言っていますが、正に現代の我が国の教育に酷似した状況でもありますから引用してみます。

「先生は生徒を恐れて御機嫌をとり、生徒は先生を軽蔑し、個人的な養育掛りの者に対しても同様の態度をとる。一般に、若者たちは年長者と対等に振舞って、言葉においても行為においても年長者と張り合い、他方、年長者たちは若者たちに自分を合わせて、面白くない人間だとか権威主義者だとか思われないうちに、若者たちを真似て機智や冗談でいっぱいの人間となる。」（前掲書）

やがて、民主制国家は僭主独裁制へ変化することを既に、紀元前三七五年頃にプラトンは書いています。僭主独裁制が最悪の国制であることを念頭に置けば、民主制国家は最悪の国制への前兆でもある訳です。民主的にドイツ国民によって選出されたヒトラーは、その例証でもありました。しかし、最悪の国制が最悪とならない状況が三つあると考えられます。つまり独裁制が最悪とならない状況です。一つ目は戦争です。戦争の時は、その結果を期待すればするほど独裁制は最良に機能していきます。攻撃地点を皆で民主的に時間をかけて協議すれば、敵は姿を消して仕舞うでしょう。作戦は秘密裡に進めなければなりません。ところが国制は皆が理解している方が、理想国家に近づくためには必要です。それ故に法律は、独裁者が秘密裡に営為していく戦争を前提に作られるべきではないこともプラトンは述べています。独裁者は戦争が好きです。又、独裁制を志向する政治家も戦争論議が大好きで、他国の脅威を持ち込もうとしたり、敵を必ず仮想しないと納まりません。

反対に、理想国家の立法者は「自由な国家、みずからのうちに友愛を保つ国家、知性をそなえるもの」である必要があり、隷属と自由が極点にまでいかない状況、つまり戦争や無政府状態を前提にすべきではありません。それに気を付けて「僭主として振舞うことの適量」が大切であることも『法律』の中でプラトンは述べていますが、独裁制も適量であれば最悪とならない二つ目の状況です。

そして三つ目の独裁制は、〈自己の内なる国制〉に対して営為されるものです。自らの欲望や快楽は、詩作と同様に衝動という心の動きに水をやって育てるように私たちはそれ等を支配することによって、〈すぐれた幸福な人間〉になることをやはりプラトンは述べています。詩作については当初、理想の国家から追出したのですが、〈何らかの韻律〉を用いた作品なら帰国を認めています。つまり自由を極限にまで至らしめた形式である口語自由詩は、プラトンの言う理想の国家からは追放しなければならないものようです。そして、口語自由詩は必然的に無政府主義的精神を志向することになるでしょう。しかし、詩が「国のあり方と人間の生活のために有益であると論じること」には、韻律なしの言葉が許されます。名誉や金銭や権力の誘惑によって「正義をはじめその他の徳性をなおざりにするようなことがあってはならない」こと、それ等と同等に〈詩の誘惑によって〉そそのかされてはならないこともプラトンは言っています。詩の誘惑が、名誉や金銭や権力の誘惑と同等でもあると既に見抜いていました。

そして、理想の国家から快楽の詩を追放したように、天皇制が我が国の人々の精神にとっても単に快いだけであるなら、やはり〈子供じみた恋〉に落ちないように、理想の国家を求める者は警戒しなければならないでしょう。因みに、理想の国家に対して自分自身は如何なる人間が最も優れていて正しく、最も幸福であるか、プラトンは第一位から第五位までの人間を判定しています。第一位は自分自身を王として支配する王者支配制的な人間、第二位は名誉支配制的な人間、以下順番に寡頭制的な人間、民主制的な人間、そして最後が僭主独裁制的な人間です。「最も劣悪で最も不正な人間が最も不幸であり、そしてそれは、最も僭主独裁制的な性格である上に、自分自身と国家に対して、実際に最大限に僭主（独裁者）となる人間のことであり」と言っています。王になることは決して独裁者になることではないのです。我が国の人々も一人ひとりが王になることが重要です。天皇を人として尊敬することとは別に、一人ひとりが自分自身を支配する王になることです。

理想の国家への道は困難な道ですが、天皇を人として尊敬することと、天皇制を憲法によって規定することとは少なくとも異質です。天皇を国制に利用する時代は過去のものにしなければなりません。勿論、アランが一九〇六年四月一七日のプロポで言っているように「人の意見というものは小さな風船です。上昇したり下降したりして空中に舞っているようなもの」であって社会の中で確定するものではありませんが、決して〈破裂させるもの〉であってはなりません。（完）

## 七 平等の社会

---

一七八九年のフランス革命において、危うく首を切られるところであった祖母をもつ或る侯爵夫人の境遇について、アランは愛しい気持ちを抱きながらも冷静な思考を展開していきます。

「革命という暴力を侯爵夫人であるあなたは堂々と反対したのですが、〈公平〉に敬意を表さなければなりません。あなたの眼には涙が浮かんでいます。……全ての人間は平等です。それは権利であり事実としてそうである、という安直な言葉は観念論者たちの愚かな格言に過ぎません。選挙においては、全員が投票出来るだけで十分だったのでしょう。しかしこれも最悪で、一人ひとりあなたのことを考えずに、自分のことや身内のことを考えて投票するものです。侯爵夫人であるあなたの権利と小作人たちの権利を比べてみて、平和な時代を判断する田舎の人々は、あなたのテーブルの下座に座ることを潔しとしません。最早、あなたは尊敬されていません。尊敬なんてとんでもなく、あなたを養い、二頭の栗毛と四十頭の馬の代金を支払っているのは農民の彼らなのに、あなたは感謝の言葉である有難うも言いません。あなたはもう愛されていないのです。これは最後の一撃であり、感じやすい心にとっては一番残酷なことです」と一九〇六年五月一七日のプロポの中で、アランは伯爵夫人に言います。そして、次のように続けます。

「確かに、伯爵夫人であるあなたのテーブルに皆が着くことは、あなたには楽しいことでした。司祭はにこやかな顔をしてお世辞の一つも言うでしょう。彼は人間の魂を教える先生の筈です。でも、悲しいかな！ 司祭は最早、魂を教える先生ではなくなっていました。司祭の育ちは悪く、あなたに沢山のお金を要求します」。アランは侯爵夫人に同情します。宗教が悪いのではなく、司祭が悪いのです。……伯爵夫人を豪華な女王の座に着かせたいと思うのですが、私たちはそんなにも金持ちではないから、実際には出来ないだろうと言います。縫い物をして夜を過ごすジェニーや、雨の中や泥の中を重い荷物を引くサシエットがいる限り、私たちは伯爵夫人のために何もやってあげられないでしょう。私たちの財産には限りがあって、無限ではありません。或る者が満足感と権力と楽しい余暇を手に入れれば、他の者はそれを失わなければならないだろう、とアランは財産や権力や余暇というものを無限のものを見ていませんでした。つまり或る者が利益を得て経済的満足感を得るならば、他の者は損をすることになります。同様に、権力を得る者がいれば権力を失う者がおり、休暇を取る者がいれば彼の不在を補うために労働する者がおります。このような思想はフランス革命が齎したのものであるとアランは示唆しています。フランス革命は、戦争によって廃墟となった都をゼロから再建する歴史的な大異変などではなく、限られてある財産を平等にするための〈公平〉に基づくものであったこと、そのことは現在においては十分に明白であると言っています。

この思想を理解するのは、〈神の前の平等〉を信じる者にとっては困難だろうと思います。何故なら、神は限定の思想を許容せず、全てのものを永遠の尺度に置き換えることを可能とするものであるからです。〈あなた〉と〈私〉の間が不平等であっても、神の前に出れば〈あなた〉と〈私〉は永遠の神の前で平等になるのです。女王である〈あなた〉も、農民である〈私〉も神の前では平等でしたから、フランス革命前までの社会にも、実は平等の思想は存在していました。しかし、それは永遠を思考する人々の信仰や精神の中にしか存在していませんでした。科学の発達や産業革命が始まれば、当然のこのように永遠への不信が働きます。「神は死んだ」と言ったニーチェの有名な言葉は、永遠を志向することによって湧出していた人々の希望も円軌道や循環の思考に変容していったために、その先には実存的不安という陥穽が待ち構えていました。永遠を見ようとする者は自らの存在も永遠に繋がっていましたが、循環論を思考する者にとっては矛盾、パラドックス、不安ばかりです。希望や期待というものが、時間とともに喪失されていきます。シシュフォスの石のように、同じことの繰り返しには希望というものが失われていきます。人々は〈彼〉という永遠のものを志向する代わりに、〈あなた〉という相對のものを求めます。〈彼〉は神であるこ

とが可能ですが、〈あなた〉は神であってはならず、ざらざらとした現実世界の中で愛する人でなくてはなりません。近代合理主義精神は、恋愛の新しいスタイルを生むことになり、スランダールやフロベールの小説を皮切りに、今日まで数限りない〈あなた〉と〈私〉の様々なスタイルの恋愛小説が生まれています。そして、現代小説においては神の介入してくる余地は殆ど無いまでになりました。太陽の周りを回る地球上においては神は不在です。神は循環論の外にあります。

「ソクラテスは本当のことしか言わないが、プラトンは嘘しか言わない」と言うとき、そのプラトンが「ソクラテスは真実を言う」と言うなら、ソクラテスの言葉は真実か？ それとも虚偽か？ という矛盾に見る循環論を超えて神はあります。しかし、フランス革命の思想背景の一つとして考えられることは、人間は神不在の平等を志向するようになったということです。ソクラテスは真実だけを言う者でもなければ、嘘つきでもありません。神のような永遠性が破棄されます。勿論、プラトンも嘘ばかり言う人ではありません。蛇足ですが、プラトンの著作がなければ、ソクラテスの思想も虚無のものになった筈です。しかし、虚無も又、永遠を有していますから、ソクラテスのようにイエス・キリストもブッダも孔子も、自らは何も書きませんでした。そして漢字という文字が輸入される以前の我が国も、八百万の神の国で、至る所に神がおりました。言葉にとって大切なのは何を言っているかよりも、誰が言っているかかもしれないのです

巨大な虚無とともに生きた聖人たちの思想は、言葉を通して現代に蘇りますが、言葉は永遠の思想に成り得るのでしょうか？ この疑問は多分、良心的な現代知識人たちの心の中に何時までも残ることになります。そして、言葉は思想そのものでないことを理解することになるでしょう。それは自由であることが一向に平等と矛盾しないように、言葉は思想の一部でしかないことを理解するでしょう。それは表から見たものと裏から見たものとの違いではないのです。表と裏を同時に見ることが可能であっても、思想を数式のように言葉だけで理解出来ると判断したところに近代社会の重大な誤謬がありました。しかし、それを可能にするのが博愛でした。聖人たちの思想においては、宗教的精神であり、無私であり、仁という永遠性でもありました。それは沢山のお金を要求する司祭たちとは無縁でした。アランは伯爵夫人に永遠性を見ることが出来なかったばかりに、農民と平等であることを要求したのだと思います。

人間の評価は社会的身分と同一視され、生まれたときの身分によって決定されていたのが封建社会でした。王の子供は王に成り、農民の子供は農民に成りました。平等の社会は、それ等の身分を破棄させる自由を一人ひとりに与えました。基本的に人間は生まれながらに平等であり、人間としての評価は少なくとも生前は保留されるべきものであることを平等の社会は教えています。死後何年も経ってから正當に評価される偉人がおります。取り分け、芸術家や音楽家には大勢おります。絵の具や楽音には矛盾ということはありませんが、言葉には矛盾が生じますから、言葉を数学的に理解したり修辞学だけでは、決して真の思想や宗教的精神を身に付けることは出来ないでしょう。平等であることは、自由な精神を必須としております。何故なら自由であることは、社会的身分が固定化された封建社会よりも、平等の社会のものであるからです。自由は不平等を生むという安直な思考は、お金を要求する司祭のものと同質であり、永遠性が欠如しています。(完)

## 八 コルネイユの『ル・シッド』

一九〇六年六月六日は、ピエール・コルネイユの生誕三百年を記念する日です。恐らく、その日に書かれたと思われるプロポを六月八日付けのルーアン新聞に掲載したアランは、その中でコルネイユ劇を読むように勧めています。そして、アラン自身は有名な悲劇（当初は悲喜劇と言っていました。）『ル・シッド』を読んで、想像世界へ這入っていきます。

『ル・シッド』は、スペイン貴族ドン・ディエーグの息子ロドリグとドン・ゴルマスの娘シメーヌの恋愛を縦糸に、カステーユ初代の王ドン・フェルナンへの忠誠と名誉を横糸にして展開されていくコルネイユの出世作です。一六三六年頃に初演され大成功を取りますが、〈一日のうちで、同一の場所で、一貫した筋〉で展開しなければならない古典悲劇の三単一性の法則を厳格に遵守していなかったために、一六三五年に宰相リシュリューが創設したばかりのアカデミー・フランセーズからも抵抗がありました。コルネイユはその後数年間筆を絶ちますが、ラシーヌの作品と並んでフランス古典劇の代表作となります。その梗概は次のとおりです。

ロドリグとシメーヌは幸福な婚約をしますが、双方の父親が対立し諍いとなり、ゴルマスから平手打ちを受けて侮辱されたディエーグは、自分の息子ロドリグに復讐を命じます。ロドリグは初めての決闘でゴルマスを殺します。恋人のロドリグを愛していたシメーヌですが、初代の王ドン・フェルナンに懲罰を要求します。折しも中世スペインに侵略してきたイスラム教徒のモール人との戦いに大勝利を取めたロドリグは国を救い、敵の王を捕らえて凱旋し、国民的英雄になります。そして、シメーヌは彼女に思いを寄せるドン・サンシュとロドリグを決闘させ、勝った方との結婚を約束します。その真相は劇の最後まで明らかにされませんが、恋人ロドリグの偽りの死によって、彼に対するシメーヌの愛が浮き彫りになります。

アランは、この物語を独自に想像します。しかし、「宮殿の室内で暮らしたこともなく、王たちの側にいたこともありませんでしたから、うまく想像出来ません。劇が演じられるフランス座の舞台を思い描きません。それは舞台美術の厚紙で出来たものですが、恋人の二人はスペイン人のように見え、高貴な振舞いは自分の裡にある動物的なものを抑えてくれます。しかし、この動物的なものを調教するのが下手でした。ロドリグが勝利を語り、戦場の星々の薄暗い明かりについて話すと、私の想像力は水の匂いを嗅いで探し出す馬のように、実際の戦場を跳びはねます」とアランは自分の姿を発見して言います。

戦場においては喧嘩っ早くて、恐怖心を抱く以上に怒りっぽい人間が勇敢と見られる節があります。しかし、怒りっぽいのは皇帝だけで良く、そのような兵士は、たちの悪い兵士でしかありません。真に勇敢な兵士は、命令に従順でなければなりません。従順は戦争における美德ですが、平和のときも服従と平静さは美德である、とアランは逆説を言います。コルネイユは、王のドン・フェルナンに対して傲慢に成ったゴルマスを弁護するドン・サンシュの口を通して、次のように言っています。

「ドン・サンシュ 大功になれた者は、服従に身をかがめることがむずかしゅうございます。服従といえばすぐ屈辱と考えるのでございます。」

（第二幕第六場・秋山晴夫訳）

動物の世界に戦争はありません。つまり平和も無いということです。平和も戦争も、お互いに似ています。人間の弱さに対する平和、動物の獐猛さに対する戦争のように、似ても似つかない関係のものでしかありません。大部分の人々は平和を愛すると言います。正にその時が、戦争の惨禍から一番遠い処に位置しています。何故なら、彼らは戦争を決して望まず、拒絶するからです。例え重大事件が起きて戦争になろうとしても、少なくとも戦争を回避する勇氣を持っているからです。戦争は服従することによってしか

始まりませんが、服従は平和の美德でもあるという逆説をアランは言っています。戦争を前提とした状況で作られた法律に従えば、戦争が始まります。平和を前提とした法律に従えば、平和が保持されます。独裁者は何時も、戦争を前提とした法律を作ろうとします。僭主独裁制を最悪の国制と判断したプラトンは、従って、法律は平和時を前提に制定されるべきであることを強調しています。

逆に、戦争の恐怖を利用して自らの権力の保持を企図する為政者は、必ず自国の法律に戦争を前提とした法律を加えようとしています。しかし、自国を守るのに法律は不要です。他国に侵略されれば、法律がなくても人々は戦います。アランは軍国主義に反対し、あれ程共和制を支持しましたが、第一次世界大戦が始まると決して若くない四六歳の体に鞭打って、真っ先に自ら志願して参戦しました。それは正に人間の弱さからではなくて、時代に服従する真に勇敢な精神を自ら証明する行為でもありました。

平和を愛し、平和を守るのは、動物的集団に迎合する弱い精神ではありません。あるいは個人的恐怖心に起因する動物的怖れからでもありません。このことを良く知っている兵士になったばかりのアランは、戦場における不安が全て抽象であり、実感としての恐怖は殆ど無いことを後日告白しています。『ル・シッド』を読むアランは、今は良き兵士として従順に訳もなく走り回っている男の姿を想像し、中世スペインの戦場で仰向けに寝かされた一兵士を想像します。ペドロという驢馬引きです。「彼は山の小径、葡萄の木で一杯の宿屋、冷たい泉、マニユエラという安宿の女中、そしてシャンソンのことを考えていました。星々の光が弱くなっていくと、これ等のイメージもすべて彼から消えていきました。日の出とともに、一兵士であるペドロの姿は、彼の裡から消えていきました。悲劇はこうして終わりました」と書いてこのプロポも終わります。

勿論、ペドロは『ル・シッド』に登場することがない人物で、アランが想像した一兵士です。ロドリーグはモール人たちの襲撃を追い払い、二人の王を捕らえて凱旋して英雄になりますが、ペドロは日の出とともに無名の儘死んでいきます。「悲劇はこうして終わりました」とアランは書きましたが、闘いと服従、正義と恋愛が『ル・シッド』のテーマです。闘いにも服従にも悲劇はあり、正義にも恋愛にも悲劇はあります。しかし、父を殺され、決闘で愛する恋人を殺す男との結婚を約束するシメヌの悲劇は、ペドロの悲劇のように自らの運命と闘うことのない悪徳であるかの如くアランは語っています。その後のプロポで、アランは十八世紀のフランスのモラリストであるヴォーグナルグ侯爵の言葉を引用して、平和についての結びの言葉としておりますからご紹介します。「悪徳の人は戦争を煽り、美德の人は闘う」（一九一二年一月八日のプロポ）

戦争を煽る人間は、現代にも沢山見受けられます。そして、独裁者は平和の時代でも戦争の可能性をちらつかせます。「備えあれば患いなし」は、悪徳の人が好むことわざに違いなく、「内憂外患」のことは未解決の儘です。独裁者は、きめ細やかな運用にならざるを得ない最善な対応よりも、芝居がかった一刀両断的手法で幅を利かせるようになります。〈備え〉をちらつかせるのは、独裁者ばかりではありません。平和主義者も、常に戦争の惨禍ばかり口にして、戦争の可能性を誇大に吹聴します。そして、実際に戦争になれば山奥へ逃げ込むのでしょう。第一次世界大戦の勃発と殆ど同時に志願兵となって参戦したアランの行為は、闘いが美德であるための当然の帰結でもありました。(完)

## 九 社会主義とユートピア

---

真実は未来という仮定を語ることによって、より鮮明な姿を現すことがあります。一九〇六年六月二〇日のプロポで、天使ジュスラッドはアランを未来の「一九五〇年までの時間の線上に引っ張って行き」そこに忙しく働く男を眼にします。その男というのは、シャルル・ペローが書いたコント「長靴を履いた牝猫」に登場する裕福なカラバス侯爵の末裔が、自分の土地を売りに出しているところでした。彼は、「会員数が少なくとも十万人という協同組合が買い取るようにして、一週間で五万フランの収入を手にすることが出来た」男でした。土地転がしはフランスでも十分予見出来ることでしたが、問題はその土地に働く小作人たちでした。アランはその男の口を借りて、二つの選択を提案します。

その一つは、「今まで通り小作人の儘でいることが出来ますが、この場合今までの義務もその儘負うものです。その上、借金もその儘にして置かれ棒引きされることはありません」。

もう一つの提案は、「小作人たちが生産した農産物は全て協同組合の店へ収めるものです。その代わりにその店にある機械、器具、衣類、履物、缶詰、コーヒー及び甘いものは全て必要があれば手に入れることが出来て、その他に、病院で医師や看護婦や薬、そして旅行やお祭りの行事にもお金を使うことはありません」という提案です。お金を必要としませんから、お金が無くて済むのです。「小作人たちはそれまで屢々、社会主義者会議の意見を聞いていましたが、忙しく働くこの男の提案は十分間で話されたものでした。しかし、その影響は大きく、それまでは小作人たちは〈友愛〉に溢れ優しく微笑していましたが、その時からは少しばかり厳しい顔付きになっていきました」と書いてアランはこのプロポを結びました。

この話はアランが想像した未来話ですが、社会主義国家も、もしかしたら仮定でなければならないのかもしれない。〈ユートピア〉とは、正しくそれは何処にも存在せず、それは頭の中の観念上の産物であり少しも現実のものではない、とアランは言っています。しかし、アランはユートピアを大事にします。現実でないものを大事にすること、それは人間だけに許されているものでもあるからです。

「私たちが学校で習う幾何学も、一種のユートピアです。何故なら、表面のみで厚みのない世界は、現実には何処にも存在しないからです。幅のない線も、完全に真っ直ぐな直線というものも、完全に丸い円というものも現実には存在しません。

しかし、幾何学はそのことに心を留めません。幾何学は自然の中にはなく、自然を仮定したものです。かくして美しい定理に到達し、それが有益であることが分かるのはその後です」とアランは言います。真の功利性とは現実の中に発見するものではないという逆説が、詩作の真実をも明らかにしているのかもしれない。功利性という面から言うなら、詩も幾何学同様に現実のものではないのかもしれない。美しい形式に到達した詩は、尚更現実のものではないのでしょうか。詩が表現する悲しみは、現実の悲しみではないという仮定が、幾何学の定理のように自己の存在を証明するものになっていくのかもしれない。詩人は言葉の幾何学者でなければなりません。

「アルキメデスが楕円を研究しているとき、彼は一種のユートピアを創ったのであり、そのユートピアから天体の軌道というものをより正確に示すことを可能にしたのです」とアランは言います。「光の屈折を研究したかったデカルトは一つの仮説を立て、その上で理論を進めました」が、その仮説が仮説である限りは自分を騙していることになります。しかし、単に間違っているとしても、その定理は幾何学上の機械的な真理を含むときがあります。「狂人が火事だ！ と叫んだとします。もしもそのとき、偶然にも家が燃えているなら、その狂人は間違っていない。この方法によってデカルトも自らの思考を懐疑し間違っていると思った瞬間に、その狂人が叫んだ真実よりももっとはるかに正しいことになっているのです。

私が社会主義を愛するのもこのためです。人々が社会主義のことを述べて、そして何度も何度もそれに

反論することを私は望んでいました。そして何処かの屋根裏部屋で社会主義を変革する夢想家がいることを希っている」とアランは言います。「多分、社会主義者は幾何学者のように、少なくとも単純化と抽象化の行き過ぎによって間違っています。しかし、最悪の事態になっても、例え全てが間違っているとしても、少なくともその間違いは理由がはっきりしています。実際の型に嵌った慣習やステレオタイプの思考よりも、間違った思考の方をより愛します」とアランは言っています。思想とは思考の結果や書かれたものではなく、その人の思考を形成する血液であり感情です。社会主義が現実に存在しなかった時代において社会主義のことを言う者は、少なくとも〈慣習〉に流されていない者であり、思考する者でした。真の思想家とは思考の残滓としての結果のものではなく、思考している過程であり、人格のことだろうと思います。結果や成果は人格ではありません。思想家にも感情は大切です。「思想は感情の乾物である。失われてしまったものは、単に血液と水分ばかりでない。しかしながら永く保存に耐える」と萩原朔太郎は言いましたが、真の思想家や詩人は、思想に血液と水分を注入して蘇生させることを可能にする人であると言えます。アランは一九〇六年六月二日のプロポの最後で、次のような寓話を想像して書いています。「アルキメデスが或る日、弟子たちを教えていましたが、彼は間違えました。間違った結果を出したときにはロバが鳴き、アルキメデスの声を掻き消した時でした。ロバは正しかったのでしょうか？」

結果や成果だけを見ようとする競争原理崇拜者や勝利だけに意義を見出すプロ・スポーツ享楽主義者たちは、ロバが正しいと見做す者たちであり、思想家としての人格もなく、まして詩人とは言えず、やがては血液も水分も失った亡骸になるでしょう。(完)

## 十 武力と権力による文明化

黒人が住む国の文明化の始まりは、ヨーロッパの国の人々が大砲を撃ち銃を撃って行われましたが、アランが初期プロポを書いていた二十世紀初め頃は、大砲や銃による支配は終わり、「今は蹴るだけで十分」な時代であるとアランは一九〇六年七月二四日のプロポに書きました。その頃は平定の時代に這入り、そのときヨーロッパの国の人々は自国が支配する領土の地図作りにも一所懸命でした。

「地形学が好きな或る陸軍中尉（金モール二本）は、領地を測量し、角度を算定し、羅針盤と太陽と星で方位を調べ、何枚かの地図にして帰ってきました。その地図の一枚は渦のような所を記したもので、東から西へ細長く伸びていました。数日後に、同じように地形学が好きな大尉（金モール三本）は、同じ渦の地形や位置を調べ直す機会を持ちました。大尉は地理学的方法で地図を作り直してみましたが、水の広がりには北から南へ伸びていました。

この時、この業務を管理していた陸軍大佐は、中尉（金モール二本）を呼んで次のように言いました。「あなたは立派な地形学者です。あなたには理論と実行が備わっています。私に提出してくれた地図は大変明瞭で、完成度は申し分ありません。只、私がおあなたに指摘したいのは、間違いが一つあることだけです。あなたはこの渦のことを良く調べていますが、五番目の地図には東から西へ表示されています。しかし、実際は北から南へ伸びています」

もしも二人の地形学者の階級の金モールが同じであったならば、大佐は恐らくその渦の再調査をしなければならなかったでしょう。それだけで三十日はかかるだろうと思うとぞっとします。しかし、幸いなことに金モール二本に対して三本でしたから、渦は北から南へ伸びているのです。疑うべき理由は全て除かれました。このことを疑う人々は重い病人扱いされます」とアランは書いています。

真実は確かに金モール（階級）とは関係がない筈です。しかし、もしかしたら多くの結果や成果が金モールによって決定されているのかもしれませんが。我が国の考古学者たちも、都合の良い発見を自分たちの学問の発展に利用して、学校の教科書まで改めざるを得ない醜態を演じる羽目に陥りました。金モール三本の者の主張は、金モール二本の者の主張を退けてきた学問であり文明ではなかったのでしょうか。現代はこのことを反省する余裕すら失っているように見えます。何故なら、実際は渦が東から西へ伸びていたとしても直ぐに大雨が降って全く違う第三の渦の形にして仕舞うでしょうから、金モール二本の者にとっては決定的なものはなかなか見出しにくいからです。大至急に決定版の地図を作成して〈参謀部〉へ送らなければならないような状況は沢山見受けられます。「この渦の形という黒人女性は、〈参謀部〉の設置は真理を曲げることになるから望みませんし、そして金モール二本の陸軍中尉も望まないことでしょう」とアランはこのプロポを纏めています。

「生きることとは行動することです。懷疑は躊躇を生んで行動を殺す」とアランは言っていますが、確かに行動する者が疑いを抱いたならば行動は鈍くなります。兵士が上官の命令を疑ったら生きていけなくなります。教室で先生が教えてくれることを生徒が疑えば、生徒は勉強が出来なくなります。信じることは行動するための前提となりますから、兵士も生徒も上官や教師を信じることは必要であり、信仰を行う者にも神や教義を信じる心が前提になります。戦争も教育も宗教も、信じる心がなければ首尾良く成立しません。しかし、戦争が終結した後の平和な時代、教育を終えて社会へ出ていく者、信仰の生活から世俗の社会制度の中で生きる者にとって、他者を全て信じる心はやがて自己を失います。自己を存在させる能力や場所までも喪失しかねません。全体主義の単一的生き方から一人ひとりを大切にする成熟した個人主義を確立させる者にとっては、信じる心と懷疑する心、集団化と独立化という相反する状況を克服しなければなりません。公式は決して一つではありません。ここに現代の民主主義社会の困難があるようですが、

そのことを最も強く悩んだ時代がアランの生きた二十世紀初頭だったように思います。

第一次世界大戦が始まるまでのアランの初期プロポの問題は、大戦によって曖昧な儘保留されてきました。私たちが生活する二十一世紀の問題としても、再度考え直してみる必要があると思います。そして、一人ひとりを大切に作る心は、詩の世界においては取り分け抒情詩としてのジャンルを発展させてきたように思います。しかし、平和な時代にも軍隊の規律が保持されなければならないように、個性を大切に教育する教室においても先生の言葉を謹聴しなければならないように、葬儀に際しては厳粛に死者を祀らなければならないように、守らなければならない秩序や規律は、詩の世界においても存在するに違いありません。ところが第一次世界大戦後は、詩の世界ぐらい秩序や規律は無くても良いではないか、もっと自由であらゆる拘束を排除して良いではないか、何時も決められた法則に縛られることなくその時その時の判断を尊重すれば良いではないかと選択した結果、絵画や音楽の世界における美も脆弱なものになって仕舞いました。守るべきものを守る心は、詩としての美であり、精神であり、感情でもあります。

私たちの現代社会は一人ひとりが全員兵士になったり、生徒の儘であったり、信者になって教祖の言葉だけを信じてばかりいては、健全な社会を成立させる格率が枉げられてる不都合が生じてくるのは確かです。これに反して詩というものは一人ひとりが全員詩人になっても一向に構いません。寧ろ、全員が詩人であって欲しいと私は願っています。詩の世界はそれを許容するものであり、誰でも詩人に成り得ることを前提としています。詩人として選ばれた者たち、つまり〈呪われた者たち〉しか詩人になれないと考えるのは呪われた者たちの幻想であり独善です。誰でも詩人に成り得るための条件について言うなら、美には形式が必然であるように、詩にも制約や抵抗がある方が美しく、そして確かな自由があると実感するに違いありません。

我が国の発展は、二十世紀においては武力と権力による文明を背景にした、集団としての国家経済の発展と殆ど軌を一にしていた観がありました。しかし、二十一世紀における現代社会の発展は、アランが提出した国家主義と個人主義の問題も含めて、一人ひとりの人格に重心を移し、公共性を内包しながら成熟した個人主義に依るものであって欲しいと思います。そのためには守るべきものを守った詩の発展が一つのヒントになるでしょう。現代詩が守るべきものを守ったものであるなら、その表現は正しい者が報われる社会の公正と個人の真の自由のための触媒の役割も果たすようになるだろうと思います。(完)

## 十一 叙勲された哲学者

アランは、あらゆる文学賞や勲章を晩年まで固辞していました。その理由はおおよそ見当が付きませんが、明瞭な理由を言っているものになかなか出会えません。恐らく、ソルボンヌ大学の教授の地位を固辞し続け、生涯を高等中学校の一介の哲学教師の身分の儘であったことと、理由は同じだろうと思います。一九〇六年七月二七日のプロポは、叙勲のことについて書いてある数少ないものの一つです。

アランは、まだ若くて教養があって評判も高い哲学の先生と一緒に、「誰憚ることなく偽物の神たちのことを一緒に度々笑い、ひげを引っ張って正体を暴いていました。そして、何の偏見もなくそのことを信じていました。私（アラン）は年下の若い先生を理想的な市民の一人と見ていました。しかし、悲しいかな、彼は叙勲されたのです。叙勲という習慣は、心を乱すための重荷になります。神殿を壊すことよりも、感情を根絶する方が難しいことであることを良く知っています。不平等はこの世に古くからあります。平等というものは泣き叫ぶことしか知らない小さな子供の時だけのものです。勲章の赤い略章は、若者の胸にあれば良いのです。叙勲のように慣習になっている行為というものは、何か巧妙な理屈で人は正当化出来るでしょうし、特にボタンホールの赤い略章はいくらでも正当化出来ることを知っています」とアランが言うと、理性派の人は次のように言いました。

「この小さな略章は、最早何の意味もないと誰もが思っています。誰もが叙勲される時がくるでしょう。そうなれば叙勲信仰はなくなるでしょう」

これに対して心情派の人は、ひょうきんな声で答えます。

「私が叙勲を重要とは思わないのはそのためですが、その徽章を拒否することも一つの考え方ではあります。しかし、人はネクタイの形とか洋服の仕立てを拒否するでしょうか？ その若い哲学者は仕立屋によって服を着せて貰い、国家の大臣によって飾りを付けて貰っているようなものです」

そして、理性派の人は声を高くして言います。

「不平等は悪であり、階級も悪であることをあなたは良くご存じです。もっと大きな悪からそれらが私たちを守ってくれることが証明出来ないこともあなたは良くご存じです。全てが権力次第です。最低限の物とか道徳が無いのが悪なのです。そのことをあなたはご存じです。名誉という名が欲しいために犯す罪というものをあなたは知っています。あなたは今では軍服とか羽根飾りを信用していません。勲章の赤い略章は小さな軍服であり、小さな羽根飾りなのです」

しかし、心情派の人は言います。

「その考えは有害です。徽章を付けることは間違っています。しかし、叙勲を無くすのではなくて、完全なものにしなければなりません。宗教を救いたいと思うなら、見捨てる必要はありません。宗教を救いたいと思うや否や、反対に人は誠実や美点等、色々なものを持つことが出来るようになります」

「誰もがこの論理を理解していますし、誰もが一度ならずそれらのことを考えていました。しかし、私たちは再び古い習慣に落ち込んで仕舞います。自由な人間としての意志を、自由に振る舞うことの方が好きである」とアランは言います。

つまり叙勲は、自由な意志と発言を奪うに違いないとアランには映りました。国家から叙勲されれば、それに相応しい意志と発言が求められます。ルーアン新聞に毎日プロポを連載しているアランにとっては、時には国家を批判することもあるでしょう。取り分け、人心を惑わす宗教家たちに対しては毅然と批判していたアランです。アランは、名誉よりも一市民としての自由な言論を選択しました。正確に言うなら、叙勲は自己の創作活動にとって有害であり邪魔にこそなるが、決して有益でも有効でもないと判断しました。そのような精神の所有者は、何よりも自由な思考を愛する真の個人主義者であるとともに、フランス社会

への愛にも溢れている者でした。個人主義と社会性は決して矛盾する関係にはありません。一人ひとりの人間を大切に思考しない者が、反社会的な利己主義者の個人主義や独裁的思考へ成り下がることは良くあることです。

「美を求むれば則ち美を得ず、美を求めざる則ち美なり」という言葉が仏教にあります。民芸運動を発足させた柳宗悦が『法と美』の中で紹介しています。美への執心が、逆に最高の美を遠ざけていることを、茶器の最高の名器である井戸茶碗を譬えにして指摘しています。実際に井戸茶碗を作ったのは、朝鮮の貧しい陶工たちでした。彼らは美を意識して井戸茶碗を作ったのではありません。只の茶碗を何の思い上がりもなく自由に作っただけでした。その自由な精神が最高の美を生んだのです。この精神は工芸ばかりではなく、詩の世界にも通用するだろうと思います。何百年も読み継がれていく優れた詩は、名詩を意識して創ったものではありません。技巧や形式には限度があります。そこには自由な感情表現とそれに合致した形式の調和があります。因果律と論理性で思考する知性は、この自由と調和を破壊していないとも限りません。感情の根源となる人間の水分と血液を喪失したところに美があるとも思えません。恐らく美しい心には、美しい水分と血液が流れているに違いありません。名詩を創ろうと思って名詩が生まれた例しがなく、実際には一行も書けないだろうと思います。「美を求むれば則ち美を得ず、…」の美を叙勲に置き換えて見れば、アランが叙勲を固辞したその理由も少しは理解出来るだろうと思います。(完)

## 十二 健康と病気

「美味しいものが欲しいときは、人は死なない」とゲーテが言っていること、そしてフランス文学史上最大の雄弁家の一人と言われる十七世紀の聖職者で作家であったボシュエの「戦う精神は肉体の主人であり、肉体を元気にさせる」という言葉は良く知られている、と一九〇六年八月三日のプロポでアランは言います。その前日に、アランは「病気に成りたくないと思えば、病気に成らないのだ」と力説している頑強な男に会いました。その場にいた人々は、男の話に賛成して何杯もビールを呑んでいました。勿論、アランはルアン新聞に毎日プロポを書くという日課がありましたから、呑むのはコーヒーかミルクだったのだろうと思います。アルコールを呑んで書いたプロポは、翌日読むと脈絡のない駄文だったのを反省して、爾来アルコールは殆ど口にすることがなかったと言われています。

アランは、頑強なその男に次のように答えたいと言います。

「私はあなたが言っていることに全く同感です。あなたが思っている以上に、そのことは厳密な意味で多くの真実があると思います。……人が酷い不快感に陥ったときの最初の影響は、行為するというやる気や意欲を奪ってしまうことです。最早、未来へ向かっての積極的な気力とか心配り、つまり意志というものがありません。幾通りもの可能性へ自分の存在を広げて行こうとする望みから程遠くなっていきます。反対に、縮こまり、閉じ籠もり、まるで病気に罹っているかのようです。その人の望みは夢見ることもなく眠ることです。かくして病人が最初に陥ることは、欲望を遮断して仕舞うことです。あなたが言うことはこのことを証明しています」

そして、アランは人間の意志と病気のことを次のように言っています。

「激しい苦悩の中にあっても、健康が酷く悪くならないと示してくれるもの、それは先見の明をもって未来を見ることが出来る人間の意志であり、目的と方法を整理しようと思えます。エネルギーな意志は健康の証拠です。それ故、精力的でありたいと望むなら、病気に負けることは大変に珍しいことです。

ゲーテのパラドックスが正しいことを説明するのは、今はもう容易いことです。危篤になった老人が、実際に精力的に生きることは不可能です。もしも老人に強い意志があったならば、老人は危篤ではないことを証明することに成るでしょう。

ものごとの影響と原因を混同しては不可ないことが分かります。人は望むから元気なのではありません。人は元気だから望むことが出来るのです。〈元気に成りたいと望めば、病気は治るでしょう〉とあなたが病人に言うなら、次のように言っているのと全く同じなのです。〈もしも体温が下がれば、あなたは病人ではなくなるでしょう〉

体温が下がっても病人であり続けることは、十分考えられます。しかし、病人でない者の体温は下がっています。反対に、体温が高い者は必ず何かの病気に罹っているのは確かです。私たちは病気になる健康を望みますが、元気な時は健康に感謝します。そして、健康は結果ではなく、何かの原因にならなくてはなりません。

日々の生活を惰性的に過ごす者は、日々の健康に感謝する暇もなく一日一日が過ぎていきます。病気になることの恐怖を抱きながら日々を送ります。〈悲観は気分のものであり、楽観は意志のものである〉とアランは有名な『幸福論』の中で言っていますが、悪いことばかり予想すると実際に悪いことが起こりやすくなることは良くあることです。つまり円という心の周囲が楽観によって長くなって広がれば、良いことが沢山起こる可能性の高い円の面積が増大するようなものです。気分によって流されて悲観すれば、円の周囲も縮こまって面積が狭くなります。同様に、未熟な自意識過剰の偏狭な自我による心は円にはならず、周囲が楽観によっていくら長くなっても決して面積が広がらない扁平な楕円となるでしょう。余分な不幸を背

負い込むことになるかもしれません。

誰も病気には成りたくないものです。ですから病気になることを恐れます。そのために色々な予防に励むことは好ましいことです。しかし、必要以上に病気を恐れる者は、恐れる度合いが高ければ高い程病人に近くなっていきます。人間の不幸は希望をなくすことにあるとアランは言っています。譬え病気になっても、幸福は人間の意志によって病人に宿るかもしれないのです。詩や俳句や短歌は、そのことを十分に可能にしてくれます。或いはライ文学はその証左の一つでしょう。刹那的で悲観的な気分流されることなく、継続させる意志の力で人間は美しい感情を育てることが可能です。抒情の誕生です。(完)

### 十三 幸福は模倣から

---

演劇を見て陶醉する経験は殆どの方が知っています。多少なりともその陶醉は長時間継続します。「それは私たちに役者の演技を通じて模倣を齎す情熱として定義出来る」とアランは一九〇六年八月四日のプロポで言います。芸術ばかりでなく、「あらゆる物事は模倣することから始めなければなりません。子供は模倣することによって自我を形成し、確立します。芸術家は始めにコピーを作らねばなりません。そのことは感情の面でも真実です。小学校や中学校を卒業するとき、私たちの裡に自然に所有しているのは観念よりも遥かに多い言葉であり、情熱よりも遥かに多い演説の台詞です。一人で生活するとき初めて行う仕事も、自分の感情を話せる言葉の整理にあります。私たちが選択するのは、自分のために存在することではなくて、他人のために自分を演じる役割です」

大人になるためには、職業に就くのが分かりやすいでしょう。社会において自分が存在出来る〈場所〉の必要性をアランは言っていますが、自分は必要とされているのだと思考する能力を社会性と言っても良いでしょう。

「出演料が十五スーの脇役たちが洋品店へ這入るや否や、彼らの眼が向かうのは三重宝冠の教皇の冠でしょうし、両手は気高く王杖を握ろうとして剣を払い、銀色の厚紙で出来た斧を輝かせようとするでしょう。これらの全ては彼らが望めるものではありませんが、そういう権力の印を彼らが望んでいることを皆知っています。しかし、演技に必要なのは外見だけですし、彼らが受け取る出演料は何時も十五スーです。

このようにして人は一つの性格を選択することになります。店には沢山の洋服があります。王、大臣、枢機卿、医者、弁護士、判事、アカデミー会員、教育者たちのものです。そして、各人の試行は想像の中で散歩し、行動し、話し、命令し、裁き、弁護し、統治しますが結局は一つの役割を選択し、出来得るならばそれを身に受けて模倣します。

従って、それは感情のためです。考える術を心得る前に話す術を私たちは心得るように、私たちの感情を絵に描いてみようとする前に、私たちは描く術を心得ているものです。私たちは愛を知ろうとする前に、恋人が言うことを大変良く理解します。大司祭が単に余計なことを知ろうとする前に罪を赦す如何なる雰囲気も又、極めて有り難いものです。それ故に、実体験を誰が話すことが出来るのでしょうか？ 多分、そんなことをするのは何処かの浮浪者です。しかし、浮浪者が浮浪者としての役を大袈裟に演じていない、と確信をもって言うことも出来ない」とアランは言います。

会社がうまくいくには一人ひとりが自分の役を上手に演じることです。つまり事物に働きかけるプロレタリアートと、人間に働きかけるブルジョアの各々が上手く活動することによって会社は業績を上げることが出来ます。商品という事物の性能が幾ら高くても、生産する工場ばかり作ってもそれが売れなければ駄目です。反対に、商品を販売する営業部員が幾ら腕を上げて、商品の質が悪ければ話になりません。アランは人間の社会性をプロレタリアートとブルジョアという二種類に分類しました。発条や歯車という〈事物〉に働きかける時計職人、野菜や肉に働きかける料理人、メスをもって内蔵に働きかける外科医はプロレタリアートです。時計を顧客に販売する店員、料理を運んでお客にサービスするボーイ、患者の問診をする内科医は、皆〈人間〉に働きかけますからブルジョアです。両者の関係を、搾取する側と搾取される側という経済的社会的階級として捉えなかったところにアランの思想の特色があります。プロレタリアートとブルジョアは、両者が各々その能力の特性を十分に発揮することによって集団や社会が好転するという思想です。そのためには幸福であることですが、それは調子の悪かった胃の具合が良くなることで幸福であると信じることでもあるとアランは、次のプラトンの言葉を引用して言っています。「人は金持ちで、力強く、権力を持っているように見えることを良く望むが、誰も幸福そうに見えることを望まない。でも

実際は幸福であることを皆が望んでいる」

これに対してアランは、「それが本当のことかどうか知らないが、もしも或る人が幸福と見做されるとするなら、胃の調子が良ければ、最後には幸福であると信じるでしょう」と簡潔明瞭に言っています。役者の台詞を模倣して役者に成り切るように、芸術が模倣により始まるように、幸福は幸福という感情を模倣することによって齎されるのかもしれませんが。役者の感情を手に入れるように、幸福という役者の感情を模倣することによって、最後にはそれを手に入れたと信じることになるのかもしれないのです。(完)

## 十四 名犬ノワロー

動物を観察するアランの眼は、多くの場合その背後に人間社会に対するアレゴリーを含んでいます。御者に従う馬は労働者の象徴であったり、自分の耳の影に驚くロバは小心者の投影であったりします。一九〇六年八月一二日のプロポでは、アランは賢い犬を観察して、主人や権力者に忠実な人間をアレゴリー化しています。例えば上官に忠実な兵隊、司教に忠実なキリスト教徒、社長に忠実な従業員、あるいは先生に忠実な生徒です。賢い犬の名はノワローと言います。

「ノワローは名犬であり義務の意識があります。犬小屋の前や道端で丸くなって眠っているように見えても、狸寝入りをしているのです。ノワローの耳と鼻は鋭敏で、あらゆる音と匂いを感じています。すっかり眠っていたとしても、それらの音と匂いから夢を見て、ノワローは唸り、心は動いています。彼の夢は自分を目覚めさせ、憔悴させます。何か道歩いています。ノワローは唸ります。毛を逆立て、吠えます。ノワローの主人は何をしているのでしょうか？ 悲しいことに主人を当てにすることは出来ません。ノワローは自分だけを当てにするしかありません。そして、彼は勇敢に吠えます」

プロポの冒頭をこのように書くアランは、ノワローのことを犬として観察するばかりでなく、多くの従順な市民の姿を見ていることは間違いありません。犬は人間に訓練されることによってその賢さを身に付けます。野生に戻った犬は、人間にとっては賢くない動物と見做されます。ゴミ箱や田畑を荒らす鳥や小動物たちの知恵は、悪知恵と見做されます。賢さとは、人間社会に有益に働くものでなければなりません。狂人の真似をして都大路を走る者は狂人と見做しても良い、「偽りても賢を学ばむを賢といふべし」と兼好法師は『徒然草』の中で言っています。IQの高さを鼓舞して満足するだけでは、一人前の大人ではありません。彼には教育が必要です。そして、狂人の真似が上手い者にも教育が必要です。何故なら、教育とは狂人を真似ないための術を身に付ける訓練でもあるからです。教育が知識の集積と伝達ばかりであるなら、先生も学校も不要です。生徒にはコンピュータだけを与えておけば良いでしょう。知識という餌だけで育った生徒たちは家畜化された人間として、主人に忠実な動物化を余儀なくされるでしょう。反対に、今のノワローに主人はおりません。先を読んでみましょう。

「歩いていたのは太って大きく見えます。人間です。人間は決まった足取りで歩きます。しかし、ノワローはその他にも多くのものを理解しました。何時もそんな塩梅です。そして人間は背中を見せて不格好に逃げて行って、ことが終わります。

今後は全て自分の力に頼らなければなりません。そして、ノワローは鎖をびんと引張って、出来る限り口を開いて怖そうな歯を見せて、胸が裂ける程に吠えます。更に精一杯吠え、終わりになりました。敵は遠ざかりますが、その足音は今までと同じです。何故なら、勇気ある敵であるからです。ノワローは小さな動物であり、直ぐに道の上の一員でしかなくなります。良い犬は勝利を確信するために、何度も吠えて追跡の声を上げます。そして元の位置に戻って来て、儀式に従って何回もぐるぐる回ってから眠ります。何故なら良い犬であるからです。〈何人の人間がこの道を図々しく行き過ぎて行ったことか！ 皆同じように逃げて行ったのだ。私は権力のある犬だ！〉と言いながら眠ります」

しかし、夜になると月が出てきますが、その月に向かってノワローは吠えます。月の光は木の葉の影に隠れて不格好な姿で逃げて行って仕舞うこともよくありますが、頭の良い犬にも困難な生活はあります。「しかし、それ故に気高い満足を！」と書いてアランはこのプロポを結んでいます。

ノワローの満足は、主人に服従することではなくなっていました。権力者に服従することで満足する犬は、賢い犬でなくなっていました。それは狂気とも異質です。真に社会に必要なものは、狂気でもなければ服従でもないという大変に困難な生活を強いられませんが、勇気を持って自らが自らの権力者にならなけ

ればなりません。アランの思想はアナキストの思想と酷似する時がありますが、真意は全く異なります。反対に、社会秩序の真の姿を希求したことによって、現実の主人の権力を否定せざるを得ないのです。従ってアランは現実の汚れた宗教上の権力者も認めませんでした。〈神〉に従うことは容認し賛同しておりました。決して宗教そのものを否定しませんでした。何故なら、〈気高い満足〉は自己の内部だけで充溢するものではなく、必ず自己を超えるものへの敬意や畏敬の念が伴うものであるからです。(完)

## 十五 奇跡の問題

奇跡を語るアランは、殆ど科学者の眼をしています。一九〇六年九月一日のプロポは、聖母マリアの像によって奇跡的に病気が治ったことを報道する新聞記事を紹介しています。この記事が医者が読めば、「同じ症状の患者が同じように早く完治した事例は幾らでもあった」とその医者は断言しています。又、主任司祭が読めば、「宗教上の加護であるかどうか考えるのに慎重であり」、信仰心が強い人であるのかが問われることになるとその主任司祭は述べています。奇跡についての議論は人によって区々であり、明確な根拠が無くて全てが一方的な見方によるとアランは言います。

「確かにそうですが、もしも奇跡を信じるなら、もしも好意ある神の意志が一つの理由のために行動し、起こるべき事件が私たちの利益のために変えられるという考えを抱くならば、そのときは奇跡を見分けることが出来る何らかのしるしを探すのに興味を持つに違いありません。この観点から言うなら、奇跡は稀有な出来事でしょうし、学者たちには奇跡を説明する力がないでしょう。……

しかし、もしも私（アラン）が奇跡を信じないならば、もしも事件は全てそれに先行した状況によるものであり、その状況とともに起こるものであると私が考えるなら、奇跡を信じないのは明白です。この問題をはっきりさせるために、私は二つの事例を考えなければならないだけです。

自然の原因が何時も同じであっても、事件は全てが似たものになるとは限りません。何故なら一つの事件は沢山の原因によって起きるからです。幾つもの法則が大変に説明困難な結果を齎します。このことを説明するために、簡単な事例があります。船は水に浮きますが、石は水の底へ沈みます。同じ法則が二つの現象を表しています」

船を造る鉄は、石と同じように水に沈みます。アランの眼にとっては、水に浮く船を見て奇跡であると片付ける訳にはいきませんでした。

「この二つの物体は両方とも二つの主要な力に従っています。重さは下方へ引寄せ、水の圧力は上方へ押し返します。これらの力は、物体の質量と容量という二つの条件に依存します。もしも鉄の船が鍛えられて塊になれば大変な力で水の底に沈むでしょう。気球は落下することなく空中に浮かび、これ又同じ法則を立証しています。ここで考察すべきことは、二つの主要な原因しかないということに気付くことです。多くの場合、取分け人生の中で驚くべき事件が起きるときは、沢山の原因が関与し、それらの組み合わせがこの上なく不思議な結果を生むことがあり得ます。それ故に賢明な人は、全てにおいて軽薄な結論を出さずに〈待つ〉に違いありません」とアランは書いています。賢明な人は〈待つ〉ことを心得ている人であり、不可思議な事象であっても奇跡の一言で片付ける訳にはいきません。

詩人の靈感も奇跡で片付ける神学者たちは、神秘の中に自己を韜晦させることでしょう。人が理解することは、原因に符合する結果を見付けることです。〈1 + 1〉という原因に対して、〈2〉という結果を見出して人は理解したと考えます。門の前を俯いて行ったり来たりする男を見て、落とした財布を探しているのだと考えるのも一つの結果であり理解です。しかし、違う結果もあり得るのが人生です。その家が恋人の家であったことを知れば、直ぐに別の〈結果〉を理解することが出来ます。詩人も〈1 + 1〉という原因に対して、〈2〉という結果としての言葉を発見しなければならなくなるでしょう。その詩はそのとき、多くの人たちに理解されることになるでしょう。詩人が言葉の錬金術師でなければならない理由がそこにあります。詩が〈1 + 1〉の個別性のみで成立するメタファーに依存した芸術形態であるなら、詩人は待つことを放擲した狂信家への道を歩むことになるでしょう。あるいは〈2〉の結果のみの記号化された世界を過信して、散文的思考表現を志向していくとすれば、詩的なものの固有性は喪失されて、個人的真実を成立させる感情領域を失うことに成るに違いありません。〈1 + 1〉が〈2〉と異質であることを表現する

ことも詩人の責務になるでしょう。

細菌の存在が知られていなかった時代は、それ程昔のことではありません。現代でもなお細菌が存在していなかったと信じるならば、病気が治ったのは聖母マリアの力であり、奇跡であると信じるに違いありません。「もしも私がそれを既知の原因による新しい組み合わせによって説明することに成功しないならば、何か未知の原因にそれを割当て、私が知っているものとの類似、つまり一つの法則に従って決定していく方法をとることになるだろう」とアランは断言しています。

「奇跡の問題は、それ故に現実の問題ではありません」し、それを探求しようとしなくなった狂信家の心の裡に起きる問題です。そして、奇跡を起こすのは医学ではなく、「もしも議論したいのなら、神学について議論しましょう。医学についてはありません」と言ってアランはこのプロボを結んでいます。二十世紀初頭の時代を語るアランの言葉は、数々の怪奇現象を執拗にテレビで放映する現代の我が国の狂信家たちにも当て嵌まる重要なヒントを与えてくれているように思います。(完)

## 十六 エスペラント語

アランは殆ど外国語の翻訳はやらなかったようですが、国際語のエスペラント語は時間があれば勉強したかったようです。しかし、ルーアン新聞へ毎日プロポを書かねばならなかったアランにとって、外国語の翻訳やエスペラント語を学習する時間は殆ど無なかったと言わねばなりません。エスペラント主義者から、「あなたにはエスペラント語を学ぶ時間がないのですね。それでは何をやっているのですか？」と言われて、簡潔で規則正しい言語、発音するように書けばよい言語、その文法は難しくなく、規則も多くなく、如何なる例外的な言い方も認めていない言語であるエスペラント語を、アランは高く評価していました。「フランス人もイギリス人もイタリア人もロシア人も、簡単に覚えられる言語のエスペラント語を学んでいます。そして、簡単な言語であっても何でも思考が可能な全ての関係が用意されていて決定されているので、何でも表現出来ます。エスペラント語で神学を話し、感情を表現し、シェークスピアの強烈なイマージュや、湖畔でのラマルチーヌの嘆きを翻訳します。……エスペラント語は殆ど完成された言語であり、もしも時間があれば私も学ぶことでしょう」

しかし、アランにはそのエスペラント語を学ぶ時間が無く、別にやることが二つあると言います。「人間と事物を学ぶことと、自分が理解したことを明確に説明出来るようにフランス語を学ぶことです」

更に、次のように言います。「フランス語を学ぶことは容易ではありません。私が言いたいことを正確に言おうとすると、十回に一回は成功しません。言葉の選択、その位置、全てが重要です。一流の作者の作品を読み、それらを模倣して書いてから殆ど二十年になりますが、実際にはフランス語の一寸した言葉でもその良い所を未だ良く知らずにおります。本当にそうなのです。フランス語という言葉は観念の外で或る種の環状となって介在してくるだけです、あらゆる観念について同じなのです」

言葉は事物ではありません。その言葉を事物のように明確化され定義されているかの如く使用するものとしては幾何学と哲学と化学の言葉があり、煉瓦職人と建具屋と錠前屋の言葉があるとアランは言います。それに対して調和とか勇氣とか慎重とか臆病とか密告という言葉には、何処かにその言葉の意味について迷いや曖昧さがあり、人によって区々です。これらの言葉を英語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、中国語、ブルトン語、バスク語そしてエスペラント語へ翻訳することが出来ることは誰でも知っています。一つの言葉が十の言葉に表現されます。一つの言葉から他の言葉へ伝えることが出来ますが、「言葉から事物へ伝え、そして事物から言葉へ伝える方法も教えることが出来ます。つまり∧世界∨から伝わってくるものの翻訳を言葉に与えることを可能にするために、眼を開くこと、観察すること、測って判断することです。この働きこそが、この世の平和と正義の進展にとって何より重要です。何故なら、公的であれ私的であれ、諍いの真の原因は人間が同じ言葉を使用しないからではなくて、同じ言葉を発音しながら同じ事物について思考しないからです」とアランは一九〇六年九月五日のプロポを結んでいます。

優柔不断は悪の中で最大のものであるとデカルトは言っており、何度も言ってるが決してそのことについての説明をしようとしていない、と一九二四年八月一二日のプロポでアランは書いています。翻訳不可能であるからと言って、外国詩の翻訳を徒労と考えて手を付けずに優柔不断でいることこそ悪なのかもしれません。何故なら、翻訳は一つの言葉から他の言葉へ赴くことであり、行動することに他ならず、必ず判断することが必要であり決断することでもあるからです。誤訳を恐れていて何も手を付けずにいることが悪なのです。翻訳だけではありません。自分の考えを表出させることに躊躇して手を拱いていること、何もしないことも一つの決断であると言って優柔不断の儘の思考を容認していること、失敗や損失を恐れて集団化された行動の中で保身に現を抜かしている姿勢が悪なのです。集団化が全て悪ではなくて、「同じ言葉を発音しながら同じ事物について思考しない」ことが悪であり、眼を開かないこと、観察しない

こと、測って判断しないことが悪なのです。

そういう意味で、賭け事は悪ではないのかもしれませんが。競馬の馬券を買うために、眼を開いてパドックで馬の様子を良く観察して、競馬新聞を読んで調教タイムを調べて判断するからです。そして、退屈ではなくなります。リスクについても良く観察するなら、冷静な判断が可能な限りは賭け事も悪ではなく、退屈の方が悪なのかも知れません。自分の感情や思考を表現しないこと、一つの言葉から他の言葉へ伝えないこと、つまりコスモポリタンとしての国際語であるエスペラント語を否定することが、悪の中で最大のものかも知れません。従って、アランはフランスという国の国益ばかりを優先させる考え方に雷同する人ではありませんでした。(完)

## 十七 女性の商売

二十世紀初頭のフランスには、女性を売買する商売がありました。古代ローマの喜劇作者プラウトゥスの時代と同じように、女性たちを買ったり売ったりする商売で、若い娘や歳を取った女性もいて、色々な国の女性がおりました。アランは酒場で、そのような商売をしている一組の男女を目撃します。「男女はアブサンを呑み、給仕と話をする時も、ポケットに金を沢山持っている者のように偉そうにしていました。男の眼は緑色をしていて恐ろしく、肩は大きく、拳は真白ですが小石のように硬そうでした。女は羽毛だらけの帽子を被り、指は指輪で一杯で、小皺が目立つ両眼は眉墨だらけでした。この男女が、可愛らしい娘たちを売買することを仕事にしているのは明白でした」

現代の我が国にも人身売買は現存するようで、その多くが外国人女性のようなのですが、やはりその場合も男と女が一緒になって商売をした方がやりやすいのでしょうか。パリの町には危険が一杯で、子供たちも掏摸グループを形成して、狙った獲物のポケットの中に子供のしなやかな指が容赦なく侵入してきます。大人の掏摸はそんな技術は不要のようで、三人グループで狙った獲物を地下鉄の薄暗い処へ連れて行き、二人が各々獲物の足を一本ずつ持って押さえつけ、残りの一人が堂々とポケットの中から財布を持っていくようで、その手口は掏摸というよりも、正に強盗です。国際都市パリは人種の坩堝で、それだけ犯罪も多いようです。地下鉄に乗って気付くことは、決して誰も眠ったりしません。そして、一般庶民の男たちは誰も白ワイシャツを着ていません。スーツを着ていても、白ワイシャツ姿の男は見当たらず、殆どが白以外のカラーシャツです。例しに白ワイシャツを着てシャンゼリゼを歩くと、直ぐに掏摸まがいのジブシー女たちに囲まれます。旅行者と直ぐにばれて狙われます。旅行者と分からない方が安全です。

アランは、ノルマンディー地方のモルターニュ・オ・ペルシュという小さな町に生まれましたが、父エチエンヌ・シャルティエは獣医と農業を兼業していて読書好きだったようで、その知識は天文学から聖人伝まで及んで幅広く、取分けこの地方は馬の名産地でもありましたので馬のことなら何でも知っていました。しかし、アルコール好きの博打好きで、五八歳で亡くなっています。母ジュリエット・クレマンヌ・シャリーヌは、この地方の名家の出身で顔立ちがすっきりとした美人でしたがカフェに出入りして終生浮気っぽかったようで、軽薄でダンス好きで、幼いアランは朝食を自分で用意しなければならなかったようです。家に一人でいるときも借金取りと対応しなければならず、その家庭生活は決して幸福なものではありませんでした。四歳年上の姉ルイズは生涯独身でした。アラン本人も、一九四五年（アラン七七歳）にガブリエル・ランドルミと初めて結婚しましたが、一九〇〇年（三二歳）に民衆大学で知り合ってから一九四一年（七三歳）に亡くなったマリー・モニック・モール＝ランブランとは、正式な結婚をせずの同棲生活でした。不幸な家庭生活に育った子供、取分け夫婦間の諍いが多い家庭で育った子供は、結婚生活に不安と嫌悪を覚えることは良くあることです。自分の結婚にも否定的な考えを持つようになるようですが、アランも例外ではなかったのかもしれませんが。この辺の因果関係は明確に書いていないアランですが、多くの事柄が時代と共に変化しても女性風俗は変わることがないだろう、とアランは言います。

「私たちの中には最早、奴隷も君主も乗合馬車も馱馬車もなくなります。病気そのものも変わりました。ハンセン氏病はなくなりましたが、梅毒は今もあります。しかし、何時の日か梅毒もなくなることでしよう。私たちはバスチーユを崩壊して拷問を止めさせました。フランス国はローマ教皇を無視して意に介しません。クレマンソー氏が内務大臣です。女性たちは投票権を要求しています。あらゆることが変わります。風俗、法律、そして神々も変わります。しかし、女性の商売は変わりませんでした」

クレマンソーは教会と国家の分離政策を推進させましたが、〈女性の商売〉に対しても色々な法律を制定して取締り、制度も変えていきました。しかし、それに対応して商売人たちの行為や品行も変えられてい

きます。宗教さえも同じように変えられていくのです。商売人たちは、客たちのために何でも応えられるように何時も美しい女性たちを用意して、料金も定額のものがあるにはあるが、その時その時の気分で付けられていきます。面白そうな遊蕩を紹介したりいかがわしい写真を見せて客を引き付けますが、殆どが嘘であることは明白で、おとなしそうでナイーブそうな女性もこっそりと彼女の話を持ち聞きしたならばそんなイメージは吹き飛ぶことでしょう。しかし、商売人たちはそんなことにはお構いなしで、考えていることは女性を売買する商売がもっと繁盛することです。そのためには只単に、彼らを目撃した者が寛大で当局へ連絡しないことが必要ですがそれよりも客の数が増大するのを前提としている、と書いてアランは一九〇六年九月二十日のプロポを結んでいます。

人間が他者のために犠牲を払う行為を善というならば、そして美であるというならば、悪は人間が他者を喜ばす行為かも知れません。子供の掏摸も大人の掏摸や強盗も、彼らの行為は親分を喜ばせるものであり、掏摸が有利になるように法律を制定しようとする政治家がいるとするなら、正に悪の権化です。その行為は掏摸を喜ばせるものであり、悪法を生む土壌となることでしょう。西洋の中世末期に見る社会矛盾も、教会の聖職者や神学者たちがカトリックの教えを自分たちに都合の良いように歪曲させて解釈したためです。自由な検討精神と根本的真理を希求した古代ギリシャやローマ時代を再生させようとしたルネサンスは、現代でも必要な精神です。そのためには先ずは事実を正しく見て認識することです。中世末期に聖書を原典で正しく読むためにヘブライ語とギリシャ語を勉強した民衆がいたように、現代の我が国も制定されている法律を先ずは正しく読んで理解することです。しかし、その法律が一部の人々しか読めない社会が現代の我が国のようです。刑法も民法も全文を読んだ人が数少ないのが我が国の現状です。そして、その法律改正や政治の行方も僅か数社の全国紙の新聞報道や論調にまかせて世論が成形されていくかのように見える我が国のマスコミは、正に西洋の中世社会に見る教会の役割と酷似しています。書かれている憲法や法律を原典通りに正しく読むことが大切です。「ユマニテ（人文主義）を取り戻すのは何時も個人の中であり、残酷さを取り戻すのは何時も〈社会〉の中です」とアランは一九一一年四月一七日のプロポで書いていますが、成熟した民主主義社会とはこのユマニテを取り戻した社会であると考えます。

「愛とは、一緒に馬鹿になれることにある」（清水徹訳『ムッシュウー・テスト』岩波文庫）はポール・ヴァレリーの言葉ですが、〈女性の商売〉は馬鹿に成り切っていない処に罪悪があるようです。金儲けは馬鹿になっては出来ないのですから当然ですが、馬鹿でもない者が馬鹿を装う行為は詐欺に近いものがあります。しかし、馬鹿という言葉も曖昧です。馬鹿の代わりに〈犠牲〉と言えばもっと明白になると思います。愛には犠牲が付きものであり、その犠牲は平凡でもあります。金銭を出すとか、労働を提供するとか、時間を割くとか、平凡なことが犠牲には必要です。そして、愛は平凡なものです。（完）

## 十八 風車の力

アランが経済のことを語る時、最も重要と考えていることの一つに個人の労働があります。その労働が人間相手に働きかけるのがブルジョアであり、事物へ働きかけるのがプロレタリアであると規定したことは有名です。プロレタリアを決してマルクスのように階級闘争を念頭に置いて、社会的に搾取されている集団として定義しませんでした。そういう意味からもアランの経済学には、統計学は余り役に立たないようです。一人ひとりの人間を唯の数字として捉えるしかない統計学は、アランが最も重視する〈自由〉な思考と程遠い領域の科学かもしれません。例えばエネルギーのことだけを考えるならば、風車よりもタービンで回るモーターの方が遥かに有効です。統計学的に思考すればタービンの方を重視することでしょう。しかし、人間の幸福を考えるアランは、タービンよりも風車に人間の幸福を見ようとしています。公害問題やエコロジーを経験してきている二十一世紀の現代においても、アランの経済学的な思考は多くを示唆してくれているように思います。それは断崖の上に立つ古い風車の話から一九〇六年九月二四日のプロポは始まります。

「昨日、私は断崖の上に建つ古い風車を詳細に眺めましたが、風車は少しずつ回転が鈍くなり、ことごとく何処かが折れているようで軋んだ音を立て、とうとう止まって仕舞いました。風は強く吹いていませんでしたが、被っている帽子を飛ばすには十分でした。しかし、この古い風車を回転させるには悪魔のような強風が必要です」

それでもエネルギーを生むには、風車が回らない限り不都合です。もしも金属板で出来た小さなタービンを取り付けたならば、小麦を挽いたり水を汲み上げることが出来るでしょうし、そのことは人間の辛い労働の苦役を減少させてくれるでしょう。「しかし、注意しなければなりません。人間の苦役というものを大変に見込み違いをしています。この古い風車は、自然そのものによって作られています。自然が与えている小石と木材によって作られています。それに対してタービンは自然とは大変に縁遠いものです。坑夫たちが大地の下でその原料を探し求めますが、そこは泥だらけの鏝のようなものになって隠されていたものです。他の坑夫たちはそれを地金に流し込みます。鍛冶屋職人たちはそれを金槌で鍛えます。又、その他の職人たちはタービンが造られる工場で、炉や動力ハンマーや圧延機を使い、沢山の道具も用意されて、やすりがかけられ、艶を出し、組み立てられます。そのタービンがぴったりと上手く回る瞬間に、辛くて自由のない労働の日々が、完成された鉄製品の中に組み込まれたこととなります。これらの労働の日々があるということ、そのタービンはその日々を人間に返す義務があるのです。恐らく、その借りは返してくれるのですが、タービンが人間を形成していると信じるのは止めましょう。しかし、人は無料では何も持てません。

そして、それらの経費のことを考えるならば、タービンよりも風車の方が質素であり、本当に支払いが少ないのですから返す義務も少なく、タービンよりも良く稼ぐこととなります。風車を造るには陽気な大工がパイプをふかしながら、雲の流れを見て働くのですから、風車が働いているのは楽しく、夢があり、誠実です」とアランは考えていました。

人間としての労苦を無視したタービンの力は、金勘定や国家戦略を優遇する思考にとっては都合が良いものかもしれませんが、そのような統計学的思考には多くの人間性が欠落されていくこととなります。〈経済〉とは〈経国済民〉のことであり、〈国を治め民の苦しみを救うこと〉である筈ですが、国を治めるためには人民の労働の日々や労苦を勘定に入れない方が良いという思想が増長することがあってはなりません。タービンを造る労苦を考えれば、風車の力の方が経国済民の思想には相応しいとアランは考えているようです。『レ・ミゼラブル』の中で或る女が言っている次の言葉を引用して、このプロポは終わっています。「全ての

ものは価値があり愛すべきものです。この世で愛すべきでないものは労苦だけです。この世の労苦は価値がありません。ただ同然です」

風車一台の力はタービン一台の力よりも小さいのかもしれませんが、タービンが造られるには多くの人間の労苦を必要とします。それに対して風車が造られるために人間の労苦は必要ではありません。人間に労苦を求める者の中には、向上心を挙げる者がいるかも知れませんが、それは正確な意味での労苦ではありません。〈若いときの苦労は買うてもせよ〉という諺は、決して〈ただ〉のものではありません。教育上の苦労はやがてその成果が期待出来るものであり、〈ただ同然〉ではありません。教育にとって大切なことは失敗であり、決して成功することばかりが人間を成長させる訳ではありません。苦労して勉強することが本当の喜びを齎します。しかし、経済上の労苦は決して人間の成長を齎しません。一代で大会社に育て上げた社長の成功譚は、色々な苦労事例が参考になる点もあるのですが、同じことを誰でも実践出来る訳でもありませんから経済上は余り期待出来るものではないだろうと考えます。経済上の労苦は、やはりアランが言うように無駄であり、出来るだけ楽をする思想が正解なのだと思います。つまり教育上の楽からは本当の喜びが手に入りませんが、経済上の楽は本当の喜びが可能になるでしょう。両者は混同しないことです。ですから経済原則を教育に応用すると失敗することが多いと思います。居酒屋の社長が学校教育に口を出し、教師たちを居酒屋へ研修に出したり、生徒の要求を居酒屋の客の注文同然に受け入れてみても、決して良い教育は行えないだろうと考えます。そのような考え方からは、決して良い教育者は生れないだろうと考えます。何故なら、真の教育者とは生徒たちから尊敬される人間でなければならないからです。教師が居酒屋でいくら研修しても、生徒たちは尊敬しないだろうと思うからです。現代の我が国の教育は、大人も子供も制度も、やはり何かが狂っているように思います。教育とは、やはり守るべきものはきちんと守ることから始めるべきだろうと考えます。そして、教育の労苦は決して経済の労苦と同質でないことを忘れてはなりません。(完)

## 十九 国家と宗教

---

アランのプロポの中には、対話で書かれたものが多くあります。プラトンの対話篇は弁証法を生んで多くの思考を可能にしましたが、アランの対話は矛盾の克服を目的にしたものとは思えず、寧ろ明確であろうとする思考の表出のように感じられます。一九〇六年九月二七日のプロポは、宗教についてのアランの思考が潔く表明されています。

歳をとったその男はアランに言いました。「宗教から独立したあなたの道徳は、私には全く可笑しいと思う。非常に単純で余り高くない教育を受けた人々に対して、あなたは理性のことを言っているが、彼らは只単にあるが儘を知ることが出来るだけなのだ。それ故に自分の理性を働かせている人々、つまり自分独自のやり方で自分を教育し、新しい学問を創りだしている人々がフランスに何人いるのか数えてご覧なさい。あなたは百人も数えられないでしょう。その他の殆どの方は、あなたや私のように律儀な人間で少しばかり記憶力が良く、せいぜい本を読んで記憶に留めて置くだけだ。彼らの理性は殆ど目覚めていないし、今でも半分眠っているようなものだ。それに反して情熱はうなっていて吼えているようだ。

私としてはもっと単純で、もっと寛大な道徳の方が好きで、新約聖書の中にそれがある。〈彼らがもしもお前の処にいて、お前がもしも彼らの処にいたならば、お前は彼らがお前のために行うのを望むように、お前は彼らと共に行きなさい〉ここには偉大なる秘密がある。規範の中の規範がある。それは心によって確かにするもの、確実な秩序として受け入れるもの、超自然の力が齎すものであり、正義、慈悲、勇気というあらゆる徳を含んでいる」

これに対してアランはその老人に答えて、次のように言いました。「理性という言葉から上善で稀有なものという理解はありませんが、只単に良識のことであつたり、正しい判断のことを言っていると私は敢えて言います。神の規範が如何なるものか、そして偉大なる秘密が私たちに良識の所有を施すものであるのか私は全く分かりません。あなたは有名な箴言を私に示しましたが、それは新約聖書の中にあるものであり、新約聖書よりも古い時代に書かれたものです。非の打ち所がない箴言ですが、箴言は行為ではありません。あなたが言う信者は話すのが上手ですが、私はそれを応用して実施することを期待します。

召使いを雇い、給料を決めなければならないとします。ところが彼は出来ることなら眼を瞑って自分の規範で決めるでしょう。そのことをあれこれ考えたいのなら、召使いの財産や身分のこと、苦しみや喜びを良く知る必要はないのでしょうか。色々と調べる必要はないのでしょうか。そして、それを知らなかったり間違っているなら、そんなことは重要でないと思うのでしょうか。週一回の休みの安息日のことを考えて下さい。私の周りの人々が皆そのことを話題にすると直ぐに活発な議論を始めます。あなた方の規範である週一回の休日を私が勧めるならば皆が賛成します。しかし、私たちが実際にそれを実行しようとするときは、色々と議論することになるでしょう。善意や良き箴言以上にはありきたりで平凡なものは何もありません。しかし、良き行為ほど稀有なものはないのです」

安息日を決めたのは神であると信じるのは宗教ですが、自然というものには週一回の安息日もありません。従って自然に従って思考する者は、安息日の実行も議論の対象になってきます。もしかしたら安息日に働くことも、良き行為になるかもしれないのです。頑なに神を信じ、如何なる場合にも安息日には休息する敬虔な信者には堪えられない言葉かも知れません。しかし、自然に従って思考すること、つまり理性に基づいて思考し生活する者で構成される国家は神を信じる心と乖離しないに違いない、寧ろ宗教は国家に隷属すべきものである、とアランは考えました。そういう意味からもアランは無神論主義者ではありませんでした。このような思想は、十七世紀の思想家スピノザから多くの影響を受けたようです。

スピノザの主著である『エチカ』における倫理学の執筆を中断してまでその出版を急いだのが、一六七〇

年に上梓されたもう一つの主著である『神学・政治論』です。その主題は宗教に隷属された国家への批判であり、そのための徹底した聖書の判読を自由な判断と理性により行うことでした。お陰で、宗教や国家の危険人物と見做されて本書も有害の書となり、『エチカ』までも生前に上梓されませんでした。預言や奇蹟もスピノザは「自然の諸法則とその秩序から生ずる」ものとして思考し、無神論者の如く見做されました。恐らく、アランの師ジュール・ラニョーによって教えられたスピノザ哲学は、アランの宗教観の根幹を成すものでした。聖書に書かれていることの過誤や欠陥を〈自然的光明〉に基づいて解明していくスピノザの姿は、迷信によって人間の自由を奪う宗教は宗教でないと思えるアランの助けとなっていた筈です。スピノザにとってユークリッドが書いたものは極めて単純であり、言語が異なっても容易に説明出来るものであり、それと同質の理性を聖書判読に導入していたと言えます。例えば、ソロモンの神殿建築はイスラエル民俗がエジプト脱出後四八〇年目と聖書には書かれていますが、同じく聖書中の数々の物語を基礎に計算していくと少なくとも五八〇年以上経ってからになるという矛盾を指摘しながら、最終的には政教分離の思想が構築されていったのだと思います。時代のために急いで書かれた『神学・政治論』のスピノザの思想は、やがてラニョーからアランへ引き継がれて、如何なる宗教にも従属しない共和制国家樹立の礎となる人民の良識が芽生えていくことに、アランのプロポも貢献していくことになります。(完)

## 二十 バカンス

夏になるとフランス人たちは、三週間ほどのバカンスを楽しみます。その多くは家族揃って海水浴などに掛かっています。このバカンスを家族で楽しむために、それこそ休むことなく一年間働いていると言っても過言ではありません。勿論、この三週間は年次有給休暇を利用するのですから、他の期間は休めなくなります。しかし、一般の労働者には殆ど残業がありませんから、余暇を楽しむ時間はそれなりに毎日あります。夕食後にはコンサートなどへ掛かかって、長い秋の夜を遅くまで楽しむことが出来るようです。フランスでは一般的に、残業をする労働者は勤勉ではないと見られているようです。何故なら、残業をする人は定刻までに仕事をこなすことが出来ないで、能力がない人だと見られているからです。その点は我が国の労働者も参考にしたいのですが、個人よりも組織への志向が強い国民性は、なかなか真の自由と平等が育ちにくいようです。

アフリカで誕生した人類が、世界で最も遠方の土地までやって来たのが我が民族であり、そういう意味で最も強靱でしぶとくて逞しい民族であると言う評論家もいるようですが、実際は何処にいても何時も追いつかれて、とうとう最も遠い東方の地までやって来た弱い民族ではないかと思われれます。弱いから馬や羊のように群れを成す集団意識が強いのかもかもしれません。しかし、本当の意味での近代化は個人主義の成熟による自由と平等が人間に与えられることであり、そのような成熟は又、決して個人を孤立させるものでもありません。何故なら、成熟した個人主義は集団や社会との調和を思考する能力が発達したものであるからです。個人の自由や平等に苦労したことがない人間は、集団や社会との調和にも関心が持てない人間になるしかないだろうと思えるからです。本当に自分が自由になりたいと考えたことがないから、毎日の残業も諦めてやらざるを得ないのだろうと思います。本当に自分が集団の中で平等でないと感じたことがないから、それを糺したいと考えることもなく、刹那的感情の捌け口である愚痴をこぼすだけで終わって信念に育つこともないのでしょう。そのような情景は我が国だけではなく、民主主義が成熟しない当時のフランスにおいても見かけることが出来たようで、神を信じる人々、宗教に身を捧げて新約聖書を生きた人々も同じようでした。例えば、夜中に出発する汽車の中も同じでした。一九〇六年一〇月一二日のプロボは、バカンスへ行く汽車の中のことが書かれています。

「汽車が入線してきたのは何時ものとおりの定刻から五十分遅れでした。ブレーキをかける軋む音が終わるや否や、バカンスへ向かう旅行者たちは競って突進し、長いホームを走って乗車します。陽気な水兵たちは車中で、何杯もアルコールを呑んでいました。遠くからやって来た家族連れは鼾をかいて寝ている者もいれば、ため息をついたりぶつぶつ不平を言う者もおります。「満員だ！」と何処もかしこも同じ言葉を言っているのが聞こえます」

ところがコンパートメント（客室）の中は空いている席もあります。悪知恵を働かせたり嘘を付いて独占する者がおります。コンパートメントを如何なる方法でも良いから、自分たちだけで独占することは誰もが持つ夢です。もしもそれが実現すれば彼はそのことを自慢し、話としては価値あることとなります。通路を塞ぐ人々は荷物や毛布を眠りやすいように整えます。煙草の煙が雲のように浮いています。そこから国家というものがどのように形成されているのかが良く分かりますとアランは言います。

「コンパートメントに身を落ち着けている旅行者たちにとっては、お互いに同盟を結んでいるようなもので、汽車が駅に到着して新たな乗客が乗ってくることは有害なのです。……新たな乗客が這入ってくれば、新たな同盟を結ばなければならなくなるでしょう。でも自分が望んだように思い通りにはいきませんから、平気な顔をして自分の気持ちを偽っても空席のことは知らない振りをしています」

反対に、新約聖書の教えに従ってコンパートメントの空席を人々に教えるような者は一人もおりません。

そのような寛大で正直な者は、新たな乗客たちが乗車するや否や「ここに三つ席が空いています！」と言って教えるのですが、コンパートメントの中の他の乗客たちからは無視されることになるでしょう、と言ってアランはこのプロポを結んでいます。

つまり正直で寛大な人間であれば、小さな喜びを自分のためにとって置くことよりも、それに相似た大きな労苦を自分に課すことに躊躇しないのでしょうか、仮にそれが出来るとしても旅行中に空席を教える位の話です。国家にはそのような正直さと寛大さは危険です。列車という世界の治安のために、民主化という三つの空席があることを教えに行くお節介者の強国は新約聖書の教えに従っているつもりかもしれませんが、同じコンパートメントの乗客たちは無視する方が現実的であるとアランは言っているようです。お節介者の強国のことを「彼の行いは正しいから支持する」などと言って強国の後ばかりを追って、人が人を殺す行為に加担する国際貢献は、国家としての小さな喜びを犠牲にして大きな労苦を自国の国民に課すことになるでしょう。大きな労苦よりも小さな喜びが可能な国際貢献の道はある筈であり、その方が世界の多くの人々に歓迎されるだろうと私は考えます。そのためには国家にも自律性や独立性は大切です。(完)

人間が思考する内容まで法律は定める必要がありません。そこまで法律が介入してくるならば、それは思想統制であり悪法と言わねばなりません。それは思想や言論の自由が蹂躪された法律であり、戦前の我が国に制定されていた治安維持法はその典型です。あるいは人種差別の制度を定めた法律によって平等が蹂躪されたものとしては、米国の奴隷制を維持していた法律、ユダヤ人との結婚を禁じたナチの血液保護法などの一連の反ユダヤ法であるニュールンベルク法などがあります。いずれも自由と平等を蹂躪した法律であり、法律は全てが正しい訳ではありませんでした。しかし、国民は法律を遵守する義務があります。何故なら、法律以上に秩序が大切であるからです。それでは何が正しいのでしょうか。それが私たちに教えているのは〈行為〉であるとアランは言います。一九〇六年一月二六日のプロポは、法律について言及しています

「行為を、更に行為を、常に行為を、これが私たちに教えていることです」と書いてこのプロポは始まります。「私は行為に喜びを見出しますが、多くの人が理解しているようには行為を理解しません。何故なら法案が上程されると多くの方は雨が降るように不快を感じたり、疑問が色々と湧いて混乱したり幾つもの役割がその法案に混じり合っていたりするからです。

政府はよく法律を上程することが出来ますが、それは政府本来の機能ではありません。政府本来の行為は、法律を制定することではなく、法律を適用し運用することであり、それは個人的観点で行われ、そして個人的方法で行われるものです。政府の長が一つの法律を適用することは、少なくとも二つの人格に苦しむこととなります。法律を守って行う人物と、法律を守るための任務を帯びている警官のような人物です。彼ら二人には全てお互いに抵抗があると言えるのは確かです。何故なら、一方では法律は邪魔であり些細な問題でも複雑にするからです。他方もう一方では平安を愛し、法律の敵になることを恐れるからです。

沢山の法律がありますが、法律に合致しない個人的興味も沢山ありますから、法律に対して或る種の暗黙の陰謀が生まれ、市民は皆その中にだんだんと這っていきます。しかし或る者たちは理性的であり、他の者たちは理性的でない別のものに向かいます。

結局のところたいした確信はないのですが、全ての方が大声で要求することはあらゆる法律が正しく適用されることです。しかしそれと同時に、一人ひとり法律を免れるために陰でこそこそ働きます。それと言うのも皆は公民道徳を持っていると言いますが、実際は殆ど持っていないのです。その良い例は官僚たちで、自分からは行動せずに半睡状態であり、何か昇進とか勲章を貰うのに汚点となるようなことは殆ど積極的にやろうとしないで眠っています。その結果、公共機関は恐ろしく硬直化してきます。その運用は水を剣で切るようなもので心許なく、常に伝統的やり方で僅かな効果しか上げません。水は抵抗なく下方へ流れますが、大変に早く自分の地位という水準を理解して分かっているのです。

それ故、大部分の支配者は静かな水と戦っても無駄と解った後で、もっと別な楽なやり方を沢山手に入れます。それは言葉の解釈をかき回して、法律の条文にそれらを合わせることしか問題にしない方法です。それだけなのです。ですから一度法律が公布されても、問題は何も解決されない儘です。〈政教分離法〉にそのことを見ることが出来ます。或る人はその法律を束にして鉢の中で粉々にして、反古にしようなどとはしませんでした。しかし、その人は支配するということしか知らなかったのです」とこのプロポを結んでアランは〈政教分離法〉が法律の趣旨どおりに運用されずにいる現実を指摘しています。

政治化された宗教が墮落していくことの現実に気付かない人々は、何時の世にもいるようです。そのことに気づき、逸早く政教分離の視点からそれまでの聖書の読み方を批判した一人がスピノザでしたが、そのために宗教界から多くの妨害に遭い『エチカ』は生前に出版されることはありませんでした。しかし、政

教分離の基本となる精神とは、スピノザも『神学・政治論』の中に書いているように「考へることを言ふ自由を人間から奪ひ去ることは不可能である」（畠中尚志訳）と明確に認識することにあります。従って〈考えること〉は個人的レベルで行うことですから、あらゆる基本が個人に還ってくる制度でなければなりません。そして、宗教や政治の権利は〈行為〉にのみ限定していくべきであり、自由に〈考えること〉やその考えを言う権利を個人に認めることが国家の安全のために必要であるとスピノザが言うとおりに、自由な表現のない処には宗教も政治も国家も健全でなくなることでしょう。（完）

## 二十二 慈善事業

年末になると街頭募金が行われます。大声で募金をお願いをするその前を通り過ぎて行くのは、或る種の後ろめたさを感じます。勿論、アランが言うようにスープや服のない人々に、それらを与えることが重要ですから、寄付することは善いことであり、そういう寄付の要請が自宅に回ってくれば、寄付者一覧表に進んで署名することになります。しかしお金を出した後に、議論し思考して欲しいことがあります。慈善事業へお金を出す人々がいれば、その活動のために体を使って動き回る人々もおります。彼らは彼方此方を走り回り、極貧の地区へ行き病人や子供を探し回ります。しかし、どうして貧しい人々がいるようになったのか、そのことを議論し思考して欲しいとアランは言います。

要するに貧乏は疥癬や禿頭病やコレラのような病気ではありません。貧しい人々は何かの原因で貧しいのです。悲しみの源泉に遡行してみるなら、それは職業であったり、労働であったり、金持ちの人までに影響している何か自然の関係であったり、何かの病気であったり、失業あるいは低賃金が源泉であったりします。その反面、立派で豪華な結婚式やその子供たちを見ると、殆ど我慢出来ないものをあなたは見出すことになるでしょう。そして、その悲しみの原因を良く見るならば、或る業者や主人たちは自分の利益を少しも犠牲にしたくないことがあります。そんなことは考えたこともなく、最低賃金で労働者を雇い、まるで卵を買う主婦のように少しでも安くしようとします。万事はそんな調子でした。そして、奇跡のようなことですが、悪いことが一度起きるとそのことが原因となって次々と悪いことが起きていきます。それと言うのも悲しみは病気を引き起こし、病気は悲しみを引き起こすからです。そんなときあなたは、例の使用人や主人たち、そして彼らの妻たちは集り、協議し、金を使うこと、つまり労働者の利益分配制を組織的に行っていることを知りますが、私がそのような機会を知る時は大変遅い時ですから、お金はすっかり無くなっています。何故そうなるのでしょうか。人が望む限り、何故慈悲深い人々がいるのでしょうか。正義心だけからではないのでしょうか？ と疑問を投げかけて一九〇六年十一月五日のプロポは終わっています。

寄付をする人は、決して慈悲や正義心から行うものばかりではありません。多くの場合、付き合いから寄付をするように、何か半分は強制的な思いから寄付をします。従って寄付をする人の中にも金銭的余裕がない人もおり、半分は税金を払う感覚と同じだろうと思います。しかし、我が国の税制は一般的には物品を寄付しても、寄付した物品の時価に相当する金額が寄付した者にも、寄付された者にも、各々に収益が発生し課税されますから簡単に人に物を与える訳にはいきません。厳密に言えば少額なら非課税ですから課税される心配はありませんが、原則としては人に物をやればその物を売却して一旦金銭にしてからその金銭を人に与えた税制上は見做しますから、金銭にしたときに収益が発生し課税される訳です。これを有償取引同視説と言うそうですが、安易に物を人に与えないようにしているのが我が国の税制です。物品ではなくて金銭で与えればそういう問題はなくなり、寄付を受けた者だけに収益が発生します。しかし親が子供に一定額以上の金銭を与えても贈与税が課税されますし、親が死んで一定額以上子供が相続しても相続税が課税されます。ところがお布施として宗教法人が寄付金を受け入れても課税されません。贈与税も相続税も課税されませんし、法人税も支払う必要がありませんから、法外な資産を所有する宗教団体が存在することになります。物欲や金銭欲を超越している筈の信者の集団である宗教団体が、法外な資産を所有しているのも可笑しい話です。収入があれば所得税や法人税が発生し、支出があれば消費税があるのですから、所有している資産にも法外なものには課税すべきだろうと考えます。所謂公益法人にも課税すべきだろうと考えます。固定資産税や自動車税のように資産に課税することは可能であり、贈与税も相続税も固定資産税も廃止して、法外に所有している資産は全て課税の対象にすれば、貧しい人々への寄付も沢山行われることになるだろうと考えます。

寄付は情報革命によって生まれる人好縁社会Vの形成に必要な行為であり、自発的で意志的な積極的行為でなければならないでしょう。因みに〈好縁社会〉とは、平成十二年の「国民生活白書」によれば、ボランティア活動のように好きな者同士で形成される社会のことです。家族中心だった〈血縁社会〉の次に農業の発祥によって地域中心の〈地縁社会〉が形成され、やがて産業革命後に職場中心の〈職縁社会〉が形成されているように、情報革命は〈好縁社会〉を形成することになるのでしょう。しかし、慈善事業は個人が行うだけのものではない筈です。「貧者に対する配慮は社会全体の義務であり、もっぱら公共の福祉の問題である」（畠中尚志訳）とスピノザも言うとおり、国が制度の中で行うべきものであり、貧しくて弱い者を守るのが国の役割であり、弱肉強食を標榜する国の制度は低級な動物レベルの精神が是認する制度であり、人間的なユマニテに基づいた制度ではないと考えます。反対に、強くて大きなものを守る必要はなく、それこそ競争原理が大切になりますが、そのことを国が標榜するのも法外な資産を所有する宗教団体や公益法人が存在するのと同様に可笑しい話です。（完）

## 二十三 信仰の起源

「信仰というものは夢想が齎すと私は信じています」と言う一九〇六年十一月一四日のプロポは、〈教会〉についての話から始まります。アランが初期プロポにおいて批判した相手は、フランスのカトリック教会もその一つでした。〈教会〉についての議論は大変古くからありましたが、奇跡と関係しているとアランは言います。

民衆化している信仰の起源は古く、奇跡が如何なるものか考えてみるなら、翼や気球もなく空中へ昇る人々がいるかと思えば、地上へ降りてきた神、生きる者たちと話をしに戻ってきた死者たちのことでもあります。それらを信じる者たちが奇跡を生んでいるのです。これらの信仰は、夢想が齎すものであると思うとアランは言います。

私たちが眠っている時は、日常的秩序と矛盾する出来事でもその儘理解して仕舞います。この世にないものや死とともに、私たちの自分の生活が維持されている時があり、慰めになったり恐怖を覚えたりします。目覚めた状態で感受する現実の対象から、これらの空虚なイメージを良く識別するためには、今までよりももう少し良く熟考しなければなりません。思い出すことは、これらが全て大変良く混淆したり反発し合うことが出来ます。例えば、子供たちは夢と現実の出来事を良く識別出来ないように見えます。

人間は何千年もの間、今日の子供たちと同じように、自分たちが夢を見ているという認識もなく夢想してきたのであり、奇跡や神の存在や死後の世界があると信じてきました。そこから教会の中での懇願が生まれ、教会へ寄付をすることになるとアランは言います。

それに対して、夢想のイメージは現実のものではないという考えをもっているのが天才という者ですが、人々はそういうことを全く分かっておりません。恐らく、天才は何人もいたのですが、人々は天才たちが言うことを聞いた後で、多分不信心で神を冒瀆する人物であるということで拷問にかけて殺して仕舞ったのです。しかし、天才たちが言っていたことは、基本的には殆ど夢想しない人々を熟考させ冷静な人間に育てていましたが、彼らは頭脳を働かす者である前に、食べ物を食べなければならぬ胃袋を持っている不信心者でもあったということです。

要するに最も冷静な人間とは、彼らの中でそのことを話し終えた者であり、眠りながら行動し話をする人々の観察を終えた者です。それ故自分の人生を眠ったように夢想する狂人たちは、夢想も狂気も同種類の共通した観念を生み出しています。冷静な人間という者が恐らく、人間の理性を最初に解明するのでしょうか。しかし聖職者たちは、それでも恐らく、手探りで理性は高慢で墮落したものとして告発するのは当然だと思っている、とアランは言って教会や聖職者たちの現状を認めようとはしませんでした。

この考えは、主にスピノザ以後に二十世紀初頭までその歩を進めてきたのですが、人々が言う程には速くありませんでした。純真な羊飼いの娘は草の上で眠っており、自分に話をする聖母マリアの夢を見て、それが夢であることを認めようとはしません。アランとしては、もしも何かの奇跡を見たならば、その奇跡を解明する何かの真実といえる仮説を見出さなかったならば、夢の中でそれを見たのだと自分に言うのでしょうか。そこでの仮説は、少なくとも全知全能の神よりも複雑でないし難しくもないでしょう。それは仮説の成果を訂正したいという望みを試してみることで、それが冷静な人間には大切なことである、という意味のことを言ってアランはこのプロポを結んでいます。

恐らく、当時のフランスの文学界における夢想や想像力は、現実を否定する重要な要素でもありました。ネルヴァルの『オーレリア』、プルーストの『失われた時を求めて』、そしてボードレールの『悪の華』はその代表的作品であり、夢想や想像力は文学作品を構成させる要件の一つでもありました。しかし、当時のアランの裡には、それらを許容する文学上の牙城は構築されてはいなかったと言っても良いと思います。

〈魂しかないものは魂ではない〉（一九一三年五月二五日のプロポ）と言うアランの言葉は、実は現実と経験を基礎にした人間の営みには∧抵抗∨という対象の存在が不可欠であることを指摘するものでした。神や奇跡や聖職者の言葉は、何の抵抗も許されません。その儘信じるしかないのです。ノアが洪水の後三五〇年生きて、九五〇歳で死んだことも、その儘信じるしかないのです。信仰とはそういうものです。

しかし、アランはそのことを冷静に思考する人間でなければならない、と教会や聖職者たちと対峙して提唱したのです。その結果、アランは四十六歳にもなって志願して戦場へ行きました。戦場も現実であり経験に変わりなかったからです。夢想や想像に溺れる者は、観想的な詩句や昨夜見た夢を言葉にして原稿用紙に書けば良いし、イメージの形や色彩を画布に描けば良いでしょう。言葉や絵具という∧抵抗∨に対峙するのですから、夢を夢の儘に終わらせるよりまだましでした。芸術作品の中でアランが最も美しいものとして高く評価していたのは建築です。石やガラスや鉄という〈抵抗〉が、何よりも現実のものであり、経験そのものであったからです。一体の立像よりも建築を構成している女人像柱の方が美しいと評価しました。

人間を向上させ自由にさせるものは、空気という抵抗を鳩の翼が羽ばたいて自由に飛ぶように、石工が石を叩く行為であり、鍛冶屋が鉄を打つ行為でした。夢想や想像には行為が希薄であり、対峙するものが何もありません。そういう意味で自由な芸術家には、対峙する何かが必要ではありません。表現とは現実と対峙する行為です。但し、夢想や想像はそのものが対峙出来ないものであるように、自由そのものも対峙出来ないものではないでしょうか。言葉を書くこと以外に何もかもが自由な現代詩人たちは、早くこのことに気付くべきであり、宗教家たちも自由であるためには多くの抵抗に対峙すべきだろうと考えます。宗教的修行はそのための行為だろうと思います。集団化の流れの中で浮遊していることは、少しも自由ではないだろうと私は思考します。

西洋の宗教が一神教であることは、常に二者択一を付随する緊張感が伴っているように思います。正義と悪、自由と強制、神の存在と不在の問題は、神が一つであるから湧出してくる疑問でもあります。神が眼に見えない必然は、理性にとっての不具合にもなっていました。眼に見えるものは神ではないという必然によって、見えないものを信じるのが信仰の始まりでもありました。（反対に、八百万の神は岩にも樹木にも神棚にも便所にもおりますから、それを信じる者には選択する精神が希薄です。）眼に見えるものは不変であり得ないのですから、信仰する者にとっての正義も自由も神も、夢想のものと酷似していました。逆に、眼に見えるものは悪であり、強制であり、不信心に通じているものでもあります。神の前での平等は従って、抽象された平等、つまりあなたと私の相対的な平等と言うよりも、眼に見えないものと比べての絶対的平等ですから、王や領主や富裕者がいても不都合はありませんでした。

しかし、眼に見えるものを信じるのが大切であるとアランは言います。奇跡と言われているものでも奇跡を奇跡として信じないで、奇跡について思考して眼に見えるものの成果を訂正しようとする試行が大切であると言います。このような近代的民主的思考は、眼に見えないものを信じる者たちにとっては傲慢であり墮落していると映るのかもしれませんが、天才とは神に祈って餓死する者ではありません。胃袋に食べ物を入れる者であるとアランは言います。才能は眼に見えないものを信じることではありません。正に、天才とは眼に見える現実のものを創り出す才能のことに間違いありません。絵を描かない絵の天才はおられませんし、作曲をしない作曲の天才もおられません。それ故に、宗教や信仰には天才が不要です。キリストもマホメットも、そういう意味では天才である必要はありませんでした。（完）

## 二十四 人間と動物

人間は動物です。しかし人間は動物と同じではありません。それでは何が同じで、何が同じではないのでしょうか。ダーウィンの進化論を過信する者は、人間も進化の過程で誕生したのであるから、進化しなければならない、変わらなければならないと言います。しかし、人間は動物と同じではないと主張する者にとっては、一九〇六年一月二四日のプロポを読むと大いに励まされることになるでしょう。他人の身になって思考を始めること、それが正義の奥義であり、その結果として本当の慈悲の心を理解する、と言ってアランはこのプロポを始めています。

正義に奥義があるとするとするなら、正義とは抽象的ヒロイズムではなく、個別的具体的な理解から始まるものです。先ずはその人を理解したいと思うことですが、そのためには明快で慎重に、彼の権利に注意を払い、自分の情熱を抑制出来る彼の主人に成っていなければなりません。つまり軽率に彼の立場に身を置いて感情的に成らないようにすることが最良の方法であり、反対に他人の身になって考えて自己を二重にしなければならず、その時は自分にとっても不愉快な時であり、悲しみと怒りの間を行ったり来たりさせられます。その時は多分、霧のように何かぼんやりとした観念が表れて、思考も事物も全てを覆って仕舞うのでしょうか。その時は彼も気に入らないで殴ってきます。従って、このような場合は自分自身にとって最悪の時で、懐に潜り込んだ猫のように言われぬことです。「何だって、お前の座る席なんか何処にも無いよ。同情も要らないし、尊敬も要らないよ！」

しかし、もしも誰か可愛そうな人の生きる手助けをしたいと思ったならば、その人の立場に身を置くようになったに違いなく、その人の苦しみを些細に見ないで、安易な気休めは言わない方が良いでしょう。「こうすれば幸福になれるよ。これ以上望むことはありませんね。凄い食欲ですね。寒くはありませんね」

相手が馬の時は「鞭で打つような強制的方法は多くの場合不幸になりませんが、馬たちを興奮させる」ことに人は気付いて自問します。それでも問題は馬ではなく人間のことなのですが、強制的なやり方は人間の場合も正しい時があり、長い時間が必要になるのでしょうか。本当のことを言うなら、最早何でも決まっている方法はありません。自分の喜びの気持ちが正しいやり方を教えてくれます。

オラトリオ会修道士のマルブランシュ（一六三八～一七一五）は、デカルトの物心二元論から第一原因を神とした機会原因論により、動物たちは機械であると信じて、叫びを上げるまで自分の犬を叩き、「犬は何も感じないのだ。何故なら、犬には魂がないからだ」と友人に言いました。人間にも同じやり方で接することは気を付けねばなりません。この陥穽から確実に抜け出るためには規則を遵守することです。つまり私たちが不幸の立場に身を置くことです。そして、恰も私たちのこととして問題にしているかの如く、彼らの利益を考えることです。それがなければ私たちは金持ちが考えた算術に陥ります。その算術によれば、貧しい人々が手に入れる金は、何時も金持ちにとっての余分な金でしかないでしょう。このようにしてこのプロポは終わります。

〈魂のない犬〉は、人間よりも劣っているのでしょうか。優れている人間は、劣っている人間を殴って支配して良いのでしょうか。進化論を過信して間違っ理解した人々は、やがて小さくて弱い者を殴って支配する口実を見出します。自然選択とか自然淘汰を生物の存在に適用していく進化論の陥穽とは、正に競争原理や弱肉強食の観念に表れていました。しかし、その観念は単なる観念であって、真実でも思想でもありません。健康で強い者が生き残って、病人や弱い者は切り捨てていくことが進化でしょうか。環境に適応して変化していく者は生き残り、環境に適応できなかった者は滅びていく者なのでしょうか。病人を長生きさせることが人間の進化に逆行させる行為であるなら、近代医学は進化論に逆行しています。何か抜け落ちているのを感じないのでしょうか。

思考と時間です。冷静に思考すれば、変化するのは全てが進化するものではないのが解ります。ダーウィンも言っているように∧先祖返り∨の例は幾らでもあります。そして、本当の進化は莫大な時間をかけて行われてきました。その時間を斟酌しないで、いたずらに〈変化〉ばかりを図式的空間的に思考しても、真実は指の間から抜け落ちていくことでしょう。浅はかなのです。変わらないもの、変えてはいけないものを冷静に思考する行為の方が、実は進化に近いことを理解すべきです。そして、犬にも人間より優っている点は沢山あります。少なくとも嗅覚は人間よりも優っていますし、走力も勝っています。同様に、病人にも健康な人より優っているものは沢山ある筈です。性急な科学の応用には気を付けなければなりません。まして生物学的事象には人間社会に対して一見説得力があるような錯覚が生じますから、尚更多くの検証や傍証を必要としなければならないと考えます。色々な事象を思い出すことです。変わらないものや色々な人間の気持ちや守るべき法則を思い出し、思考することです。その時、社会の正義とは競争ではなくて、慈悲であり、思いやりであるとアランは言っています。

古典を読む者には慈悲があります。何故なら、慈悲とは人間の変わらない部分を信じ、自分以外のものを愛する心であり、二重の自己を見出すことであるからです。競争する人間には不可能な精神です。しかしながら無欲が限度を超えて枯淡であっても、正義は遠ざかっていきます。「澹(たん)澹たん泊(ぱく)泊ぱくは是れ高風(こうふう)高風こうふうなるも、太(はなは)太はなはだ枯るれば、則ち以て人を濟(すく)濟すくい物を利する無し」(『菜根譚』前集二十九)と洪自誠は書いています。何事も極端な精神に陥らないことが肝要のようです。

アンリ四世校でアランの薫陶を受けた教え子の一人にシモーヌ・ヴェイユがおります。一九〇九年生れの彼女が、実際にアランの授業を受けたのは一九二五年以後で、十六歳の時からでした。その後、女工となって貧しい人々と生活を共にした彼女の生き方も、このようなアランの思想が影響していたように思います。

彼女が一九四三年に亡くなるまでの三十四年間の生活は、正にこの正義の奥義を体現するものであり、学者たちのペダンチックな机上の思想とは異質です。眼に見えるもの、耳に聞こえるものを正しく理解しようとする者には、必然の行動でした。アランが四十六歳の老兵として戦場へ行ったように、ヴェイユも女工となって工場へ行きました。戦争や貧乏に抵抗する者は、戦争や貧乏に無知であってはなりません。無知からは何も始まりません。〈これを知る者はこれを楽しむ者に如かず、これを楽しむ者はこれを喜ぶ者に如かず〉と孔子は言いました。先ずは正確に理解する行為から真の喜びが始まりますし、それが正義の奥義でもあります。それは覇権主義を正当化するために利用されるものでもありません。打算に基づく慈善事業が醜悪であるように、覇権主義に基づく正義も罪悪であると言わねばなりません。何故なら、慈善事業で人が死ぬことは殆どありませんが、覇権主義を端緒とした他国への侵攻は戦争の隠された原因にもなっているからです。

頼みもしないのに人の懐に潜り込む猫は、歓迎されません。お節介は時として迷惑になります。まして多くの人命が失われる戦争が正義の名の下に開始されれば、正義に共感する者はいなくなり、やがて色褪せた無知の残滓が眼に付くばかりになるでしょう。個々の性質を溶解させて全てが同一を目指すメルティング・ポット(坩堝)の社会から、色々な個性をその儘生かすことを可能にする美味しいサラダボールの社会を確認する必要があります。グローバル化社会とは決して前者ではなくて、個々が独自の情報を発信していく後者の社会において正義を育てる制度でもあると考えます。(完)

一九〇六年一二月一日のプロポは、教育についてのアランの考え方が如実に示されている素晴らしい散文です。恐らく、子供たちに正解ばかりを求める我が国の教育者たちには、耳が痛い内容だろうと思いますし、賛同する者も多くはないだろうと思います。つまり賛同者が少ないことが既に、我が国の教育者たちの健全な指導力の欠如と精神の貧困を物語っているように思います。失敗すること、答えを間違えることが教育であるという逆説を素直に理解出来なくなっているところに、既に心の余裕を無くした大人たちに精神的危機が蔓延しているのだらうと思います。算数の先生の話からこのプロポは始まりますが、それは当時のフランス社会における教育の現状を描写したのではなく、あくまでアランが理想とした教育現場の光景であることを言うて置かなくてはなりません。

小学校の先生が、次々に子供たちに簡単な算数の問題を出していきます。一人の子供に「八足す八はいくつですか?」。その子供は、ボタンを押すと直ぐにベルが鳴るように、ポンポンと「一六です」と答えます。しかし、先生は満足していない様子です。同じ児童に尋ねます。「七足す五はいくつですか?」。何時もポンポンと答えるその児童は言います。「四五です」と答えて、その後、直ぐに「一二です」と言い直します。先生は、間違った答えに不満そうですが、それと同じくらいに正しい答えである「一六」にも「一二」にも不満そうです。

先生は、別の子供の方を向き「九足す八はいくつですか?」と尋ねます。その子供は素直そうです。指を一本ずつ小刻みに動かします。そして、非常に早く動かして「一八です」と答えました。「大変に良い。あなたは解っています。あるいは少なくとも正しい答えに近く、大きな間違いを犯しません。さあ、もう一度計算してご覧なさい」と、先生は言います。今度は「一六です」と、その素直そうな子供は答えました。先生は「素晴らしい」と言いました。そして、本当の答えをその子供から無理に引き出そうとせず、又他の子供たちに向かって、相変わらず質問していきます。しかし、その褒めるやり方や咎めるやり方は、現代の先生方をびっくりさせるものでした。

古いタイプの教育者は、この話を聞きつけて何かに慎重になり、算数を教えるこの先生に反論して「あなたが行っていることは、私たちの教育が記憶の中に残すに違いない痕跡をすっかり混乱させても、あなたは恐れないのですか? 結局のところ私たちは出来る限りの真実を教育しなければなりませんし、それを若い頭脳の中に多くの適切な記号として書き込まなければならないのです」と言います。

それに対して、数学を教えるその先生は「もしも記憶の中に記載されるだけなら、真実は何の役にも立ちません。私がおっとよく愛するのは自分自身で見出した真実への近似値であり、それは繰り返し練習するという真実です。私が記憶の中の道を混乱させるとあなたは言いますが、むしろ私は踏み固められた道を耕し直すのであって下さい。それと言うのも、教えられた考えが羊の群のように往来する道であって欲しくないのです。常に耕される土地、常に労働によって一新される土地であって欲しいのです。

子供はよく平然と質問に答えます。私が出れることは、子供のことを考えることだけです。私は何時も何かとんでもない間違いがないかを探します。間違いを言うことは無駄ではない、と私は理解しているからであると思います。別の子供は反対に、熟考して二つの小さな間違いを言いましたが、それは重要なことで、正解は二つの間違いの間にあり、その子供は整然と正解を求めることを知っていますから、既に大変に良く理解している者であると私は高く評価します。或る人が正解を答える限り私はそれを判断することが出来ません。私が彼に期待するのは、最初の間違いであり、間違える方法に倣って私は彼を判断します」と答えました。

教師は本当に子供のことだけを考えているのでしょうか。子供に気に入られようとしているだけである

なら、本当の教育は不可能です。正に教育とは〈繰り返し練習する〉ことにあるのですから、辛い練習を強要する者への評価は当事者にとっては十分に客観的で公平な判断は難しくなります。そういう意味で、子供が教師を評価するのが成果主義の一つの方法であるなら、その方法は慎重に選択する必要があると思います。つまり子供が教育を受けた教師を評価するなら、子供が一人前に評価できるまでの時間が絶対に必要です。五年後や十年後に評価する方法です。良い教師とは、直接教育を受けている時だけの時間で決まるものではありません。本当に質の高い教育は、五年後、十年後に解るものです。いや、もしかしたらそれ以上の時間が必要な時もあるだろうと思います。評価したり判断するためには、評価する方にも成熟した精神と公正な判断力が必須です。教条主義的精神だけでは、とても不可能です。真実を見抜く柔軟な心と、短絡的な結果よりも長期的な人格向上を重視した精神的成熟が、どうしても必須であると考えます。現代の我が国にアランが生きていたとするなら、大学に進学することを目標にする現代の受験制度は間違いなく批判するでしょうし、条件反射的に正解を書いていく受験生よりも、美しいものや思考したものを絵や詩歌で表現出来る若者の方を高く評価するだろうと思われれます。何故なら、自ら思考し表現することは民主主義社会にとっては重要な基本要素になっていくからです。決まっていることを忠実に実践出来るだけでは民主主義社会は成立しません。専制君主制なら王様の言うことを忠実に実践出来ることが大切な資質になるのですが、民主主義社会にとっては先ず自ら思考し表現することが健全な社会を構成する基本要素になっていくからです。アランはそれを〈共和制〉と言っていました。そして、教育の意義も正に、個人の思考と自由と独立が保障された精神的自律や政教分離による〈共和制〉の確立にあるようですし、そのための知識の習得と人格形成にあるように思います。そのためには国民は子供であってはなりません。成熟することです。(完)

## 二十六 クリスマスのこと

---

一九〇六年一月二九日のプロポは、クリスマスのことからアランの思考が始まります。クリスマスの一二月二五日の真夜中のミサには、如何なる意味があるのでしょうか？アランは次のように書いています。「それは太陽の祭りでもあり、或る意味では夜への別れでもある、と私は考えます。つまり真夜中とは、太陽が沈んで降下するのを終える区切りの時であり、真夜中が過ぎれば少しずつ太陽が再び上昇し始め、光と暖かさと喜び、そして植物の緑と収穫を齎すことになります。神の新たな誕生のようでもあります。そして、星々を見詰め、太陽の運動を測定出来るようになった人々は、何よりもこの誕生を見抜きます。私はそのような星の運行の意味を思考します。従ってクリスマスは、既に〈春〉の祭りになっています。

そういう意味では、クリスマス他に、〈春〉の祭りには復活祭があります。太陽の再来を祝うものもありますが、但し少しばかり遅い時期で、その祭りから人々が期待しているものは、より暖かい太陽、花々の開花という感覚的効果です。その祭りを最初に考え出した時代は、天体のことをまだ良く観察しないで、冬至の概念も無かったと私は結論を下しております。

その後、天文学者たちが太陽の復活をより精密に詳しく調べて、その時から新しい祭りの意味は、大多数の人々にとっては全く曖昧な儘になっていました。何故なら、そのときは丁度、寒さが一番酷くなり始める時ですが、太陽が再び顔を出して挨拶し、日が長くならなければならない時でもあるからです。そのことに倣って、私はクリスマスを賢者たちの復活祭と呼び、復活祭は先を見ない無学者たちのクリスマスと呼ぶでしょう。

このことは多分、歴史学者が理解していることと全てが上手く一致していませんが、そのことは重要ではありません。何故なら、歴史学者たちが知っていることは大したことではないからです。彼らは小麦の耕作が何時始まったのか何も知りませんし、船の始まり、梃子の始まり、車輪の始まり、火の始まり、一輪手押し車の始まりのことを何も知りませんし、火薬の始まりのことさえ知りません。本当のことを言うなら、人類の歴史における最も豊かな時代を歴史学者たちは完全に認識していません。

歴史の始めの物語において、人類は既に未熟ではなくて成人した大人になっており、既に今日と同じ知識を持っています。人類は今日と同じ力学、同じ道徳、そして同じ宗教を持っておりました。間違った知識しか忘却しません。このようにして何世紀もの間、試行錯誤を繰り返してきた習慣というものは合理的です。神学者たちは、おしゃべりや抽象的観念とともに、そこに閉じ込められた真実の思想を消し去るまでには至りませんでした。かくして断食、罪の懺悔、聖体拝領、ミサ、クリスマス、復活祭の全てに意味があります。宗教においては全てが真実ですが、説教は除外します。全てが良いのですが、司祭は除きます」

このように書いて、このプロポは終わりますが、アランは決して無神論者ではないのが解ると思います。アランが信じていないのは宗教を権威化している存在者としての司祭であり、そのための思想を祖述している説教です。クリスマスも、そのために利用されるものであってはなりません。過去よりも未来が進化しているという思想も認めないアランですが、過去を権威化して現在を消し去る思想も愚かです。〈暖かい太陽と花々の開花〉という希望を信じられる祭りとしてのクリスマスでなければなりません。春分が過ぎ、最初の満月後の祭りである復活祭は、既に〈希望〉の後の祭りであり、未来に希望を見る賢者たちのものではないとアランは言います。そして、希望は特定の人間を権威化して生まれるものではなく、小麦の耕作を一番最初に開始した者の名を現在では誰も知らないように、膨大な時間の中で間違いを矯正してきた人類の知恵と同じ精神でもあります。そういう意味ではクリスマスも復活祭も、人類の知恵としての意味がありますが、特定の人間に直結していく歴史的精神はさほど重要ではありません。重要なのは船であり、梃子であり、車輪であり、火であり、一輪手押し車であり、火薬であって、それらを利用する特定の間で

はありません。

科学は、間違いを忘却することを知りません。間違いも事実として継承していきます。意味は後から追隨していくばかりです。例えば、戦時における軍事技術が平和時に応用されれば、新しい意味が生まれてきます。事実は意味に先行していきます。しかし、その意味が曖昧な儘であったとしたなら、事実は忘却されなければなりません。何時までも後生大事に所有し続けられれば、恐らく身の破滅になりかねません。原子力の平和利用は人類の知恵に相違ないと思いますが、核兵器は人類の間違いとして一日も早く忘却すべきである、とアランなら言うことでしょう。何故なら、それは将来何時までも利用してはならない有害なものとしての〈間違い〉であったからです。恐らく、装飾や権威の象徴として造られたに違いない勾玉や銅鐸を忘却したように、核兵器も忘却すべきであり、博物館の中で展示すれば足る代物です。我が国は唯一の被爆国として、核兵器の無用性を全世界へ声を大きくして言うべきであると考えます。核兵器がなければ維持出来ない権力は、民主主義社会や共和制社会を成立させる真の力ではなく、正に専制主義的社会の在り方に繋がっていく、子供のように未熟な精神であり権力であると言えるでしょう。

人間としての希望を持つためには、復活祭まで待つのではなく、先見の明を持った賢者たちの復活を祝う意味としてのクリスマスを確認すべきです。復活して良いのは希望です。核兵器には希望がありません。そのことを理解するのは特定の間人ではありません。そのことを最初に理解した者はさほど重要でもなく、船に乗っていることが重要であり、そのように理解している者が現代に存在し続けることが重要です。平和は英雄が作るものではなく、希望を持つ者たちの合言葉でもあります。(完)

一九〇七年一月三日のプロポは、二頭立ての乗合馬車のことについて書かれていますが、多くの譬えを象徴しているようで大変に興味深いプロポです。一九〇七年はアランが三月三日の誕生日を迎えて三十九歳になる年ですが、一九〇五年にはフランスにおいて政教分離法が成立していました。そして一八九四年にドイツ大使館へ機密情報を流したという冤罪のために軍法会議で西アフリカ沖の悪魔島へ流刑されたユダヤ人のドレフュス大尉が、一九〇六年には最高裁でやっと無罪が認められました。その間のフランス社会はドレフュスを擁護する人道主義・共和制擁護のドレフュス派と、反ユダヤ・カトリック・軍部擁護の反ドレフュス派に二分されていました。つまり当時のフランス社会は、フランス革命や人権宣言に唱えられた〈人権〉に基づく共和派と、軍と国旗で国民を団結させるナショナリズムの国是を優先する国家主義に二分されていましたが、当初は少なくとも国家は宗教を認めず補助金も支出しないで、〈人権〉が優先される社会が成立していました。しかし、モロッコの植民地問題やドイツとの戦争の脅威によって次第に国家主義が台頭してくるようになります。前者には、文学者としてはエミール・ゾラ、シャルル・ペギー、耽美主義に修まり切れずに立ち上がったアナトール・フランスなどがおりました。後者には、右翼思想の小説家で政治家のモーリス・バレスがおりました。勿論、アランは前者の立場を急進的に擁護する思想家で、自ら民衆大学を創設して労働者たちを前にして講義しました。しかし、フランス社会が二分された儘、内乱状態に陥ることにアランは決して首肯していませんでした。このような当時のフランス社会の状況を念頭に置いて、プロポを見てみることにします。

「昨日、私は乗合馬車の二頭の馬を観察しました。各々の馬は、拘束状態から解放されたいと思い果敢に働いていますが、その方法は同じではありませんでした。

二頭のうち一頭は、若かったので性急で、殆ど息をつく暇もとらず激しく綱を引っ張りますが、前進してもしなくてもどうでも良いのです。馬体は汗だらけで、鼻からは荒々しく白い息が出ていました。蹄鉄を着けた足下で石畳が火花を放っていました。自らの外へ出て行く力を未だ冷静に測れずにいるのは明らかで、自分のものに出来ずにおりました。そして、その場で飛び跳ねる時でも、立てた音と力が動きの幻想を更に与えていました。革命家たちもそのようなもので、馬の裡で起きたものが人間の裡でも起きているようなものです。

別のもう一頭の馬は、温和しかったです。諦念していたのではなく、決してそうではなく、強情であることはもう一頭の馬と同じでしたが、もっと利口でした。ブレーキが掛かると、どんなに前へ進もうと努力しても無駄であることを、その馬は理解して知っていました。その時は停止して、大きく息を吐き、力を貯めて回復させ、あらゆる勇気を奮い起こしました。そして、その馬が知っている合図で障害物が外れて前進が可能になると、弛まぬ力を出して綱を引っ張り、上手に地面に足を着け、だんだんと筋肉を緊張させていきました。恐らく、その馬は次のように言っていたことでしょう。「私は前進し、努力は空回りしない。相手の馬に対しての勝利、相手の馬よりも一歩勝つことが私を自由にしてくれるだろう」。その馬は仲間にそのことを説明するのですが、多分、その仲間は年寄り扱いしました。

二頭の馬は無知だったのです。馬たちはお互いに戦っていたのですが、綱が二頭を連結しており、二頭が勝利した障害物とはブレーキではなくて頑丈な馬車であり、それは大きな車輪の上に乗っていて、仕事に行く人々で一杯だったのです」

革命家たちは、社会の前進に与しないで、ブレーキが掛かった儘、大騒ぎするようなものかもしれませんが、国家主義者と共和制主義者もお互いが対立して戦うことによって、社会が前進するための勝利が齎されるのかもしれませんが。より健全で生活しやすい社会が生まれるのかもしれませんが。一党独裁ほど生活しに

くく、不自由な社会はありません。何故なら、一輪車は絶えず前進していないと倒れて仕舞い、ブレーキを賭ける革命家や改革好きは排除しなければならないからです。革命家や改革好きは常に現状を否定しますし、必ず現状を先ず停止させ破壊させます。そのような行為は反社会的行為に相違ないのですが、右の車輪と左の車輪があることによって、ブレーキが掛かって停止しても安全です。革命家たちや改革好きが大騒ぎしても、社会制度の崩壊や秩序の崩落を未然に防御することが出来ます。そういう意味からも、馬車に乗って社会を前進させていく者たちは、弱者の意見や少数意見にも耳を傾ける必要があります。右の車輪ばかりを当てにしないで、多くの者たちの意見も採用して馬車の進路を決定しないと、恐らく同心円上を回るばかりになって、メリーゴーラウンド化された社会になることでしょう。正に、成熟のない幼稚な社会です。真の公平や正義に希薄な我が儘勝手な社会であり、競争原理が闊歩する低負担低福祉の社会です。そのような社会に類似しているのが実はアメリカ社会でもあり、自由と引き替えに世界から孤立することが一番の恐怖でもあります。勝手気儘な社会は、自由な社会ではありません。勝手気儘になれば、やがて孤立することになるでしょう。自由を願いながら孤立した者は不自由そのものである、とアランも言っています。勝手気儘になった一輪車は、孤立しないように権力を傘にして疾走しなければなりません。そういう意味で言うなら、全体の福祉を念頭に置いた社会には、右の車輪も左の車輪も必要だろうと考えます。(完)

一九〇七年二月一五日のプロポは、哲学者と言われている人との会話です。アランは自分を哲学者とは呼んでいません。恐らく、一般的に哲学者という人は数式のようにこの社会や人生を思考する人であり、決して人間の生活とか幸福について思考し行為する人でない、と判断したからだろうと思います。その哲学者はマントに付いた粉雪を払いながらアランに言いました、「実際に不法侵入者が始め、哮り狂った犬たちが出てくるようになると、全てそれらは春が近い兆しです」。

アランはその哲学者に言いました、「凍った泥濘に足を入れるや否や、春のことを考えるためには哲学者がいなければなりませんね。四季を通じて一年中、狂人はいるに違いないとあなたは考えないのですか？」。

哲学者は言いました、「その通りです。何時でも小さな粒の種子はあります。しかし、地球の半分が太陽の側に向き始める時、氷の層が極地の方でばりばりと壊れ、そして水が山腹を流れ始めるとき、人間の血液も氷が溶けるように激しく多量に手足を通して頭の中を流れ始めます。それは情熱と悪徳を刺激します。或る者の裡には野心が目覚め、他の者の裡には恋愛が芽生え、知能が足りない者たちの裡には狂犬病のような怒りが生まれます。人々は新しいワインのように発酵し、感情が沸き立つが如くです。雪の下のこれらの仮面をすっかり見てご覧下さい。女は男のように見え、男は女のように見え、彼らの鼻はすっかり異常に敏感になり、理性ある人々でさえも少しは羽目を外して騒ぐことも必要であると教えています。そして、始まったばかりの四旬節にも同じ意味があります。復活の受難を、血を流している牛を食べて祝うことは危険であり、血を絶つことで人間の愚行を減少させることは良いことである、と司祭たちは理解しました。断食は謝肉祭の後にきますが、それは初期症状のときに飲む薬のようなものです。大変に行儀が良いものです。神を讃えましょう。神がしでかした大失敗を修復するために、多くの理性を人間に与えたのですから」

アランは言いました、「しかし、あなたが哲学をやるのは、暑くなったり寒くなったりすること、大地は彼方でも此方でも循環していて、私はあなたを何時も冷静に見ていますが、あなたは断食を守っていませんね」。

彼は言いました、「私は自分の本質や長い修行の結果、私の情熱はすべて話をするだけで弱めることが出来るのです。私は言葉で正気を失うことになりませんが、そのことは誰にも悪を与えません」と書いて、アランはこの哲学者が術学者であり、偽善者でもあることを示そうとしてこのプロポを終えています。

哲学者は、人生観・世界観の探求者であるとともに、それらの世界を生きる者としての行為者でもあると考えるアランにとって、一般的な哲学の教授は人生観・世界観という知識の提供者であり紹介者に過ぎませんでした。そして、真の哲学者は単に現実を把握するだけでなく、未来を洞察し、進むべき道を明らかにしていく者であり、〈断食〉を実践する人でもあります。

後ろ髪を長く垂らして過去を後悔し、虚ろに両手を前に差し出して未来を憂うばかりで、我が国のお化けのように両足のない現在を正確にしっかりと理解せずに現在に立脚しない者は論外ですが、現実のみを問題にするだけでも真の哲学者とはいえないのでしょうか。アランは哲学の教師として、単に生徒たちの大学受験資格のために哲学を教えていたのではありません。生徒たちが生きていくべき道としての哲学を教授する者として、多くの優れた思想家や文学者や政治家を育てました。アランの教室は、ソルボンヌ大学の学生たちも多く聴講しに来ていて、何時も一杯であったと言われています。高等学校の授業に大学生が来ているのです。恐らく、そのような例は我が国には皆無だろうと思います。最近では高校生が大学の授業を受けたり、修業年数前の入学や飛び級の制度も出来たようですが、大学生の学力低下により高校のカリキュラムをやり直すことはあっても、高校の授業が魅力的で興味が湧く内容であるために大学生の受講に耐え得る例があることは聞いたことがありません。もしかすると人間としての成長のためには、高校の

授業は大学の授業よりも大切に重要であるかもしれませんから、大学生に成っても聴講すべき高校の授業があっても可笑しくありません。教育の効果は〈繰返し〉にあると思って間違いありませんから、真の教育の発展を考えるなら、大学生が高校の優れた教師の開講する授業を聴講する機会は作るべきであると考えます。春先だけに狂人が現れる訳ではありません。健全なる人間のための教育は何時でも行われるべきであり、そのための機会は至る所で提供すべきものであると考えます。(完)

田舎の生活と、都市の生活についてアランは書いています。一九〇七年二月二六日のプロポは、先ず田舎に暮らす建具職人の生活について描写しています。

「田舎の建具職人の小さな家は庭に囲まれています。その庭で三人の子供たちが走り回り、建具職人の妻が行ったり来たりしています。井戸から台所へ行き、下着を洗い、兎に草を与え、スープを作る準備をしています。建具職人の彼は、鮑脣の良い匂いがする仕事場で、歌を歌いながら仕事をしています。もしも他の家へ働きに行くならば、そんな時は新鮮な空気を鼻から吸い込み、雲の流れを観察しながら、静かに出掛けて行きます。そして、彼は農民と知り合いになることもなく、今度の収穫期とか皆と一緒にやるべき仕事がある時でも、少しも農民と話をすることがありません。日曜日になっても居酒屋へ入り浸ることもなく、蜜蜂の世話をして庭を耕します。彼は美しい絵を一枚も見ない男です。名曲を聴くこともありませんし、講演を聞きに行くこともありません。電話や電灯も知りません。自分の道具と両手と技以外は何の機械も使いません。けれども事物のことは良く分かっていて、読書や人から聞くのではなくて、直接見て彼は毎日学んでおります。学んだことは話すためではなく、思考するためでもありません。そこには端倪すべからざる人生があります。

工場労働者は、日当たりが悪く換気が悪い部屋から一日が始まります。彼と妻は大急ぎでコーヒーを飲み込み、後片づけをしてきれいにしてから、小学校や幼稚園に遅くまでいることになる子供たちの服を急いで着せます。妻は幼児を連れて工場へ行きます。そこには託児所と言っているものがあり、小屋が建っています。

男と女は、埃や煙だらけの空気の中で一日に十時間働きます。息を吹いているかの如き力強い機械に追い立てられて、何時も走り回っています。夜になってやっと子供たちの涙をかんでやる時間がとれるようになり、頭は馬鹿になってへとへとになってベッドへ身を投げます。彼らの日曜日は、石油の臭いがする郊外で過ごします。この気狂いじみた労働を二十年間続けた後も、彼らが田舎の暢気な建具職人よりも豊かになることはないでしょうし、健康でもなく、金持ちでもありません。全てがそれらと反対です。以上二つの生活タイプは、理想的な都市を想像するのに有益です。二つの間でどちらが良いか、私は迷うことがありません。申し分のない社会が大工場のようなものであるとは私にはどうしても思えませんでした」とアランは書いています。

アランの『幸福論』は、当初、一九二五年に六〇編のプロポが纏められてニースの出版社であるジョー・ファールブル社から五六〇部の限定版が出版されました。その後、一九二八年に九三編に増補されてN R F (ガリマール社) から出版され、ほぼ現在のものになっています。いずれも原題は〈幸福に就いてのプロポ〉でした。九三編のプロポのうち、一九一四年以前に書いた〈初期プロポ〉は四一編に及びます。それまで如何にアランが書く主題に〈幸福〉が多かったかが分かると思います。極論を嫌うアランですが、哲学も芸術も文学も教育も政治も経済も宗教も、その目的は人間の〈幸福〉にあるといっても過言ではないのがアランの思想の根本であるように思います。幸福であるためには、工場で働くよりも田舎で生活する方が良いというアランの言葉は、正しく人間の幸福と自然は多くの場合符合していることを表しています。

自然破壊は、正に幸福破壊です。人間の力で破壊された自然は、必ず人間の力で再生されなければなりません。そのことを常に忘れないことが、正しい土木の機能でもあります。長い時間が必要になりますが、伐採された樹木の再生は並木となって可能かもしれません。しかし、絶滅した動物の再生は如何にすれば良いのでしょうか。動物の絶滅を放置すれば、やがて人間の絶滅にも通じていくものと考えます。日本狼を絶滅させ、朱鷺を絶滅させてきた日本人は、少子化の時代を迎え、自らも絶滅への道を歩み始めたかの如

くです。自然を大切に、自然とともに生活出来る道を確認することが大切であるとアランは言っています。幸福な生活や人生を思考する上で、大変参考になる忠告であると私は考えます。何故なら、忠告とは何時も抽象的で形而上学的ではなく、実践的で方法論的でもあるからです。幸福という泳ぎを覚えるには、水着になって実際に水の中に這入ってみなければなりません。自然を感じなければなりません。少なくとも抽象的生活、形而上学的生活に幸福は見付からないでしょう。幸福は頭の中にあるのではなく、自然や事物との接点の中から湧出してくるものです。幸福は現実のものであり、未来に希望を見出している現在のものであるともアランは言います。田舎の生活は現在に幸福を見出している〈現在のもの〉であることが多く、都会の生活は過去や未来に生きることが多い抽象的なものであることが多いでしょう。そういう意味で言うなら、都会で幸福になるには出来るだけ積極的に自然や事物に接触して、現在を大切に生きる方法を取得することにあるように思います。(完)

美について語るアランは、決して美学のことは語りません。美は学問ではありません。美は学者のものでもなければ知識人や金持ちのものでもありません。つまり美しいと感じる心は、詩情と同じように人間感情の表出であって、感情の浄化でもあります。美は、美術館の中だけにある訳ではありません。「美は見なくてはいけない何かであると思われるが、じっと見なければいけないものではなく、人が働いている時や用事があって出掛けている時に、ちょっと目に這入ってくる何かである」とアランは一九〇七年三月一〇日のプロポに書いていますが、このプロポの冒頭でアランは先ず、美術館が嫌いであることを述べています。

「例えば、きれいなカップでコーヒーが飲めたならば、食事の間に草原や樹木の新鮮なイメージを都会の真ん中で眼の前に持つことが出来ます。あるいは雪が降っている間に夏の暖かい色彩を見ることが出来ます。椅子に座り、ギリシャ神話に出てくるライオンの頭、山羊の胴、蛇の尾をして火を吐く怪獣キマイラの木彫を自分の手で触れることが出来ますが、沢山の人の手によって少し磨り減っています。外へ出掛けて時刻を美しい時計で覗くこと、急いで裁判所の中庭を横切ること、雨が降るかどうかわかるために大空を仰ぐこと、そして笑って見える怪奇な雨水落としの像に出会い、前進しながら美しい遠近法の変化を見ていくと交叉アーチが相交わり、一つの塔が他の塔の背後で高く聳えています。それらは全て眼を楽しませてくれますが、そのことを思考することはありません。反対に、別の思想の基本となるものや緯糸がそこから作られていくものなら、私は美的喜びに精通するようになるでしょう。

しかし、美術館では前へ進むことを余儀なくされて、家具のない大部屋を立ち去ります。美術館では財産目録が作られます。入浴している女の作品から、別の女の作品へと移ります。爺さんの肖像画、金色のシーツのような平原、太陽が沈む空、読書する女性、笑っている男性、祈っている修道僧、仮面をしている女性、花束を持っている女性、手袋をしている女性、馬たち、のろ鹿たち、果物の籠、そして大鍋にも同じような大きな感動を覚えます。そして、携帯品預り所で自分の傘を受け取り、その後、感情と思想の調和を少し取り戻したことが語られます。しかし、美術館へ行くのは北風が吹いている時に暖かい衣服を着ようとして店の中へ這入って行くのと殆ど同じであり、寒くないねと言って軽くなった気持ちで散歩するのと同じでした」と書いてアランはこのプロポを終えますが、少なくとも美術館は実際の生活の中から見出せる美とは異質のものでした。何故ならアランにとっては、美も日常の生活の中で機能して良いものであるからです。醜悪な日常の生活の中から発見した美が、日常を美しく支えて平安な心や崇高な心を可能にしてくれるからです。日常の生活に対して抵抗する力がそこには存在しています。しかし、美術館にはこの抵抗も力も不在です。在るのは現実の生活とすれ違う心地よい環境であり、人間の積極的な意志が見出せない受動的な美意識への同衾でした。

アランがパリのセーヌ川に架かる橋の中で好きになれないものの一つは、装飾に溢れたアレクサンドル三世橋でした。ナポレオンの墓があるアンヴァリッドの北に位置して一九〇〇年のパリ万博の時に完成した橋です。欄干には凝った装飾の街灯が並んでいますが、アランは日常の生活からかけ離れたそれらの装飾を美しいと感じませんでした。それは美の捏造とも言えるものでした。川を渡るという機能を無視した装飾には、機能美が見出せません。自然ではないのです。人工的な虚飾を嫌悪したアランの美意識は、その儘アランの生活姿勢でもありました。美しいものは殆どの場合、倫理上も正しいものであるとアランは言います。美しいものは生活を正しくします。何故なら美しいものは皆が注目するからです。悪徳が人目を憚るものであるなら、正義は多くの人々の目による監視を受け入れます。その監視に耐え得たものは、やがて人々の眼には美しいものと写るに違いありません。勿論、これは予感であり仮説です。しかし、この

仮説は多くの場合、真実として立証されるとアランは言いました。

例えば、人間の歩き方を見てみましょう。泥酔した者の歩き方はふらふらしています。不健康であり決して美しい歩き方ではありません。一直線上をすっすつと歩くと、自然に姿勢が良くなって美しい歩き方になります。健康上も背筋が伸びて正しい歩き方なのでしょう。皆が快適な気持ちになりますし、不健康な思考も消えることでしょう。美しいものにも気が付きます。しかし、美術館の中にいる人々の歩き方は違います。彼方へ行ったり此方へ来たり、不規則な歩き方です。恐らく健康上も余り良くないでしょうし、美術館を出た時に覚えるあの疲労感は誰でも経験したことがあると思います。恐らく、美術館は美を比較検討し学問化し言葉に翻訳するには好都合な施設ですが、音楽を聴くように絵画が所有している独自の時間というものを感知する余裕は円熟した鑑賞家でない限り、なかなか取得出来ないだろうと考えます。円熟した鑑賞家はその時、美の機能を把握するでしょうし、美が美のためにあるのではないことを理解します。機能を喪失した美は、真や善とも無縁に成っていくに違いありません。絵画は建築の内部を完成させるのですが、美術館の絵画は美術館という施設を完成させることとは無縁の場合が多いようです。近代以後の絵画はそれ自体で完成を目指しましたが、パリのオランジュリー美術館に見るモネの「睡蓮」のように、建築に付随した完成も絵画の機能にとって重要な側面であり、美の基本を思考する上でも見逃してはならない点であると考えます。そういう意味で、最高の芸術は建築であるとアランは芸術論の中で思考していました。(完)

「全ての生物の始まりは魚でした。そのことは既にソクラテスの時代よりも前に分かっていた定説で、今日では極めて本当らしい仮説として採用出来るものです」と書いて一九〇七年三月一六日のプロポは始まります。

「その仮説は真実のものとして認めましょう。でもそこから色彩や情熱についての影響に関しては、馬鹿げたことを言うかもしれません。

もしも生物が最初に海の中に生きていたとするなら、初期の生物の眼は水の中でも開いていたでしょう。つまり海の水が通過させずに遮断させる赤い光からは保護されていたことでしょう。かなり明るい海の洞穴の底の方を見てご覧なさい。緑色や青色の豊かな色調をしており、〈光の起源〉という観念を与えられてあなたは落ち着いた眼をしています。

その後、多くの動物たちに災難が起き、取り分け大きな災難は海が泥地になり、続いて乾いた大地になり、その結果、多くのものを諦めて受け入れましたが、例えば赤い光を見るようになったことです。しかし、そのことは苦痛がなかった訳ではありませんでした。今日、私たちは赤色を原色として見るようになりました」

アランはその頃、当時は無名ですが将来有名になるに違いない或る生物学者と会って話したことがあったと言います。彼と別れてアランは次のように自問しました。大したことを言うのではありませんが、それでも読者は大満足してくれるに違いないとアランは言います。

「雄牛が赤いスカーフに興奮する理由は、以上のとおりである。赤い光線で働いている写真工房の労働者は、他の職場の人々よりも活発に口論するのもそのためである。青色は幸福のシンボルであり、緑色が希望のシンボルであるのもそのためである。そして、義理の息子を愛して、不幸を齎した愛によって打ちひしがれたファイドラが震えながら次のように叫んだのもそのためである。「神よ！ 私は何故あの森の陰に座らなかったのだろうか！」

哀れなこの女は優しい光の光源を望んだ。そして、鱈や舌平目の素朴な色彩を望んだのだ」と書いてアランはこのプロポを結んでいます。

人間の血液の塩分の割合は、海水の塩分と同じです。それだけでも人間の祖先は、海洋生物であったことを証明しているように思えますが、恐らくそれだけでは厳密な科学にとっては傍証に過ぎないでしょう。人類が火を発見した経緯や、船や車輪を発明した経緯もはっきりしていないのですから、まして人間の祖先のことは傍証に傍証を重ねていく方法しかありませんし、ダーウィンの進化論も仮説でしかありません。勿論、それは現代において有力な仮説になっておりますが、少なくともアランはこの科学的仮説を人間の思想には殆ど応用していません。何故なら、この仮説を人間の思想に応用すれば、常に新しい思想が優れていることになり、古代や中世の思想を否定するようになるからです。正確に言うなら、現代人は古代や中世の人々よりも優れている訳ではないと認識することが、現代の多くの間違いを訂正することになるとアランは考えます。科学の進歩が生んだ多くの間違いを、アランは自らの思考によって訂正します。魚が人間になるまでの進化の時間のことを考えれば、その間に実に多くの〈先祖返り〉が行われていたこともダーウィンの『種の起源』を読めば良く分かることです。もしかすると有史以来四千年の間に、現代人は科学の進歩に反比例して思想的には〈先祖返り〉しているのかもしれないのです。勿論、これも仮説です。

しかし、人間が何時も進歩している訳ではないことだけは確かです。何故なら、人間が人間を殺す行為である戦争が、二十世紀ほど多かった世紀もなかったからです。科学は確かに進歩しましたが、科学の進歩に人間の進歩が追いつきませんでした。追いつくどころか逆に退化して、〈先祖返り〉しているかの如く

です。血で血を洗う動物に見る弱肉強食の観念が、恰も競争原理や改革という美名の元に正当化されていく課程は、如何なる合理的理由があろうとも智慧を喪失した人間の化け物を見る思いです。人間は放任すれば競争します。放任すれば闘争本能が発揮されます。国の役割は放任することではなく、正義や公平を監視して、それらが保たれるように是正していくことです。〈小さな政府〉であっても何もしない政府では困ります。アメリカ合衆国のように他国の指導には熱心ですが国内が〈低負担低福祉〉の国は、個人が自由のようであっても一度災害があれば、自分を守るのは個人としての自分しかないのですから、略奪や暴動の発生も多くなるのは当然です。反対に、〈高負担高福祉〉の北欧の国々に生活する人々の満足度は大変に高く、略奪や暴動の発生も少ないようです。自分で自分を守るしかないのは動物と同じです。弱い者や幼い者に皺寄せがくるのは必然です。〈低負担高福祉〉は理想ですが、やはり現実問題としては不幸な人間が多くなる〈低負担低福祉〉よりも、人間の高い教養と文化に支えられた〈高負担高福祉〉で安心できる国の方が、正義と公平が保持され易いと考える議論がもっと多くあって良いと私は考えます。(完)

フランスの化学者で政治家であったマルセラン・ベルトロは、有機合成の研究者でエステル生成実験などを行い、文部大臣や外務大臣を歴任して一九〇七年に亡くなりました。宗教的な権威から独立した〈自由思想〉のことを、偉大なるベルトロの死に際して沢山の優秀な人々が話すことは間違いないのですが、面白半分です。〈自由思想〉はもう廃れていて流行っていないが、そうしたのはきざな男たちである」とアランは一九〇七年三月二六日のプロポを書き出し、歴史についての感想を述べていきます。

「まあ、きざな男たちには笑わせて置きましょう。彼らは鈍く、平民であると見做すのを甘受し、私たちの基本である謙虚さを繰り返して言いましょう。それは私たちの祈りのようなものであり、ロザリオの祈りのようなものです」と続けて、三種類の検討すべき真実があるとアランは言います。人がアランに語るもの、人がアランに見せるもの、人がアランに証明するものを、真実のものか否か検討するのです。

「人が私に語るものについては一つの規則しかありません。それは、もしも自分自身で確認出来ないとしたら疑うことです。そして、この規則は歴史を邪魔ものにして歴史を見直します。私たちは現在を生きしており、今を生きる者はすべての過去が私たちの裡や回りにあります。残りのものはすべて鼠にでも呉れてやればよく、取るに足りないものです。現在のフランスが何であるのかを知るためにだけ勉強なさい。あなたがじっくり時間をかけてやるのはそのことです。

その上に更に、歴史を疑わなければなりません。歴史は短い物語が増大していったものであり、激しい感情によっても変えられたものです。幾つもの逸話がありますが、価値あるものは正確無比で微笑しています。

私が目撃者となる事実に対しては、守るべき規則は単純です。私が何度でもそれを再現しようと努めるか、何度でもそれを再現するように人から要求されます。もしも私に、天井にまで届くくらいの洋服ダンスとか髪の毛を引っ張る幽霊が私に示されなかったならば、〈やり直さない〉と何時も言います。そして、もしも人がやり直さないのなら、一つの歴史や幾つもの歴史による出来事を各自の勝手な主張と考えて、そのことについては最早考えなくなるでしょう。一人の人間の人生を書き記すためには、調べるべき出来事が余りに沢山あります。

結局のところは証明することです。人が考え始める分かり切ったところを私が良く吟味する時、意味を持つ言葉が途中で変えられなかったことが確かであると思う時、その時はすべてを調査したのであり、最早何も異論の余地を挟まず、それが正しいことであると私は何時も言います。証明は何時も何かを仮定します。証明は「もしも」に吊されています。私がそれを外して、証明することを邪魔するのは誰でしょうか？」と疑問を提示してこのプロポは終わっています。

証明することを邪魔するものの一つが宗教的権威です。宗教にとっての脅威は、人々が懐疑することです。信じないのですから宗教の世界は崩壊し、それまでの歴史観も変更せざるを得なくなります。二十世紀初頭の時代に、アランは疑うことによって、それまでの宗教と歴史を見直そうと努めました。何故なら、〈自由思想〉が共和制社会には必須であったからです。宗教の世界は教義に基づいた宗教観が秩序ある社会を築きます。神を代弁する宗教的権威者の言葉は絶対です。あるいは専制君主制の社会は君主の思想によって秩序ある社会を維持していました。国王の命令も絶対です。

しかし、共和制の社会にとって重要なのは、人々が自由に思考して自由に判断できる自発的自主的な精神が基礎にあることです。誤解や偏見があってはなりませんから、全体の福祉に反しない限り情報は何時も公開されていなければなりません。つまり国民が主権者である制度にあつては、国民すべてが政治に対して責任があり、国民すべてが思考し判断しなければなりません。フランスにおいては既に、一九〇五年

に政教分離法が公布され国家は如何なる宗教も公認せず、従って宗教活動の一切に補助金も交付しなかったのですが、それは「私たちは現在を生きており、今を生きる者はすべての過去が私たちの裡や回りに」あるからであり、「現在のフランスが何であるのか」を知る必要があるからです。歴史は〈現代〉を説明するものでなければなりません。宗教から独立して、自由意志によって思考し判断された〈現代〉を確立するために、それまでの歴史に代わって新しい歴史が塗り替えられていきます。(完)

死についてアランが思考した一九〇七年三月三〇日のプロポは、先ずモラリストの会話から始まります。そのモラリストはアランに言いました。「確かにそこには高貴な人生と美しい死がある。その〈精神〉に敬意を払っているのが強さというもので、パンテオンの霊廟に祀られるに相応しい光景がそこにある。それと言うのも、それは正に〈神〉に還ったばかりの一人でもあるからだ。そして、一つの事実に私は驚くのだが、その強い精神というものから決して神や永遠が感じられないのだ。人間性以上のものではないし、死以上のものでもない。人生の意味とはそれ故、時として何も偉大なものではない！」

このような言葉を聞いて、次のように言ったアランの言葉は、死について如何にアランが思考していたのかが良く理解出来るものです。「人間には二種類の人間がいるに違いありません。それと言うのも、あなたが今言ったことを理解する人間と理解しない人間がいるからで、私は理解しない人間であるからです。しかし、あなたのように々理解したとしても間違いではありません。その誠意も又間違いではありません。私を異邦人にしないで貰いたいです。でもあなたが言っていることは、私を異邦人にしています。私は絶対に死後を生きたいとは思っていませんでした。絶対に期待しませんでした。絶対にそのような考えに陥ったことはありませんでした。

十歳の時に、私は清い気持ちでミサに臨みました。そして、悪魔がとても怖いと思いました。私の想像力は活発に働いていたのです。司祭は、恐怖を起こさせる幽霊の話私にしました。私は孤独や夜が怖くなりました。そのことは信仰心が私に宿りました。今ではその時のことが私には大変良く分かりますが、私は恐怖が怖かったのです。幼年期を過ぎるとそれは私から離れていきました。そして、肉体的恐怖とともに、私の宗教心は消えて仕舞いました。

その後、私は男たちや女たちの死を見てきましたが、何時も死を仕方のないものとして甘受してこなかったことを信じて下さい。そして正直に申しますが、私は死者たちが今でも何かの姿になって存在することが出来るとは少しも信じませんでした。死者たちはその存在を終えたのであり、そのことは全く分かり切ったことで単純なことであると信じました。それは私には苦しいことでしたが、自然であると思いました。そして、私は自分の存在についても同じ考えでした。私が存在しなかった時間は沢山あったのです。私が最早存在しなくなる時間も沢山あり得るのです。自然そのものがそのことを教えてくれます。私が眠っている間、私の存在は消えているようです。死とは終わりのない眠りです。それは悪かもしれないし紊乱しているかもしれないと私が考えることはありません。本当のことを言うなら、すべてが何でもないことであり、そのことについて私は全く何も考えていません。しかし、私は孤独ではありません」と言って、このプロポも結んでいます。

死は終わりのない眠りである、とアランは言います。私たちは毎日眠ります。眠りであるなら恐怖はないでしょう。死にも恐怖は無い筈です。しかし、司祭の話によって死への恐怖が植え付けられ、孤独や夜が怖くなる時、宗教は人間にとっての凶器になります。心を傷つけ、恐怖を怖れる精神に歪曲されていきます。死後の世界や地獄が存在するのなら、その恐怖は正しいのかもしれませんが、「死者たちはその存在を終えた」のですから、本来は恐怖も無いとアランは言っているのです。私たちが眠る時は恐怖が無いのと同じで、宗教とは本来人間に恐怖を与えるものではありません。逆に、平安を齎すものです。恐怖感を覚える宗教というものはありません。勿論、暴力による肉体的恐怖を与えるものも宗教ではありませんから、自爆テロを容認する宗教は宗教ではない、とアランなら言うでしょう。

総理大臣の靖国参拝も宗教を利用した政治的行為に他なりませんから、政教分離の原則から外れるものと私は思考します。総理大臣に公人も私人もありません。二十四時間総理大臣なのですから、二十四時間

政教分離を遵守すべきであり、それが出来なければ総理大臣を辞めて私人の時間を自分の力で作るべきです。ところが自分の力では作れないものもこの世には沢山あります。父親は二十四時間父親であり、母親も二十四時間母親です。一秒でも辞める訳にはいきません。自分の力ではどうにもならない役割を生きる人間は沢山いるのですから、一国の総理大臣も二十四時間総理大臣でいるべきだろうと私は思考します。そのような思考を理解しない者は、やはり恐怖を隣人などに与えて置きながら自らも恐怖に打ち勝とうとする政治行為を、純粹に私人としての宗教行為と錯覚する独善的精神の持ち主であると見做さない訳にはいきません。何故なら、本来の宗教行為は他人にも自分にも恐怖とは無縁のものであるからです。自らの行為が誰かに恐怖を与えるものであるなら、それは最早純粹な宗教行為とは言えないと断定して良いと思います。従って総理大臣の靖国参拝が他国の人々にとっての恐怖であるなら、それだけで最早純粹な宗教行為ではなくなり、政治と宗教が混在した政教分離の原則を逸脱した政治的行為に他ならないと私は考えます。(完)

## 三十四 復活祭

復活祭はキリストが復活したことを記念する祭りですが、春分以降の最初の満月の次の日曜日に行われます。カトリックの祝祭日には、この復活祭の日を基準に決められる移動祝日がある他にも多くあります。例えば、一月六日の幼児キリスト礼拝に因む「御公現の祝日」から復活祭の四七日前の「告解火曜日」までが謝肉祭で、その翌日は額に十字の印を付けて灰から生まれて灰に還る存在であることを肝に銘じる「灰の水曜日」であり、復活祭の前日曜日はキリストがイエサレム入城を記念する「枝の主日」と決められています。復活祭は年によって三月下旬から四月下旬まで変動しますから、これらの祝日も年によって違います。従ってフランスの祝日は、太陽の動きの他に月も影響してくることになり、予定を立てるのに簡単ではありませんが、その分いい加減な予定は立てられないだろうと思います。一般的には復活祭の日を挟んで二週間は復活祭休暇に入り、学校はお休みです。春の太陽を求めて南仏やイタリアへ旅行する家族も多いようです。これらの休日はカトリックの宗教行事からきているのですから、フランス人にとって宗教と生活は密接な関係にあると言わなければなりません。

「宗教は良く出来ていて、すべての人が同じ目的を目指しているので私はびっくりしています」と書いて、アランは一九〇七年四月五日のプロポを始めます。「復活祭の祝日を考えて見て下さい。辛い悲しみの後では、最良の希望が信者の魂に目覚めるに違いないのです。従ってキリストの苦悩を記念するこの祭りが是非とも必要とするのは、受難と死と復活です。

しかし、もしもこれらの古い歴史が信者たちを悲しませたり喜ばせるためにしかなかったとしたら、復活祭の祝日は湿った花火によく似ていることになります。重要なことはどんなに代価を払っても魂が興味を持つことであり、そこに到達する最良の方法は人体という有機体に抗うことなく行動することが今でも重要です」と書いて、アランは宗教行事に秘められた司祭たちの圧力を自然や人間の肉体的変化によって吸収し、本来の宗教が決して人間を抑圧するものではないことを説明します。

「復活祭の祝祭日は昼夜の時間が同じになる日と月の動きに沿って決められ、太陽で体が温め始める時期に決められます。このようにして季節と関係しており、世界中の自然が復活祭の鐘の音を鳴り響かせて、歓喜に揺さぶられます」と美しく書いた後で、胃にも影響を及ぼさなければならないものがあるなら、つまり肉体に影響を及ぼすものは、その人の喜びや悲しみにも基本的に左右されて、更には魂にも影響を及ぼす尋常でない芸術にも関係するとアランは言います。

「祭りはついにやってきました。そして、丁度美味しくなった新しい果実酒が出来上がり、すっかり酩酊する者のために準備されますが、正にその時は各々の人がなるべきものになります。詩人になったり、リューマチ患者になったり、恋人になったり、酔っ払いになって、誰かに感謝したい気持ちになります。このような魂の活動が目覚め、持続し、強くなるのは肉体の変化によってです。単純で素朴な者たちだけがこのことを知りません。自分たちの喜びの本当の原因を知りませんし、その喜びを与えているのは司祭の言葉や行いであると信じています。このようにしてあらゆる宗教が形づくられていきます」と書いて、このプロポは終わっています。

人間は自然によって多くの喜びを手に入れることが可能ですが、何らかの力、例えば司祭の力によるものと信じることによって宗教が生まれます。それが科学の力であると信じるなら、人間は何時の時代でも進歩してきたと錯覚して反省することもなくなるのでしょうか。理性を正しく使用して、冷静に思考し判断する能力としての人文主義思想は消滅していくのでしょうか。死んだ者や失ったものを復活させることは、春が毎年訪れ復活祭が行われるように自然なことです。本当の進歩は、実はこの自然の繰返しの中から生まれてきます。(完)

## 三十五 子猫たちの平安

人間よりも動物の方が優っている点は沢山あります。馬やチータの走力、犬の嗅覚、鳥たちの飛行能力等、枚挙に遑がありません。そして、肉体的能力の他に、人間が動物たちの行動に学んで良いものも沢山あります。例えば、戦争の回避です。動物たちには戦争がありません。戦争は人間だけが行う悪行です。如何にして動物たちは種属内の争いを回避しているのか、一九〇七年四月一二日のプロポは猫の世界の話を通して、この問題に一つの解答を提示しています。

「猫が好きで何匹も飼っている或る人が、次のようなことを私に語りました。母親の雌猫が二匹の子猫を育てています。猫としての生きる術を教えています、それは基本的には二十日鼠を捕まえることにあります。母猫が二十日鼠を捕まえて半殺しにして、子猫たちの前に放り出したのは、機会を窺い、襲いかかる訓練をさせるためです。子猫は二匹しかいませんが、この狩は一匹だけで行わなければならない遊びです。それ故、母猫は子猫のうち一匹に先ず二十日鼠を与え、続いてその後にもう一匹にも殆ど同じ様なチャンスを与えます。二匹のうち一匹が狩の遊びをしている間に、母猫はもう一匹の方を監視します。公平の決まりを守り、力ある上の権力者である母猫の庇護で自分の情熱と闘っている子猫を見るのは、喜劇を見ているようで可笑しいものです。

猫には公平の観念というものがあると結論付けるべきなのでしょうか？ 恐らくそうではなく、寧ろ猫は秩序と平和以外のものは求めず、喧嘩をせずに公平さを徐々に広げていこうと追い込んでいきます。最初は母猫が二匹の子猫に二十日鼠を委ねることはありそうなことで、二十日鼠と猫たちの争いから猫と猫の争いになることもありそうです。猫族が、本能的に止めさせなくてはならない争いでした。その方法は極めて簡単です。つまり力によって、次に脅しによって兵士である一方の子猫を動かなくさせるのです」

力とか脅しも、脅される者の平安のために行使されています。決して脅す者の利益のためではありません。と言うのもそこには母親の愛があるからです。愛は力であり脅しの方法をとることもあり得ます。母親の猫は、一匹ずつ子猫を二十日鼠と遊ばせます。一匹が遊び疲れると休息させて、残った子猫を遊ばせます。一匹が休息しているうちに、闘っているもう一匹はだんだんと闘う気持ちが強くなり脅しも強いものになっていきます。その時の母猫は、休息している子猫を監視するのに苦労なくて済むようになります。その子猫は二十日鼠を取る勉強の成果が上がったのであり、成長していたのです。その時の子猫は、従順な気持ちを身に付けます。逆に、不正に対しては怒りを覚え、闘いが生まれます。「このようにして猫の王国に、公正さが生まれることになったに違いありません」と書いてアランはこのプロポを結んでいます。

不公平は、個人の尊厳と裏返しの関係にあります。〈個〉が尊重されていないと感じるとき、公平でないと感じます。逆に、〈個〉が尊重されていると感じれば、不公平の気持ちは生まれてきません。独りで二十日鼠と遊ぶ子猫は、〈個〉が尊重されていますから不公平は感じません。しかし、母親に制止された儘の子猫は不公平を感じ、闘う気持ちが強くなってきます。このような気持ちは遊び疲れた子猫には無い感情であり、〈個〉が充実した成果を挙げて成長したならば不公平を感じないでしょう。社会の秩序とか平安には、一人ひとりが充実した成果を挙げるのが大切であるのが分かります。集団でなければ挙げられない成果には、少なからず不公平が生じるものですが、〈個〉が挙げる成果には不公平が消滅していきます。〈猫の王国の公正さ〉が生まれてきます。

二匹の子猫が一緒になって、つまり集団となって二十日鼠を攻撃しても、〈従順な気持ち〉には成れないでしょう。何故なら、二匹の子猫の間には新たな闘いが発生してくるからです。〈王国の公平さ〉も生まれてきません。それは〈個〉が充実しないと生まれてきません。そこに人文主義の基本があります。組織や集団から独立した精神の強さが、社会の平安を保障しているのであり、それが組織や集団をより堅固にし

ていくという逆説を承認しているのが、民主主義社会でもあると言えるのではないのでしょうか。(完)

## 三十六 集団と個人

集団には団結心が大切ですが、団結心には集団としての目標とか目的が必要です。それらが無い集団は存在しません。最も最小の集団である夫婦や家族にも、生活して生きていくという目的があります。死ぬことが目的ではありません。もしも、死ぬことが目的であったならば、その目的は集団の消滅を意味します。集団の目的がその集団の消滅を意味するものであったならば、既にその目的は間違っていたことが理解されることでしょう。それ故に集団には目標や目的が必要ですが、それらは正しいものでなければならず、そのためには色々な角度から見なければなりませんし検証されなければなりません。一九〇七年四月一三日のプロポは、中等教育の先生方の集団である協議会について述べています。

「……もしも、公平な傍聴人が討論会場に這入ったならば、団結心しかないことが明瞭に分かるでしょう。もしも、そこで用心しないならば、すべての機能や目的が個人を歪めることでしょう。もしも一公務員がその目的のことを聞いたならば、尊重しているに違いない形式的手続きや上司のことしか話さなくなるでしょう。それは町や田舎を見るために、何時も同じ一点の場所に身を置く人間に似ています。或る対象は大きくなり、他のものは小さくなって消えて仕舞います。それに対する救済策は、色々なものを見るために探し回るしかありません」と、集団の中にいる者であっても、同一の見方ばかりをして、偏見に陥るのではなくて、見識を広げた理性ある見方も必要であり、自分と違うものに興味を持っている人々と語り合うことが賢者であるとアランは言います。旅する知識人のように、様々な表面的な出来事であっても、それを基に社会を調べ、最善のものがなければ別のもので間違いを正すことを勧めます。

かくして阿諛追従的な同業組合的な演説によった間違いは何もなくなります、「この場合は物事を正確に理解するイメージを見るための確かな遠近法を手に入れるリスクがあるばかりでなく、他人からの称賛によって幻想も増大していく」とアランは指摘します。何故なら評価することには微妙な行為が伴うものであり、人によっては小さな相違も生じ、詳細に見ると様々な間違いも生じてくるからです。結局のところ最終的な合意が真実を決定していくのですが、それは細心さを眠らせることであり、そのような合意が必然的に同業組合の間違いを明白にすることになり、それと似たような利権同盟が冷静な平常心を失わせて、戦争を準備するとアランは明言します。

〈全体の奉仕者〉であるべき官僚たちが、自らの利益を確保するために省益が優先される〈利益同盟〉は、戦争を準備することすらあるでしょう。つまり外国と仲良くすることよりも、外国からの脅威を強調して国民に不安を与えた方が利益になる省庁や企業というものも現実に存在するでしょうし、そういう集団が戦争を準備していくのでしょう。戦争を起こさないためには、そういう集団は一つに纏めないことであるとアランは言います。

「平和であるためには、集団はばらばらにして、色々な人間と混合しなければなりません。丘の上に十万人のドイツ人を集めてご覧なさい。その向い側の正面には十万人のフランス人です。彼らは戦うことになるでしょう。同じ人間の彼らを同一の町の中に混ぜ合わせたなら、彼らは平和に暮らすことでしょう。結束というものを信用してはなりません」と書いてこのプロポを結んでいます。

交流から戦争は起こりません。戦争は、人と人との交流が遮断されたときに開始されていきます。それ故に平和国家は、外国の人々を受け入れ、そして自らも訪問することが肝要です。そして、その訪問という行為は国という集団が行うものではありません。集団の代表者として訪問する時であっても、その行為はあくまで個人のレベルで行われます。集団は飛行機に搭乗出来ません。集団とは抽象であり、実際に飛行機に乗れるのは生身の人間です。個人は生きている人間である限り色々な思考が可能であり、色々な行動も可能です。しかし、集団には生命が抽象されて不在ですから、感情とも無縁であり、殆ど人間としての感情

を感受することがありません。集団としてのミッション（使命）のためには、人間が人間を殺すことを諾うことすら生じてきます。何故なら、人間が人間を殺すことを否定するのは知性の働きであることよりも、寧ろ感情の働きに近いと私は思います。人間が人間を殺したくないと感じるのは、人間の本能であり感情であろうと考えます。それ故人間が個人のレベルで湧出する感情を喪失するときに、つまり集団を一定方向からしか見ないで公式化されたときに、戦争が準備されていると考えなければなりません。所謂、戦争のための大義名分が捏造されます。それ故、少なくとも芸術家は何時も精神の集団化を警戒しなければなりません。詩人は個人の感情を喪失せずに歌うことです。画家は大衆の求めに応じないで描きたいと思うものを描くことです。

アランには〈世界秩序 (l'ordre universel)〉という思想があります。山の水は海の水と繋がっているように、この世は全てのもので関連し合って繋がっているという思想です。このような思想があるために、決して直接に集団や世界を相手に働きかけなくても、個人としての些細な小さな働きを行えば十分であり、その成果は集団や世界に通じていくという楽観主義です。〈天下を取る〉ことなど考えなくても、自分が今やれることをやることの方が大切です。集団の大義名分によって自分を見失うこともありません。幻想を追うこともなく、自らが出来る行為を行うだけです。行為が個人を訓練していくことになります。個人が自由に行為出来ること、それが戦争を回避することになるでしょう。そのためには〈普遍的な秩序〉や〈世界秩序〉を信じて、小さな行為であっても個人の自由な行為を実践していくことが民主主義社会の基本であると私は考えます。(完)

## 三十七 自殺の問題

自殺の問題は、アランにとっては難しいものではないようです。何故なら、自殺をすることはそんなに難しいことではないからです。何かの理由で絶望するようになって、手許に弾丸の入ったピストルがあれば、明日の新聞に掲載される十行の死亡記事の原稿が書かれる危険がある、とアランは一九〇七年四月一四日のプロポに書いています。

その様なことを考えた契機は、フランス軍の兵舎の一室が兵士たちの自殺によって閉鎖されたからです。その部屋の兵士全員が首を吊ったのでした。それはまるで全員が機械人間ではないかと思われませんが、その考えは注意しなければなりません。科学は未だ黎明期にあり、機械はもっともっと便利になるだろうとアランは未来を予言していますが、人間が機械のようになるのを注意する必要があります。機械を操作するように、自殺した兵士たちのように自殺も感染していきます。

「この事例を私が知らなかったならば、自殺という行為は超人的であるか、人間以下の行為と見ていたでしょう。自殺を成し遂げるには、小説の英雄か狂人に成らねばならないと思っていました。しかし私は良く分かったのですが、自殺をした人は私が見たところによれば、狂信的でも衝動的でもなく、些細な悲しみや悩みのためでした」と書いてアランは、更に外部的状況や住んでいる場所の影響も大きいことを指摘しています。人間がとるべき行為の観念は、想像力の中で或る外部的状況と深く関係しており、そのことが分かるや否や、それらの外部的状況は時計がベルを鳴らす仕掛けのように確実に行為と結びついています。例えば上着とチョッキを着替えたいと思えば、機械的にアランは腕時計を見てネクタイまで外して別のものにするとのことです。それはまるで服を脱いでベッドに這入って眠りにつく時の支度のようです。

「ここではそれは極めて強く習慣になっていて、その行為は外部的状況と結びついていましたが、生き生きとした印象はそれと同じ効果を上手につくることが出来ます。

もしも、私がある場所で自殺したばかりの友人の死骸を見つけたならば、その時はその場面を再現して、想像力の中ですが自分も自殺することでしょう。そして、生き生きと強く心が動かされたとき、私が自らの意志で死んだイメージは友人の死骸やベッドや部屋のイメージと結びついているのが分かり、従って周囲の状況の一部は残りの全てを呼び起こすのに十分です。結局のところ、私がそのことを認識するのはその行為を考える時なのです」と思考の重要性をアランは言いますが、反対にこのようにして人間が機械人間となって自動的に生きていくことを警戒します。

毎日の繰り返しや習慣化された行為は、懐疑する精神を喪失させて思考の力を失くしますが、死もその一つです。ピストルがあり弾丸があれば、思考しない者は自動的に自殺するようになるのでしょう。しかし疑うことが出来る者、そして思考することが出来る者は、自殺に直進することなく思いとどまります。考えないで行う行為から離れます。自殺には懐疑や思考がありません。自動記述の如く、只思いつくことを実践していくまでですから決して難しいことではないのです。

「更に、恐れることなく出来事をこのメカニズムに任せ始める者は多分、独り言を言って場面の続編を見ることになるでしょう。正(まさ)正まさしくそこには成すべきことがないということです。時計の仕掛けが動いていたとき、最後にはベルを鳴らさなければなりません」と書いてこのプロポは終わっていますが、恐らくアランが言いたかったことは、〈成すべきこと〉もなく気分に流されていき、自殺した者を見て自らの死を強烈にイメージした者は、時計のベルが鳴るように自殺に走るのは容易なことであり、そのような感染は容易であり、容易でないのは思考することであり、疑うことであり、生きることであるということだったように思います。

自殺は決して困難なことではありません。困難は生きることであり、絶望よりも希望と喜びを手に入れ

ることです。殆どの喜びは、容易な想像からは手に入れることが出来ません。容易なものは気分のものであり、悲観主義に陥り易くなります。楽観して生きようと思うことがなく、自殺することも難しくないようになるのでしょう。自殺は困難なことであると思って自殺する者はありません。自殺は容易な行為であるから自殺するのだらうと思います。何故なら困難であることの意味とは、生きる喜びに溢れているからです。困難を前にした時には、絶望することなく成すべきことを思考することです。思考する者や懐疑の眼を向ける者は気分流されて悲観することがなく、強い意志によって想起される思考とともに喜びに向かって第一歩を歩き始めることでしょう。(完)

アランは自分のことを散文家であると明言していましたが、実は詩人でもありました。勿論、詩集という形で生前に残したものは一冊もありませんでしたが、ポール・ヴァレリーの詩集『魅惑』や『若きパルク』を注釈したり、詩や詩人への関心が高かったのが分かります。実際に、アラン自身も私的に献辞として詩を多く創作しており、自らを詩人と称する時もありました。一九〇七年四月一五日のプロポはその例証の一つです。

「大地に小麦や甜菜が広がっている高原には、規則的なぎざぎざ模様を表したような断崖があつて、突然に大地が絶壁となつて終わっているようで、その足元には大きな谷が続いていました。各々の断崖の歯の部分に当たる中程の所には、村の家々が一列に並んで建っていました。屋根が尖っているのは教会です」と、このプロポは始まります。

「これらの各々の村が、家に沿って一本の道がきれいに伸びているのは驚きです。まるで私たちの眼を魅了するために調和のとれた計画で全てが造られてきたようではありませんか。村の外れの良く見える所に、空を見上げるように教会が建っていますが、そこにあるべき所にあるという感じで、何と全てのものが意義深いことか！」と詩人は言いました。これに対してアランは次のように言っています。

「詩人であるあなたは、詩人でしかありません。常に結末とか目的という観点であなたが探求しても、思想はそこにありません。従つて原因という観点で探求して下さい。

これらの村々は、決して気儘に造られているのではなく、全ての家は太陽を計算して建てられております。もしも詳細に見たならば、その鎖状の家々は山の中腹から始まっているのが分かります。人々は家を建てなければならず、そして実際に建てたのはこの丘でした。丘の下方に住む者がいれば汚れた水しか使えず、不健康なものになるでしょう。上方に住む者は水を十分に使えなくなるでしょう。

教会を建てる場所について言うなら、農場や納屋でない場所に建てなければなりません。何故なら、農場や納屋は小麦畑が広大でなければ、自然にお互いが接近した所にあるからです。それ故、教会を建てる場所も一ヶ所しかなくなり、断崖の端に建てることになります。そして、あなたは今その教会を見ていることになります」と、教会が何故農場の中心に建てられなかったのかを説明しています。詩人にしてみれば教会は俗世間から離れた場所に積極的に建てられたように思考するのですが、アランは農民が生活する農場や納屋が建てられた場所の必然性を先ず説明してみせます。

小麦畑での毎日の農作業が効率良く行われるためには、農場と納屋は近い方が便利であり有利です。教会は祈る場所であり、人々の生産行為とは直接結びつかないために、農場から離れた場所に建てられるのが自然であるとアランは言います。一九〇六年七月八日のプロポ「ライオン一世」において、人々の家が建てられるのは皇帝ライオン一世の命令によるのではなくて、毎日の生活に必要な水を汲む井戸のために自然に水脈に沿つて人々の家が建てられていくことを、恰も寓話のように語っていますが、「高原の村」もその思想は同じです。そういう意味でアランの思想は、国王や為政者たちの記録を忠実に検証していく歴史学者のものよりも、自然を相手にしている地理学者の思考に近いようです。

アランが言う〈世界秩序〉という思想は、世界は海も山も全てが結びついていて、一つの秩序を保っているという考え方です。この世は教会や皇帝が支配するものではなくて、自然の秩序が支配しているものであり、どんなに小さな事象も時計の歯車のように世界と結びついているという楽観主義がその根底に流れています。つまりアランの思想は、〈天下を取る〉という尊大で卑しい野心とは無縁です。教会や皇帝の眼に触れなければ、罪悪や偽善は見逃して貰えるのかもしれませんが、逆に〈天下を取る〉ためには教会を支配し、皇帝に就任しなければなりません。しかし、たとえ独りだけで行うどんなに小さな努力でも、世

界と結びついていると思考する者は世界を支配しようとする教会や皇帝とも無縁でいられます。何故なら、世界を動かして支配するのは一人ひとりの小さな努力であるからです。そこに民主主義の基本があります。真の民主主義精神には、一人ひとりがやれることを努力して行えば良いという楽観があります。独りの力は弱いから何も出来ないと悲観することではありません。何故なら、どんなに小さくて些細なことでも世界と結びついているなら、それだけで個人の力は世界を支えることに成るからです。そのような個人の力は〈天下を取る〉ことは出来ませんが、世界を支えて幸福な充実した生活と社会への貢献を可能にしてくれます。〈世界秩序〉は正に、アランが生涯を通して守り抜いた思想でもあります。(完)

## 三十九 チップ

我が国にはチップの習慣が殆どありませんが、最近はフランス人もチップを払わないで定額どおりに支払う人が多いようです。チップは義務ではないから払わなくても一向に構わない、ということのようです。レストランで食事をして、チップのことは考えなくても何ら実害はなさそうですが、ホテルの部屋の場合は一人につきユーロ位のチップをテーブルに置いて置く方が良さそうです。ベッド・メイキングに来た人への配慮です。以前にパリのホテルに宿泊した時、チップを置かなかつたためにクリーニング済みのワイシャツを二枚黙って持って行かれたことがありました。チップ代わりに持って行ったようです。フロントへ文句を言っても一向に取り合ってくれませんでした。翌日からはチップを置くことにしました。するとその日から物が無くなることはありませんでした。パリは国際都市ですから犯罪組織も色々あるようです。殺人のような大犯罪は余り起こらないとのことですが、スリや置引きにはよく遭うようです。地下鉄の車内や薄暗い通路が危ないようです。子供の集団が一斉に車内に乗り込んで来て、ポケットというポケットを全て弄られたことがありました。子供の指が実にしなやかに上着やズボンのポケットの中に這入ってきて、私の手に触れた時はびっくりしました。あるいは三人組の大人のグループが、人通りが途絶えた薄暗い通路で、二人が被害者の脚をそれぞれ押さえつけて動けなくして、残りの一人が恐怖感から動けなくなった被害者のポケットの中の財布を堂々と取っていくそうです。大金を取られるくらいなら、出来ることならチップを払って我慢して貰う方が良さそうですが、相手が犯罪者の場合は通用しないでしょう。

チップは犯罪者へ与えるものではありません。チップは相手の誠意に対して感謝の気持ちを表わす志のお金です。そのお金は本来の決まった額がありませんから、人によって区々の金額になります。「チップに不快感を覚えるのは、それが物の値段ではないからです。誰かに請求されたり申し込まれて決まっている値段ではありません。チップを与える喜びが決める人件費です」とアランは一九〇七年四月二七日のプロポを書き出します。カフェで一杯のコーヒーを飲む時も、ボーイは小さなベンチを用意したり、オーバーや帽子や雨傘を持って行ったりしてくれます。そのサービスのやり方は色々ですし、意味があります。ボーイは各々の客の要望を見抜かなければなりませんし、客の言いなりです。何故なら、或る客は自分に構わないで静かにして置いて欲しいと思い、別の客はあれやこれやの多くのサービスを望むからです。腕を持って助けて貰ったり、ほんの一言の会話が無くても無愛想だと思って決して満足してくれません。チップはそれら全ての行為に対して支払うものです。それ故にチップは曖昧な性格のものではなく、制限が無いだけなのです。正に定価の無いサービス料ですが、ドア・マンや御者にも支払いますし、仕事への熱心さや礼儀正しさに対して至るところで支払われる臨時収入です、とアランは言います。

従って、これらの無制限の報酬は最低レベルに自然と落ちることさえあり、誠心誠意に行われた心遣いであっても義務化されることがあります。その結果、サービスを一所懸命やってもチップが支払われなくなることもあり、そのことに怒っている人々もおります、と言ってアランはこのプロポを結んでいます。

一所懸命に働いても、それを成果として認められないことは、この世には沢山あります。そのことに腹を立てていたら切りがありません。不合理にも上司へのご機嫌取りが上手な者が出世することはよくあることです。仕事を沢山熟す者が出世するとは限らないのが世の中です。しかし、年に一度の辞令で出世した者としなかつた者との落差は大きすぎます。評価の機会が沢山あつた方が、高い評価を得られなかつた者にとっては分かり易く落胆の度合いも少なく済みます。つまり一日一日を評価する機会があれば、直ぐに結果も分かり、高い評価を得られなかつた者の反省も合理的なものになるに違いありません。チップとは毎日の評価のようなものであり、合理的な臨時収入です。誰もが酷く落胆しないで済む勤務評価のようなものだろうと考えます。

会社の勤務評価や学校の成績も、その都度その都度に評価して公表した方が公平で、誰もが納得出来るようになるだろうと思います。毎日の積み上げを行うことによって現在の評価が誰にでも了解されれば、多くの不公平感も解消されるに違いありません。そのためには複雑な制度よりも、誰にも分かり易い簡便な制度の方が不公平感は少なく済みます。スポーツが好まれるのも、そのような誰にでも分かる評価方法が運用されているからだろうと思います。一秒でも速く走った者の方が優れているのであって、お世辞が下手であっても構いません。

少し飛躍しますが、税金も簡便な制度の方が不公平感は少なく済みます。何故なら、公平、公平と言っている間に枝葉末節に至るまで複雑な制度になって、<知っている者>ばかりが節税の恩恵に与り、知らない者は損をする仕組みになるからです。制度ばかりが公平でも、運用上は不公平になっていくのが実態であるからです。それなら却って簡便で誰にでも分かり易い制度の方が、多少の不公平感があっても実際には公平である場合が幾多も考えられます。所得税を源泉徴収された儘、複雑な確定申告をしないで還付請求しない者がよい例です。いっそのこと法人でも個人でも収入の一割を税金にするとか、所有する財産の1%を平等に税金にすれば分かり易いし、公平だろうと感じます。例外ばかりを作るから複雑になり、知らない者が損をする制度になっていきます。もっとも急にこのような簡便な制度になれば税理士は失業するでしょうし、税務署も少人数で済むでしょう。

話を元に戻します。上司へのご機嫌取りが上手な者の毎日の評価が高ければ、出世したい者は上手にご機嫌を取る方法を工夫すればよいのです。しかし、流石にそのような評価では健全性が損なわれますから長続きしませんし、その会社の発展も望めそうにありませんから、自ずと公平で正しい評価が行われていくことでしょう。勿論、以上の思考は極論ですが、決して間違っただけばかりはいない方向性があると考えます。会社にとって本当に必要なことは何かを見抜いて実践した時の評価を高くすべきであり、正にチップと同じ精神です。そして、自分で自分に払うチップのような制度があっても一向に構わない筈です。それが自己研鑽であり自己啓発であると考えます。儒学者の廣瀬淡窓は善い事をやれば「○」を日誌に書き込み、一万個の「○」を目標にしたといえます。その精神はチップと同じであり、大切なのは日々の研鑽であり啓発であると考えます。(完)

## 四十 歴史の鍵

歴史を見るアランの眼は、決して事件や出来事ばかりを追っている訳ではありません。それらの背景が十分に調査され吟味されなければなりません。先ず最初にアランが挙げるのは、季節の突然の変化です。「暑さから寒さへ、あるいは寒さから暑さへの季節の突然の変化がある度に、私はこの変化を一番重要な歴史的事実として見做しています」と一九〇七年五月一九日のプロポは始ります。太古の人類が行った地球規模の大移動も、気候の変化に関係しているという仮説があります。アフリカ大陸に出現した人類が、砂漠化という気候の変化により、アフリカからユーラシアや南北アメリカまで移動したという仮説です。あるいは大雨が歴史的事件に影響を与えたこともあるようです。ナポレオンがエルバ島を脱出してパリへ戻り帝位に就いたが、一八一五年六月のワーテルローの戦いで破れた例をアランは言います。

「ワーテルローの戦い前日は雨が降っていて、そのために大砲が弾を発射するまでに非常に時間がかかったことは世界中の誰もが知っています。そこからは多くの結果が生まれ、私たちは幾つもの印象を再度経験することになります。

もしも私が歴史を書いたなら、緯糸には気象学的事実、農産物の収穫量、輸送に関する統計、そして出生率の変化を挙げることでしょう。その時私は物事の原因となる鎖と向かい合っているでしょうし、その行為は確実に優先され、私はそこに歴史の本質を既に読み取っていました」。

歴史が生きた歴史であるためには、因果律を最大限に応用していかなければならず、その先端に現代がぶら下がっている筈です。現代とは過去の集大成でもあるのでしようが、意志や理性の働きによって未来を理解することも可能になります。未来を見抜くことは不可能ですが、未来を理解する能力、つまりこう成りたい、あれをしたいという未来に向かう現在の人間の意志と理性を理解することは可能です。「理解することとは、理解することを望むことである」とアランは一九〇九年五月二九日のプロポで言っていますが、〈望むこと〉が未来を理解していくことであり、未来を自分のものにするための方法でもあります。そしてアランは「生きることは、生きることを望むことである」と言います。正に、歴史とは過去を知り、現在を生き、未来を望むことです。

「工業や商業における変化がどんなものか、考えてみて下さい。旅行者たちは季節に合わせて燃料を購入したり、フェルト帽から麦藁帽へ変えます。季節は農作業や収穫量を変え、大河の流状を変え、人々の気質を変えます。大雨は暴動を阻止し、大収穫は現状の制度が気に入るようになることを世界中の人々が知っています」

景気が良ければ不満も少なく済みますから、為政者たちも安泰であり、現状を変えようとしません。保守主義者が大きな顔をします。しかし、不景気になり弱肉強食の過当競争が激化してくると、現状打破とか改革を標榜する革新論者の主張が人々に受け入れられてきます。〈人々の気質〉は〈季節〉という環境によって変わります。季節が分かれば人々の思想も分かる筈です。春夏秋冬の四季がはっきりと分かる国の人々は本来革新的な人々でしょうが、季節を楽しむことによって現状を変えようとしなくなります。革新よりもあるが儘の自然を受け入れようとする個人が生まれてきます。正岡子規は〈写生〉を唱えながらも俳句や短歌を革新させようとしたが、その革新性はあくまで個人の内部を革新させるものであり、表現上の革新であって決して社会的革新でなかった処に特色がありました。やがてこの表現方法が私小説を生むことになるのも納得出来ます。何故なら、〈写生〉には未来が映らないからです。〈現在〉のみの文芸を表現する方法が我が国の主流になったために〈未来〉は喪失され、〈意志〉が置いてきぼりにされました。歴史に背を向ける処から出発したのです。「散歩時に突然に雨が降る時、私は何が起きるかを大変に良く知っています。何はさて置き、群衆は雨から逃げ去ることでしょう。しかしながら、逃げるこれらの人々のこと

を私は全て知りません。彼らの性格や企みや葛藤には無知です。たとえ私があああの明るい色の服を着た太った婦人の行動の軌跡とか、傘を持った慎重な男性の行動の軌跡を予想したいと思っても、私は裏切られる危険がある」とアランは言います。個人の行動を予め予想することは難しいものです。何故なら私小説の主人公のように自然に対しての意志が喪失しており、雨が降ってもその儘濡れている人間でもあるからです。「しかし、私は一団となった群集の動きを予め予想することが極めて十分に可能であり、そうである以上は一つの同じ原因が全てに影響を与えることとなります」とアランが言うように、歴史を思考する者は雨に濡れないように行動するものです。雨に濡れた儘でいる者は歴史を解く鍵を紛失した者です。歴史は大衆と共に進みます。歴史とは大衆が存在している場所のものです。私たちの地球は何処でも「水は斜面を流れます。重大な原因を知ろうとする歴史家は、小川の水が流れるように民衆の行動が行われることを見るでしょう」と書いて、アランはこのプロポを結んでいます。歴史を解く鍵とは、正にこの民衆の行動を解くことであり、小説家の行動ではないのですから、世論操作も簡単に行われることになるでしょう。しかし、民衆は決して騙された儘でいないでしょう。時間という濾紙を通した後に発見されるであろう奸計への懲罰は、失われた時間に比例して倍化されるでしょう。そのことも歴史が至る処で検証していることでもあります。(完)

## 四十一 信仰は慰めにならない

「宗教上の信仰は人生の苦難に耐えるために左程の助けにならない」ことを証明する機会を得たと、アランは一九〇七年五月二七日のプロポを書き始めています。或る敬虔なカトリック信者である女性から、亡くなった彼女の父親のことについて話を聞いたが、まるで父親についての記憶は最早何も残っていないかの如く信仰の話ばかりしていたことをアランは語ります。

「間違いなく私は彼女が喜びを手に入れていたことを期待しませんでした。しかしながら敬虔な信者は〈神〉に感謝する義務を負っているように私には見えましてし、その時、神が愛する人々は人生の悪を免れることになるのでしょうか。しかし、修道士たちの心の裡を除けば、正にそれは決して理解されないことです、何故なら修道士たちの処世術とは、だんだんと全てのことに無関心になることだったからです」

信仰とは無関心になることではない筈です。逆に、全てを知りたいと思うことであり、関心を持ち続けることだろうと思います。愛する人が出来ると、その人のことを全て知りたいと思います。宗教上の信仰も〈神〉のことをもっと沢山知りたいと思うことに違いないと考えますが、実際には信者たちは何事にも無関心になっていくとアランは言います。我が国の新興宗教団体の信者たちも、組織化され集団化された幹部からの〈指令〉以外は全てに無関心のようです。上部の幹部組織が発する指令によって信者たちは奴隷のように行動します。その布教活動には耳を疑いたくなるようなこともあるようです。例えば、布教したい相手に「神なんかいない！」と言われれば、このように答えなさいというマニュアルもあるようです。選挙にでもなれば、あらゆる機会を通じて応援する候補者を推薦する行動に出会いますから、気の弱い人間や生計に影響を与える関係者であれば脅迫観念のようになっていくことでしょう。信者たちは一所懸命に応援しているのですから美しい行動かもしれませんが、信者でない者にとっては脅迫に近い感情を抱くことになるかもしれません。何事も一所懸命に無我夢中にやっても、それが正しいものとは限りません。泥棒が泥棒を働く時は一所懸命であり、掏摸が掏摸を働く時も一所懸命です。大切なことは一人ひとりが市民として尊重できる行為を実行しているか否かです。それこそ一人ひとりの人権を尊重することが重要であり、前述した新興宗教団体の信者には残念ながら近代市民としての資質に欠けているように思えてなりません。これに対して一人ひとりの人権と自由を尊重する近代市民たちは、如何に対応すれば良いのでしょうか？ アランは理性の働きだけに期待してもいけないと言います。

「理性の働きは私たちの苦痛を和らげて慰めると信じられています。実際には反対のことが行われているのです。慰めは最初にやってきます。敢えて言うなら、慰めは基本的には胃からやってきます。何故なら、喜びの主要な原因とは健康であるからです。理性による慰めはその次にやってきて、それは物事に叶った展開を与え、気高い理性によって友人たちへそのことを説明するのは可能です。或る人は子供たちのために生きたいと言うでしょうし、他の人は自分が勉強して人々を教育したい、他の人は貧しい人々を慰めたい、他の人は神の意志に従いたい、他の人は亡くなった人と天国で再会することを熱心に期待します。これらの理性は全て同じで、優劣は無く、その意味においては本当の苦悩に対してあれもこれも全て同じで優劣は何もなく、理性は苦悩から諦念までの移行を全く同様に上手に行います」。

前述した新興宗教の信者も、アランが言うこの理性で生きているのです。私有財産は出来る限り宗教団体へ寄付させられているのでしようから自分の胃を満足させることはないかもしれませんが、少なくとも健康であるためには休息も必要です。罪人ではないのですからガレリアンの如くに死ぬまでガリー船を漕ぎ続けるような生活は健康的ではありません。自分の肉体を犠牲にして、時には人間の限界に挑戦することも美しい行為になるのですが、限定された客体のみに関心があり、それ以外のものに無関心になる自己というものは正に真の社会性を喪失していると考えます。世界は広いです。多くのものに関心を持ち、

多くの人々と交わるべきだろうと思います。特定の集団に膠着する精神活動は健全な近代人とは言えないでしょうし、健全な民主社会のものでもないでしょう。そのような精神に安住する人々は、人間の移動すらも禁じた封建社会のものに酷似しているに違いありません。人から命令されることで自分を生かしている人々であり、殆ど人と議論することを好みません。しかし、「人は議論によって眠りませんし、それ以上に理性によっても自分を慰める訳ではありませんが、少なくとも話は長くなければなりません」と結んでこのプロポは終わります。話をする事、あるいは話を聞くことは慰めになります。信仰とは何かと繋がっていること、対話が行われていることによって自らの関心を高めていくことだろうと考えます。それは決して慰めにはならないでしょう。何故なら慰めは、又新たな不安を呼ぶに違いないからです。結果は原因になるからです。(完)

## 四十二 交霊術

死者の靈魂の力について聖職者たちは多くのことを語りますが、アランは彼らの思想の盲点を執拗に指摘します。舞台上で交霊術が行われているのを見れば、「両眼が常に涙で曇らないようにして置くこと」が大切であり、舞台を良く見るように言います。宗教には靈魂の力が必要かもしれませんが、秩序ある社会には決して必要ではありません。腰掛がひとりで動いて消えたとすれば交霊術を信じる人も多くなるのかもしれませんが、高位聖職者は舞台上で腰掛に触れることなく消すことを行います。一九〇七年五月二九日のプロポでは、哲学者や自然科学者の間で高く評価されている或る重要人物の話が紹介されています。

「彼は他の高名な学者たちと一緒にその場に居合わせましたが、そこでの経験は家具に触れることなく動かすものでした。何時ものように舞台上には沢山の幕があり、僅かな明かりです。人間の精神は固定觀念に囚われており、それらには逆らわなければなりません。哲学者はその場から動かずにじっとしているに留め、駒馬のように程なく飛び跳ねるように扱われる腰掛をじっと見つめながら、何が起きても良いように腰掛け以外は見ないように自分に言い聞かせました。

さて、その家具をじっと見ている限りは何事も起こりませんでした。但し、不本意ながら明るくなった時に霊媒師の方へ眼を向けました。彼がその家具を監視していたのは確かでしたが、その時に奇跡が起こりました」。

腰掛を見ている間は何も起こりませんでした。明るくなった方へ視線が向いた瞬間に腰掛は消えていたのです。〈ペテン師の技〉は舞台上ばかりで起こる訳ではありません。舞台上の明かりのように、テレビや新聞は国民の視線に狙いを定めて色々な方向へ四散させたり、集中させたりします。関心をあらゆる方へ向けておいて、そちらに気を取られている間に何かが行われていることはよくあり得ることで。例えば民営化、民営化と言って民営化が改革の代名詞のようにマスコミは報道しますが、何時の間にか税収が一番多かった所得税は法人税よりも少なくなっています。個人の収入よりも法人の収益が増加しているようです。市場原理や競争原理が行われて喜ぶのは為政者たちであり経営者たちです。競争に疲れ果てた国民や社員たちは、弱肉強食の掟と化した野生化された社会制度の中で、悲惨な貧しい生活を送るばかりです。このような社会現象は進化とは反対の〈先祖返り〉的な現象と言ってよいでしょう。何故こんなことになるのでしょうか？

アランは良く見ろ、と言います。テレビの映像や新聞記事ばかり鵜呑みにしないで、様々な事件の背景を調べて自分の頭で思考し想像することです。そういう意味で現代人には想像力が必要であり、それが創造力にも成ります。競争原理が広く言われた一九九八年には我が国の自殺者数は年間二万人から三万人に増加し、現在も一向に減少しないで三万人の儘推移している有様です。交通事故の死者が一人を割っているのに三倍以上の日本人が自殺しているのです。一人でも多くの方が高等教育を受けて知的に生きる喜びを手に入れるべきであると考えますが、私立大学への公費助成は学生一人当たり年間約一五万円で、OECD三〇カ国の中では二九番目で、下位から二番目です。因みに、国公立大学は約二五〇万円ですから断トツの一位になるとのことです。高等教育における格差と同様に、我が国には実に多くの格差が蔓延してきていますが、それらを見ようとしていません。見ても黙って仕舞います。個人個人が連帯する機会は甚だ少なく、孤立した儘自殺への道を歩んで行くかの如くです。

個人が連帯するためには、マスコミの力はプラスに働くことも十分に考えられますが両刃の剣であり、逆にレッテルを貼られたように連帯の力にならずに、個人を疎外させる力でもあることは十分に考えられます。つまりコマーシャルで有名になって良く売れるようになった商品は直ぐに飽きられるのに似て、本当の良さが中々理解してもらえません。一度飽きられた商品は二度と市場に戻ってくることはないでしょう。

本物を理解するには時間が必要です。簡単に分かって堪るものか、と古典を良く読んでいたアランなら言うでしょう。

フランスの郊外の道路を車に乗って行くと直ぐに気付くのですが、看板が殆ど見当たりません。看板ばかりがあると広大な自然が良く見えないように、マスコミの力も私たちの社会を本来の健全な合目的性を見えなくしているように思います。日本人に不足しているものがあるとすれば、それは自己を実現させるための生きる目標であり目的です。目標や目的を見失った者は、教会やお寺へ行くのも良いかもしれませんが、大学や短期大学へ行くことも一つの方法です。学生として入学しなくても、公開講座を受けたり図書館へ通うことも生きる力になると考えます。そして、それ以上に大切なことは勉強したことを外部へ発現していくことです。創作したり発表することは、自己実現の全てであると言っても良いと思います。勉強することとは、もしかすると自分の外部へ出す行為のことであるとも言えます。出せば楽しみや喜びが入ってきます。出さなければ苦しいだけです。詩を暗誦するために覚える時は苦しく辛いものですが、実際に口から詩句を発して暗誦出来た時は嬉しいものです。更にそれを聞いてくれる人がいる時は何倍も嬉しいものです。連帯も本来は嬉しいものです。それは決して高位聖職者が言う〈未知の自然の力〉ではなく、滑車と梃子のように何倍も大きな力にしてくれるものです。決して交霊術によるものではないのです。(完)

### 四十三 公務員は退屈する

自分の仕事に対して大変に真面目で几帳面で高度な仕事を熟す才能にも十分に恵まれている公務員の一人について、一九〇七年六月二日のプロポでアランは語っています。その公務員は公式行事の式典に決して出席しません。何故なら全てが退屈であるからとのことですが、アランは彼に「少し小言を言うことが自分で抑えられませんでした」と言います。以下は、その小言の内容です。

「儀式は、あなたがおっしゃるとおりに退屈です。退屈しないとしても、あなたがやることは何もないでしょう。大臣や長官たちのことを考えてご覧下さい。彼らが過ごす時間は、要するに退屈するためのものです。彼らが働いているのはこのためであると私は考えます。あなたも公務員としてこの種の仕事を行うためにいるのです。何故ならあなたは飾りであり、退屈であることはあなたにとっても都合が良いのです。退屈はあなたに高貴で堅苦しい雰囲気を与えます。あなたは少なくとも笑ったり、面白いことを話す方が好きです。でもそんなあなたに共和国は何もやってくれません。

別の日にトロカデロ宮で、大臣が教育について女性教授たちに話をしていました。彼は、老人や退屈している人々がふえていることを繰り返し言うていました。休憩時間になると、家具付き部屋では踊り子たちは堅苦しい正装のシャツを着て、昔ながらの退屈な踊りを踊っていました。あなたはその大臣が踊り子や、その踊りや、着ている服や、女性教授たちにうんざりしていることを直ぐに考えます。しかし大臣は何も顔に出さずに、あくびをすることも決してなく、微笑を浮かべて白い手袋をはめた両手で慎ましく拍手をしていました。もしもあなたなら、そこにいなかったでしょう。でも、そういうあなたは優れた人物の仕事というものを何時学ぶのでしょうか？

その後、数日後にソルボンヌのパリ大学ではロンドン大学の客を迎えていました。そこにいたのは殆ど同じ人物の公務員たちで、全く同じような服を着ていましたが、この時はペチコートを身に付けた女性も少しおりました、何故ならソルボンヌは古色蒼然とした建物で、新しく建てたトロカデロ宮とは違っていたからです。ここでも家具付き部屋での講演がありましたが、あなたはいませんでしたね！

あなたは笑っています。あなたが言いたいことを当ててみましょう。ロンドン大学というのは実際にはないこと、本当の学校名は組合に組織された寄宿学校の先生の名前から付けられたもので、その会は慈悲深いオックスフォードやケンブリッジが気に入っていること、パリ大学ではこの度大統領に代って一人の管理者が就任されたこと、そういうことをあなたは言うのでしょうか？ それでは何時ものように考えたり判断するのは止めて下さい。真剣になって下さい。厳かに退屈することです。台所の宮殿を落成して下さい。兵舎となる最初の石を置いて下さい。ブロンズ像となった化学者、大理石像となった歌手、あるいは石膏像となった歴史家を讃えて下さい。何時も同じ態度でいて下さい。もしも別の人と話しても、真剣な顔で頭を下げ聞いて下さい。金色の縁取りの付いた赤いビロードの服を着た人々、正式な挨拶の美辞麗句の花模様に敬意を表することを学んで下さい。半分は主任司祭に、半分は憲兵に似た雰囲気あなたが接するようになれば、今よりもっと高級な仕事を手がける機会が熟するようになるのです。週に一度は、十時から正午までは請願者の列への対応に集中しなければならなくなるのです」

殆ど全文を最後まで引用しましたが、アランが公務員に期待するものが何か、良く理解出来ることと思います。公務員は一人ひとりが個人として大した仕事をしなくても、それこそ退屈な仕事ばかりしていても、権限は絶大に持っているものです。一人でやれないことも公務員なら官僚機構の中で〈台所の宮殿〉を造ることも出来るでしょう。アラン自身も実は人の集まりや社交界へ行くのが嫌いでしたので儀式の退屈さを痛感する一人だったと思いますが、組織力というものには必ず退屈さが付随することも理解していま

した。一人では出来ない仕事も、十人集まれば出来る仕事は沢山あります。同様に、一人の人間が十ヵ月かかっても出来ない仕事でも、十人の人間が力を合わせれば一ヵ月で出来て仕舞うことも沢山あるようです。大切なのは完成させることですから、組織力を当てにすることは公務員の場合は大切です。一人ひとは力のない小さなメダカであっても群を作ることによって大きな力を発揮します。群の中にいることは退屈かもしれませんが、生きていく上では必要な行為であり、美しい行為にもなり得るものです。学校についても同じで、アランにとっては学校は〈セレモニー（儀式）〉の場所でもあると言っています。集団のなかにいる限り退屈は不可避ですが、子供は退屈を克服して成長していきます。

あるいは家族という群の中で、父親一人が勝手に酒ばかり呑んで楽しんでいたり、母親一人が食事も作らず社交場へ毎晩出掛けて行けば、その家族は崩壊することでしょう。面白くなく退屈であっても、父親は毎日仕事をして母親も毎日料理をすることで子供は健全に成長していくことでしょう。そして、何時か喜びの日が訪れます。喜びは退屈を克服することにあります。かくして、そのようにして群を作るのはメダカばかりではなくなります。実は大きな鯨も群を作るのです。(完)

社会学は新しい学問であり、個人を大切にしたユマニズム（人文主義）に基づく学問とは多くの点で相違しています。最も大きな相違は、後者が主観的認識も具体的事象の範疇に入れて多くの真実を見出そうとしますが、前者はそういう主観的認識を出来る限り排除して客観的事実から数値的認識のような抽象的事象に基づいて真実を把握しようとしている点です。アランは或る社会学者の家へ〈葡萄栽培の危機〉に対する解答を得ようとして鉛筆を持って赴きました。その時の会話が一九〇七年六月六日のプロポです。「社会学者は社会のために存在し、医者個人のために存在していることは誰もが知っています。只、社会学者たちの認識の延長として、病気についてよく知っていて、それらの原因を把握したり、その薬を示すことは出来るのかもしれませんが」と期待して出掛けました。その社会学者はひどい近眼で、アランが部屋に入ると鼻の上に二組の眼鏡を重ねて書類を見ていて、禿げた頭を上げました。その部屋は床から天井まで本棚で、彼の足元にも本が積み重なっていました。大変な読書家であるのが分かりました。つまり後で分かりますが、社会学者は本を読まないと言えぬのです。アランは「親愛なる先生」と言ってから、自分の質問を手短かに言いました。彼はペーパーナイフを持っていて、まるで自分の話を細かく切り抜くかの如くに次のように言いました。

「私はあなたが話した問題を特別に研究した。私は様々な観点から考察し、歴史の中で変化したものを注意して見て、誰よりもそのことを良く知っていると言える。更に付け加えて言うが、私はそれに付随した大きな問題についても研究したから、あなたやあなたの読者の疑問を明らかにすることも出来る。それでも私はそのことを一言も言わないだろう。一言で言わないことが、私の方法にとっては必要なのだ」。

「親愛なる先生、一言では駄目なんですね！ 何故ですか？」。

「何故なら、その問題については私はまだ二冊の本しか読んでいないからだ。一冊はニュージーランドの自然に関する報告で、その道徳とともに生産過剰について書かれている。他の一冊は、その本の研究書で、原文と大幅に違うのが葡萄栽培に関するディオクレティアヌスの処方だ。私はこの二冊を何度も分析したのは言うまでもない。しかし、十分ではない」

「オセアニアの人々やローマ帝国の人々のことは、この際関係ありません。南仏のベジエの葡萄栽培の人々のことについて話して下さい」と私は言いました。

「いいえ、そうではない。そうではないのだ。どんな主題であっても本や小冊子や新聞記事であろうと全て何でも読まない限り、私は一々見解を説明したり考えることさえしないことを自分の決まりにしており、それは近くのことでも遠くのことでも同じである。この私はジャーナリストではないのだ。社会学者なのだ」。

科学者は絶対的真理を追究します。社会学者も科学者である限り完璧を求めて遠い所や昔のことを調べてからでないと自分の意見を言わないのも理解出来ます。しかし、その結果、現在の喫緊の要務に答えられない事態も考えられます。そういう意味でアランは歴史を信用していません。歴史は〈現在〉によって変えられていくからです。過去の事件や事実、〈現在〉を発見し、〈現在〉を理解するものであるからです。もしかすると社会学者は現代人を一人も救えないかもしれません。何故なら、医者のように個人を相手にしていないからです。医学のように個人レベルの営みではないからです。

勿論、社会学においてはアンケート方式で調査したり、インタビュー方式で個人レベルの意見を把握する機会も多くあります。しかし、医学や心理学のように個人そのものの営みを研究する機会殆どありませんから、時間と共に個人の〈血液や水分〉を逃がして仕舞います。〈乾物〉のようになった数字やグラフや文字や記号などの抽象的事象によって真実を見出そうとします。その結果、現在の真実を見失う事態に

なることも考えられます。反対に、ジャーナリストは事件や出来事という現在の例外的な事象から現在の真実を炙り出そうとしますから、社会学者の絶対的な完璧主義に付いて行けません。

社会とは個人の集合ですが、個人とは全く異なる事象を提示しますから厄介です。一部のマスコミによって捏造された報道によって社会が形成される時もないとはいえませんから、社会学者にはそれなりに完璧主義への自負があります。しかし、このことが証明していることは、社会をリードしていくために必要なものは知識の量ではないということです。社会的指導者が何でも知っていることに不都合はないと思いますが、社会学者のように何でも知っているから大統領になれる訳でもありません。大統領に成るにはやはり〈現在〉の様々な事象を分析し、正しく理解出来て正確に説明出来る人であり、それらの事象に適確に対応出来る能力を持った人でなければならないでしょう。そのために過去の事件や出来事を現在に応用する一つの方法が歴史でもあります。アランにとって歴史とは、決して重箱の隅をつついて手に入れた味気のない乾物の残滓ではありませんでした。それは現在をより良く生きるために、良質のものを味わうための知恵でもあり、個人のものとして理解していましたが、集団としての歴史観というものも存在していますからなかなか一筋縄ではいかない学問領域でもあります。(完)

## 四十五 時間の価値

---

時間をお金に換算することはよくあります。時給千円で働くパートの人は、一日八時間働けば八千円になります。一週間に五日働けば四万円になり、四週間で一六万円、一年間を五二週とするなら二〇八万円です。五〇年間働けば一億四〇〇万円ですから、時給千円で働く人の一生は一億円余りです。しかし、時間を短縮させるために費やされる金額が莫大に成ることは良くあります。例えば東京から大阪まで行くのに新幹線が出来る前までは六時間かかりましたが、半分の三時間で行けるようになりました。新型車輛の「のぞみ」なら二時間半です。そのための技術開発や線路敷設などにかけた経費は莫大であったことでしょう。科学者や技術者は、それを進歩と言うでしょうが、アランは逆にスピードを出さずにゆっくりと行う作業の意義についても一九〇七年六月一四日のプロポで言及しています。

「時は金なりです。この格言が意味するものについて、昨日、巨大な石の周りを囲んで働いている三、四人の労働者を見ながら私は考えました。それはこの世で一番急いでやれる仕事のことではなくて、ジャッキやローラーや鎖やウィンチ（巻揚機）の助けを得ながら、一時間にせいぜい三、四メートルの速さで重い荷物を目的地へ運んでいました。この石は頑として動かず、多くの人の力が必要です。やがてその石が要る家は完成し、賃貸され、人が住んで何日かになっています」。

決して速くはないが、確実に家は完成します。材木で出来ている日本の家屋のように、時間をかけて造る方が良いものが出来る場合もあります。急いで造ると材木に含まれている湿気等の関係で寸法に狂いが生じてきて、良い家が出来ないのです。石の場合は材木のように湿気の影響は少ないのですが、ゆっくりと時間をかけてやるのが求められている場合は沢山ある筈です。例えば鋼鉄のレールを鋸で切る場合や分厚い鉄の仕切り板に穴を開ける場合のことをアランは言っています。そのような作業を行う人々は時間を節約しようなどとは考えずに、たっぷりと時間をかけて正確に行動するのです

逆に、時間を節約しようとして早くやろうとすると経費は大変に高くなります。〈速さ〉は法外に高くなります。如何なる運搬であろうと、二倍の速さでやるためには四倍かそれ以上の労働力を必要としますし、三倍の速さですと九倍の労働力を必要とする、とアランは言います。そして、労働力やエネルギーを必要とするばかりではありません。

「……速くすることは幾つもの歯車を使いますし、事故にもつながり、とても複雑な安全装置が必要になります。そして停止することは何よりも高くなります。それと言うのも速く走っていて停止するにも時間を節約するからです。ブレーキは火花を発生し、タイヤは道路をかきむしり、それ自体を消耗させます」とアランは書いています。そして、人間にとっての本当の豊かさは速くやることではありません。休暇を利用して旅行する場合も、あちらこちらを急いで見て回るよりも、一ヶ所に落ちていて旅先の場所を限定してゆっくりと見た方が豊かであり、その土地を本当に理解することが可能になります。アランは「労働における経済上の最高の決まりごととは、可能な限りゆっくりやることです」と言います。そういう意味で経済上に競争原理や市場原理を導入させようとする学説は、経験を或る面で理解していないように思います。競争は多くの場合、急いでやるのが求められます。他人よりも速いことが求められます。石を速く運ぶことに意味があるなら、それだけの労働力やエネルギーが必要になり、社会全体が蒙る損害も大きいものになり、危険性も高くなるでしょう。JR福知山線の脱線事故も、起こるべくして起きたのかもしれませんが。何故なら関西地区の鉄道会社は数が多く、電車の運行速度も競争状態にあったと言われているからです。競争すれば事故も起こり易くなります。競争すれば本当に豊かな社会になるのでしょうか。競争して一所懸命やるのが良いことなのでしょうか。何でも一生懸命やれば良い訳ではありません。豊かに成る訳でもありません。泥棒も掏摸も一所懸命やるでしょうし、戦場にいる兵士も一所懸命に人を殺します。

大切なのは速くやらなくても物を盗まれず人に殺されないで済む社会を作ることであり、本当の理解と豊かさはゆっくりやることにあります。旅行した土地を急いで通り過ぎればその土地を理解することもないでしょうし、旅の豊かさや楽しさも分からず、疲労感が残るばかりです。そして、次のように書いてアランもこのプロポを結んでいます。

「……労働における経済上の最高の決まりごととは、可能な限りゆっくりやることです。速度に関しての私たちの愛情は多分、物事を良く理解しております。取分け、豊かさは消費したエネルギーと同じ速度で決して増大することはありません」

ここにアランの思想の真髓があります。一人ひとりの人間にとっての幸福や豊かさを求めたアランは、決して集団に埋没することのない、速さを求めない社会に人間としての豊かさを見ていたのです。ダーウィンの進化論が急速に社会を席卷していく危険性も了知していたと思われます。生物は全てが昔よりも現在が進化して優れている訳ではありません。環境の変化に適応出来た生き物が生き残っただけであり、生物として優秀な訳ではありません。そして、その適応も決して速く行われたものではなく、長い時間を必要としていたことも事実ですから、短時間の変化を強要する競争や改革や革命や戦争は、決して社会の豊かさを具現化する唯一の方法ではないと思われます。もしかしたら不必要な不安を伴わない改革無き社会の方が優れた社会かもしれず、景気も今よりも早期に回復していたかもしれません。(完)

独裁というものを決して容認しなかったアランは、民衆に対して極めて素直な見方をしています。民衆の活動に関する同意やその活力は個人以上の存在を示しており、一人ひとり意識と意志を持っています。それは共通の意識になり、共通の意志になります。既に、エミール・デュルケイムによって社会意識を確立する社会学が生まれていましたが、アランはそれを「市民のためにあるもので、私の手や足となる意識のことです。そのことは社会学というものが既に文学ときれいに分離されないことを証明している」と書き、文学が決して個人の領域に埋没するための営為ではないことを、社会学を規定していきながら間接的に述べていることは注視しなければなりません。人が物事を理解する最初は精神に齎すものであり、先ず疑って注意してみることです。注意して見ることは自分で望んでみることであり、つまり或る目的が自分に持たされており、一連の方法をこの目的に向けることです。存在することも人が望んだことであり、或る時は事物と同じで堤防を破ることを望んだ急流のようなものであり、又或る時は眼に見えない何らかの〈神〉が物事とか管理を作ります。例えばジュピターは雷を放ちますが、これらは理解しても全く何も説明していません。急流が堤防を破ることは分かりますが、何故破るのか説明がされていません。眼に見えない神が何故物事とか管理を作るのか。何故ジュピターが雷を放つのか説明が成されていません。「物事とは、私（アラン）が物事の状態を知った後に予想することが出来る時に理解されるもので、もっと正確に言うなら物事の状態を知った後に計算が出来ることです」とアランは言います。百の歯をもつ車輪を十の歯をもつ小歯車の上で回すなら、完璧な知識とともに車輪が一回転すれば小歯車は十回転すると予想出来ます。車輪よりも小歯車が速く回転するのは、車輪よりも小歯車の方が強い力で押されているから沢山回転しているのであるとは誰も考えないでしょう。十回転した結果から何故そうなるのかを計算して予想することが出来ること、それが物事を理解することでもあります。敢えて結果は文学であり、計算は社会学であると言い直せば分かり易くなるかもしれませんが、そんなにも〈きれいに分離されない〉ことが民衆を理解する上で必要です。民衆は文学の対象であり社会学の対象でもあることを、アランは一九〇七年七月一日のプロポで述べています。その中でアランは民衆を理解する上で、敢えて犬という動物の行動から分かり易く説明しています。

動物とか民衆を研究するためには、動物とか民衆の意志というものを気にかけて心配する必要は無いのですが、検討する必要はあります。その意志を検討すればする程、機械のように非常に複雑になってくるのでしようが、複雑であってもその機械の中では一つの歯車は他の歯車を押して動かしていると考えることが、動物や民衆を理解する上で必要であるとアランは言います。民衆を見るその眼は動物を見るように理解するのが分かり易く、不可解なものを見做して処理してはなりません。民衆を神秘的で未知なものと決して見ない処にアランの優しい眼差しがあります。優しさとは理解であり、対象を良く見て理解することがなければ優しさも湧出しません。アランは民衆を犬に譬えて次のように説明しています。

アランは或る日、水が半分入ったバケツに入れられて嫌がっている子犬を眼にします。子犬は半分程濡れた体を揺す振って逃げ出します。「それから私（アラン）が子犬を見たのは家の入口で太陽の光を浴びて眠っている時でした。子犬は乾いている部分を日陰の方にしていました。従って影の線は濡れて湿った毛の線とぴったりと一致していたのです。驚くべき知性の証であるとあなたは言うでしょう。この犬は自分の体の湿った部分を太陽の方向へ向けたかったのです。いいえ、そんな風に私は理解しません。犬は寒かったために走り回りました。日向で横になったのです。日向ならもう寒くはなかったからです。しかし、乾いた体の部分には日向は熱すぎました。犬は熱くもなく寒くもない処まで体を動かしたのです。民衆もこのようにして自分の体を動かします！」とアランは結んでいます。

民衆は神秘的でも未知のものでもありません。犬のように熱い処と寒い処に敏感であり、日陰と日向を求めています。民衆は個人の感情に端を発して社会共通の目的を目指します。熱すぎれば日陰を求め、寒すぎれば日向を求めます。その掛け声が一人の専制君主であっても、その求めに一致していれば誰でも構わないのが民衆です。しかし、民衆の求めに一致していなかったならば政治形態を問うことになります。現在の社会機構を変えようとしします。社会の改革を求める声が強ければ強い程、その社会は民衆の求めに一致することがない歪んだ制度の中にあると言っても過言ではありません。生まれ、それは社会全体が全て民衆の求めに一致していないためではありません。犬の体の濡れた部分を日向に少しだけ動かして、影の線を体の湿った部分と乾いた部分の境へ持って行くために、少し体の位置を変えれば良いのです。恐らく、万人が望むことは一つではないでしょう。熱いと感じる人も寒いと感じる人もいますから、犬の体の全身を日陰や日向に持って行く訳にはいきません。

ところが独裁者は社会全体を日陰へ持って行ったり日向へ持って行きますから、日陰と日向の境界線を見ようとしなくなり、居心地が悪い人の数も多くなります。専制君主や社長やマスコミの言うことを鵜呑みにして、自分自身で熱いのか寒いのか判断できない社会が危険なのです。何故なら、自分の感情や思考を信頼出来ない人は他人を信頼することも出来なくなり、熱くも寒くも無い快適な個人や社会を形づくることも出来なくなるからです。つまり文学と社会学は完全に分離されないものであり、両者の相違は方法論の相違によるものでしかありません。(完)

## 四十七 石炭とチョーク

地球上の資源は有限です。二十世紀初頭のフランス社会のエネルギー源は主に石炭だったようですが、その石炭も何時か不足する時が来るのではないのか、という不安があったようです。一九〇七年七月九日のプロポは、「石炭が不足すれば、自然の中に多量にある炭酸塩鉱物を熱して石炭を取り出すことになるだろう」と書いてある経済学者たちの本を読んだアランの意見です。アランは当時の柱時計に譬えて、石炭という有限の資源を手に入れる労働との関係を次のとおりに述べています。

「そうです、私は何時もそこから私の柱時計の話に戻ります、それを動かしている振子の話に戻ります。柱時計の振子は私のために働いていますが、私がネジを巻いて手助けしてやるのが条件です。柱時計が大地にある時、つまり私が行った労働の全てを私の利益にして仕舞った時は、最早何もそこから取り出せないでしょう。

ところで私の振子が大地にある時、自然という本体は振子に似ていると言わねばなりません。それは伸びきったぜんまいに似ているとも言えます。石炭や石油を取り出すためには、他の物を除外しなければなりません。石炭や石油という二つの本体は、私たちが全てそのネジを巻いて取り出しているものです。従ってこれらの物質が不足してくると、私の柱時計の振子のように大地にあると思う処まで行って取りだそうとします。しかし、いったん大地に行ったら、私はそれらのネジを巻かねばなりませんし、次から次に私がそれらに供給する労働は私の利益にならないようです」

労働の対価である金銭を考慮しないで労働そのものを考えてみるなら、労働は自分のために行うものではありません。他人のために行うことが労働の定めです。列車の運転手は、自分が行きたい所へ行くために運転している訳ではありません。乗客という他人が行きたい所へ行くために運転しているのです。チョーク（石灰質岩石）は石炭から作ります。他人が石炭に手を加えて作ります。アランがチョークを必要とするなら、アランが出来ることは〈柱時計のネジを巻いた振子のように石炭を取り出すこと〉だけです。チョークには石炭を熱くしたり加工する労働が必要です。それは奇跡によって生まれるものではありません。「或る高さに水を上げれば、水の落下を生むことが出来るのです」と書いてこのプロポを結んでいます。

水の落下が必要なら、水を高く持っていく必要があります。チョークが必要なら、石炭を取り出す必要があります。そして石炭を全て自分のものにしないで、チョークを作り出す人へ供給しなければなりません。労働には色々な役割がある筈です。それらの役割がチョークを生んでくれています。石炭資源は有限ですから不足する時が来るでしょうが、それらの役割が新しいチョークを作ってくれるに違いありません。一世紀後の今日において、私たちは既にその解答を見出しています。石炭の代りに石油が新しいエネルギー源になり、更に原子力も利用しています。困難な問題は一人で全て解決することは出来ません。色々な役割を持った人々がいるから全く新しい解決方法が見付かるのです。そして、色々な役割とは色々な思考であり、色々な思想でもあります。この地球上を全て一つの思想で統一させる必要はありません。色々な思想があるから思っても見なかった新しい発想が生れてくるのです。そのように考えると、私にはとても腑に落ちない事件があります。

高等学校の卒業式で、国歌斉唱の時に起立しなかった教師を処分した事件です。教育の現場に思想統制のようなことがあってはなりません。国家や行政は、国民が衣食住に困る事態が発生しない限り、一人ひとりの考えや意見を封じ込めようとする制度は出来うる限り排除すべきであると私は考えます。「君が代」を歌う時に立たなかった教師は、参列者が歌うのを妨害して秩序を乱したとは言えず、自らの信念から立たなかっただけですから、教育的であり民主主義的であり健全です。むしろ自分で考えずに、言われる儘に立った教師がいればその方が教育的ではありませんし民主主義的ではありません。何故なら教育とは自分の考

えを訓練し発表する場を出来る限り保障するものであり、全体の福祉に反しない限り民主主義とは色々な思考や意見を持った個人を容認する制度でもあるからです。教師として不適正な者は、起立しなかった者ではなく、むしろ言われる儘に起立した教師の中にとアランなら言うかもしれません。

国民をステレオタイプの理解すると大きな過ちを犯すことになります。例えば国民には現状を暑いと思う人と寒いと思う人がいるとします。暑いと思う人に暖房を与え、寒いと思う人に冷房を与えれば暴動に成るでしょう。あるいは全ての人に暖房を与えれば、社会は二分化されて現状を良しとする保守派と現状に満足しない改革派に分かれていくことでしょう。あらゆる階層に競争原理や市場原理を導入しようとする間違いもよい例です。又、人間の価値や評価というものを最終学歴や採用試験で判断しようとする学歴社会や現在の公務員制度もよい例です。東大生は二十歳前後の年頃の時のペーパーテストの成績が良かっただけで、それが人間の価値を全て表わすものではない筈です。ペーパーテストで良い成績を取っても腕の良い大工に成れるとは限りません。犬小屋一つ造れないかもしれません。ペーパーテストに向けた頭脳が国民のために仕事をしようと考えずに、自らの保身に汲々とする公務員を生んでいるとも限りません。

〈東大生 丸太がおらず 錐ばかり〉は私が創った川柳です。鋭い意見を言うが責任を持って自分の仕事を完遂せずに、錐のようにさっと身を引いて人事異動などで逃げてしまう無責任な東大出身の国家公務員を揶揄した川柳です。ペーパーテストの成績が悪くても、現状を寒いと感じている国民のことを真剣に考えて槌で打たれる丸太のように責任を持って職務を遂行している愚直な公務員をもう少し高く評価すべきであると考えます。取分け、その成果が分るまでに時間がかかる教育、健康、環境関係などの職務に従事する公務員の評価は時間をかけて行うべきであり、性急に評価すべきではないと考えます。そういう意味で短期間の人事異動で職務が変わる、所謂キャリア公務員の成果に基づく適正な評価は不可能であり、長年に亘って同じ職務を遂行する公務員の成果のみ適正な評価が可能になると思います。そして個人的な意見ですが、公務員にも出来るだけの表現の自由を認めてあくまで自分で思考する訓練の場を多く提供することは大切です。それが民主主義社会における公務員の本来の姿であると考えます。何故なら、公務員とは国民のために働く者のことであり、為政者のために働くことは必ずしも国民のための仕事とはならない場合もあるからです。そして、国民には何時も寒い思いをしている人や暑い思いをしている人がおり、一人ひとりを確認することは独裁者には出来ないことであり不可能なことです。独裁者は何時も国家とか世界という幻想を見るしかありません。国家とは、寒さも暑さも知らない幻想であり抽象です。あるいは寒いだけか、暑いだけと理解するだけです。つまり一かゼロしかない抽象世界であり、全ての人々が同じ方向へ進むことを理想とするスポーツチームのような形態に変貌するしかありません。そのような体制は現実には困難でしょうがヒトラーはそれを実現しましたから、あながち幻想の儘で終らない処に恐怖があります。国家が全て寒くても暑くても国民は困ります。寒い思いをしている人には太陽の光が当たり、暑い思いをしている人には日陰を用意する制度に基づいた、きめ細かな役割が大切です。一人ひとりが自分の役割を自覚出来る労働の大切さを、アランの柱時計は教えてくれています。(完)

## 四十八 税金と物価

アランが主張する経済は極めて実証的であり、経済を学問世界に隔離することなく、あくまで実社会との関係からその機能に貢献しようと努めます。一九〇七年七月十一日のプロポは、歴史学者とアランの対話から税金と物価という経済学上の問題について述べていますから、長くなりますがその儘記載してみます。

〈歴史学者は私（アラン）に言いました、「税金についてのあなたの論理というものは根拠がありません。税金には事件が続発することを、確かに私は承知していますし、経済学者たちが税金の偶発事件名でこの現象を書いて久しい。但し、そのことは殆ど私の研究には役立ちません。壁を貫いて家族の真ん中で爆発する砲弾を仮定して下さい。何人も死者や怪我人が出るのを私は知っていますが、体が二つに切れるのか、四つになるのか、一番酷い時は足が一本になるのか、無傷で済むのか、私には全く予想することが出来ませんが、弾道学のことなら大変よく知っています。税金のことも同じです。狙いをつけて必然的に打ちのめすものではないことを私はよく承知していますし、確かに思ってもいなかった別の者を傷つけることがあります。これらの結果の詳細を見抜くために私が自分を精神的に消耗させることは無駄なことです。それ故、私たちは如何に知るといえるのでしょうか？ 出来事と言っているものとは、科学というもので形而上学的夢想を排除した方法のものです。その中には物理学としての政治があるでしょう。それ故に経験を積みましょう。統計学が私たちに教えてくれるでしょう」。

私は彼に答えて言いました、「あなたは新しく出来た薬を患者の一人に与えようとしている医者に似ています。今ここで問題なのは国家全体ということであり、多分十年間は続くに違いないことであり、その結果は取り返しが付かないことであることを忘れないで下さい。つまり経験に基づく方法は適切でないということです。よく言われる予備調査に関して言うなら、各人が幾ら収税史に払ったら良いか教えてくれるでしょうが、それらの結果については私たちに教えてくれませんし、正しくそれが私たちの興味ある処なのです」。

もう一つ付け加えて言いますが、政治経験の結果は殆どが本を読んでも不可能であるということです。従って、例えば所得税が物価の上昇と関係があるか私は知りたいと思います。人が経験していることを仮定して下さい。物価を変化させるには多くの原因が介在している故に、物価を観察しても全く何も証明できないでしょう。例えば貨幣価値の低下はあらゆる物価の上昇を生むに違いありませんが、私があなたに想像して頂きたいのは他のことです。如何にして私たちはその中で自分を見出すのでしょうか？ 如何にしてあなたが言う歴史の教訓を理解するのでしょうか？

私は方策しか知りませんが、その方策とはよく考えて決定された仮設から出発して最良の可能性を知性によって予測しようとするものです。例えば私は関税の障害を仮定して、綿布の生産者たちが新しい税金を利益に課せられるとすると、他の価格が同じであったならば綿布の価格は少し高くなることは避けられないと思えますし、綿布の消費者たちは少なくとも新しい税金の一部を支払うことになります。あるいは多分、更にその全てを支払うことになります。ところで綿布は贅沢品ではないのです。〉

贅沢品でないものはできるだけ物価の上昇を抑える必要があるとフランス人は考えますから、食料品や日用品の消費税も低く抑えられています。我が国のように消費税は全て一律ではありません。しかし、関税のような他の税金が上れば物価にも影響してくるに違いありませんから、物価の動向は慎重に観察する必要があります。まして税金と物価の関係は非常に強いものがあるとアランは言います。税の改革は必要ですが、国家全体の改革はその成果が現れるまでには時間がかかりますから十年単位のものである筈です。一度間違えれば取り返しが付かなくなります。

そういう意味で我が国のガソリン税の暫定税率の問題は、色々と重要な問題を含んでいて興味深いもの

があります。何故なら、三十年も暫定の儘課税してきたものを廃止して、一般財源化しようとする姿勢は明らかに暫定を恒常化させようとする政治姿勢であり、税を為政者の都合で課税出来ると思考していることを証明しているからです。国民が知らないうちに課税出来るものから課税し、国民が知ると課税出来なくなる税は公平である筈がないからです。老人やサラリーマンのように弱者の年金や給料から天引きしたり、国民がよく知らないうちに取れる処から取って仕舞おうとする姿勢は公平である筈がありません。真に公平であるのはその逆で、人々が十分に理解し納得してから取る姿勢が民主主義のルールでもあります。従って、個人の所得税は出来るだけ簡単にして、例えば一律一〇%にして分かり易くして、贅沢品の税率を高くし日用品は低く抑えた消費税に比重を移すべきであると私は考えます。

収入に対する複雑な課税は、会計士という専門家のいる企業が対応する法人税で十分です。所得の把握が困難と言われている個人や農家や小規模経営者は、脱税目的で所得を把握しないのではなく、只、労働者が少ないために収入金額や経費の把握が煩雑であるに過ぎない場合が多いと思います。配偶者の収入にも気を遣わなければならない現行の所得税は、弱い個人をいじめるための制度としか思えません。個人が複雑な計算をしないで済む税制に変える必要があります。そのためには収入への課税は簡素化し、簡単明瞭な制度にすることが本当の公平です。公平の名の下に、累進課税や様々な所得控除や税額控除を作って、しかも毎年のように制度改正があつて分かりずらく複雑にして、確定申告の還付請求のように知っている者だけが得をする税制は不公平そのものです。税制が簡素になれば誰も自分の納税のことで税理士に相談する必要がなくなります。そうなれば税理士は自分の首を絞めますから心ある税理士でも積極的にそういうことは言いません。そして、多くの人々も問題にしませんし見ようとしません。個人の所得税を簡素化すると共に、支出した時に税金を払う消費税の税率を高くしても、その方が分かり易く公平です。何故なら、個人が面倒な計算をしないで済むから脱税もなくなり、余分な心配をせずに自由に思考出来て自由に意見を言うことが可能な、理解に溢れた社会になるからです。脱税のことを何時も心配して言いたいことも言えない個人を作れば、自ら進んで国を愛することも、良い知恵を出し合う成熟した民主主義社会を築くことも叶わず、十分な理解を必要とせず何も見ようとしめない皮相な打算に溢れた個人が増えるばかりです。「見ることは、見ることを望むことである」とアランも言っています。(完)

アメリカ大統領選挙を観察していると、候補者に対する支持者の熱狂的な声援にはびっくりします。鼻負のチームを応援するスポーツの応援に酷似します。情熱的な感情が馬のように荒野を馳駆するようです。深く思考することはありません。反省する暇もなく、次から次へと言葉による選挙戦が進展していきます。立ち止まって状況を静観する者は、まるで場違いのアウトサイダーのように成って仕舞います。一人ひとりがインサイダーに成ろうと思考してその場にいるのですから、最早思考を停止させた集団に変貌しています。勝利のみが目的になります。負ければ怒りや絶望に陥りますから結果のみを追求めます。しかしアランは「怒りや絶望や情熱の興奮した結果を避ける良い規則があります。自問しなければならないことです」と書いて一九〇七年七月一九日のプロポは始まります。自問することとは主体的に思考することです。思考することを他人に任せてはなりません。アランは次のとおりに言います。

「……先程の私が狂人と異なっていたのは何によるのか？ 恐らくそれは外的要因ではありません。何故なら私は話をしたが、よく考えもせず三脚の台の上で女予言者のシビラが多分行っているように盛んに身振りをしているからです。それでは内的要因を見てみましょう。私の怒りとか悲しみに対して多くの正しい理由が見付かります。しかし、友よ。あなたは自分の情熱を正当化するために与えている理由を信じてはなりません。それと言うのも情熱は真つ赤な光の一瞬の輝きのような会話が反映して、それらの形が見分けられなくなるからです。その時の頭は誰にも共通しているのですが、自分の考えとは別に胃が信じているものも同じように信じて仕舞います。優れた精神の持ち主はそこでは誰よりも主体的であると考えて自分を慰めなさい、何故ならインスピレーションは時として真実を導くからです。しかし、それは危険な方法であり、狂った方法にもなります」

インスピレーションは多くの真実を生みますが、多くの間違いも生みます。インスピレーションが正しいものとして有効であるためには、それを検証する知性の働きが必要であり、最初の事象や感情を第一原因とするなら、それらを定義していく時間が必要です。真実は性急であってはなりません。真実には時間が必要です。時間が創り出します。「それ故、あなたの欲望に対しては知性を訓練することです。欲望のために行ってはなりません。それは信じないことよりも容易です」とアランは書きます。信じることは知性の働きが必要ですが、信じないことも知性の働きが必要です。インスピレーションを信じることは決して知性の働きではありません。思考を放擲した独断だけですから間違った方向へ邁進することも十分に考えられます。演説は「沢山の人々とか沢山の欲望へ話しかけるものであっても、決して沢山の力を持っていません。本当です。でも演説の力は決してゼロでもありません。演説は興奮した人々との活動を調整します。興奮した人々を導きます。最初に叫ぶのは〈バスチーユへ！〉です。監獄が占領されたその日が重要でなければ、演説も行われなかったのです」とアランは書きましたが、演説は人々を暴動へ導くばかりではなく冷静に思考する穏やかさを齎すものでもあることを指摘しています。古代ローマの皇帝で五賢帝の最後の一人と言われているユルクス・アウレリウス（一二一～一八〇）は、演説が大変上手でしたがそのためには十分に準備しました。そしてアランは彼の言葉を引用してこのプロポを結んでいます。

「あなたがそんなにも沢山の痛みを持つ敵は何か？ 哀れな者の皮袋は空気や血や食料で膨れ上がっているものだ。それは演説の言葉でしかありません。しかし、もしも演説から理性を取り除いたならば、何が残るといえるのでしょうか？」

分かり易い簡潔な言葉を狂人の如く大声で繰り返して言うことが演説の極意であるかの如く、人々を八郵政民営化へ！というバスチーユへ導いた政治家が我が国にもおりましたが、そこにあるのは演説ではなく、一政党のテレビコマーシャルでしかありません。民営化という幻想の影で何が行われているのか見

ようとしません。人々の豊かな生活を目指すべき政府の機能が、国際競争という戦争を仕掛けるための精神を鍛える機能に変容していきます。自分だけの空気や血や食料で一杯になった皮袋は、他の物を受入れることが出来ません。ライオン一世が自ら立てた槍を中心に宮殿を建設し、その周りに道を伸ばしていった町はうまく発展しないことを、アランは一九〇六年七月八日のプロポに書いています。水脈が無かったからです。人々は水脈に沿って家を建てていきます。町は征服者の意志で造られるものではなかったのです。「木々が苔を育てるように、町は水によって造られます」とアランが言うように、統治者の皮袋は自分の空気や血や食料で膨れ上がっているものではなく、自分以外のものが這入ってくるように用意すべきです。「誰もが自分のことを考えると公正に判断出来ないが、見世物を見るように他人のことを考えると公正になります」とアランは一九一〇年九月一二日のプロポでも書いています。見世物を見るように人々が見付けた水脈のことを冷静に話すべきです。演説はそのことを表明するためのものでもあります。ライオン一世は、その水脈の上に自分の槍を立てて町の中心にすべきであったのです。(完)

美とは何でしょうか？ 一流の芸術家や選ばれた者だけが美を理解することが出来るのでしょうか？ そうではないとアランは言います。セヌ川を架橋するアレクサンドル三世橋の彫刻に見る派手な装飾や大掛かりな欄干の街灯を、観光ガイド本では「セヌに架かる橋のなかで最も美しい」と紹介しています。しかしながら一九〇〇年のパリ万国博の時に完成したこの橋を、アランは人間が川を渡るための橋として好きではありませんでした。大袈裟な装飾が美しくないと言います。橋は王様だけが渡る訳ではないのです。多くの市民が渡る橋には、それなりの美しさがあります。美は誰にでも理解されるものである筈です。真っ白な一面の壁があれば、一幅の絵を掛けてみたくになります。その絵は壁に必要になります。真っ白な壁に有用の絵になるのです。大袈裟な装飾は却って邪魔です。

一九〇七年七月初めにルーブル美術館で、近代フランス絵画の祖と言われているニコラ・プーサン（一五九四～一六六五）が描いたノアの洪水の絵が何者かに切り裂かれた事件がありました。一九〇七年七月三日のプロポはそのことについて語る或る技術者の話から始まります。

技術者はアランに言いました。「芸術作品というものは私には決して如何なる印象も生まなかつたと敢えて言えます。美を感じる感情を私が知らない訳ではないが、全く逆で、私は大変生き生きと美を感じる事が出来ます。しかし反対に私が醜いと思った対象を見ると悲しくなります。私が美しいと思ったり醜いと思う物は美術館の中だけにあるではありません。それらは今日もある物であり、役に立つ物もあれば有害な物もあります。例えば四つのシリンダーを持つ蒸気機関車には小さな管があり、レール上を前方に伸びていて私は美しいと思います。それだけではありません。その機関車は力強く万遍無く整備され調整されています。その外観は考えなくても即座に快い感情を生んでいるのが私には分かります。恐らく、そのような感情を抱くのはこの機械の大きさや形や歯車の位置が結局は経験によってやすやすと理解されてきているからです。あなたが本を読む時、活字や音綴には注意を払いませんし、言葉にも注意を払いません。直接的に観念というものを捉えているように思います。家についても同じです。最初に見た時に直接的に観念を捉えているに違いありません。一眼見るだけで分かるのは建築家が見る時と同じです。

力強さや熱心さが見てとれる馬が美しいのは如何してでしょうか？ 熟考することもなく、正しい理性がなくもないが立派に子供を育てたり、そのように育てられる女性が美しいのは如何してでしょうか？」そしてその技術者は、七月一四日に行われた閲兵式で軍事用飛行船が上空を飛んでいるのを見て少しも美しくないように思う、と告白します。その原因は権力の行使にあり、お互いが対立することにあるからです。そのことは理解する前に感じていることで、実際に役に立っていない飛行船を見ても美しくありません。そのように感じるメカニズムに慣れ親しんでおり、それが彼の美学であると言います。つまり有用性や有用な知識に美の基礎を置いているのです。しかしそういう知識は美的センスがあるといわれている男性や教養高い女性たちから軽蔑されている、とその技術者は言います。

これに対してアランは次のように言います。「元気を出して下さい。美的センスのある男性や教養高い女性たちは自分勝手の道に従う哀れな羊たちであり哀れな雌羊たちです。彼らの思考と感情は物真似によっています。何故彼らは絵を描いたり絵を見て驚くのでしょうか？ その絵のデッサンが実物の文字のように何かの役に立ったとても有用だった時期があったからです。しかし、古きデッサンや古き絵画に愛着を抱く人には、子供が兵隊ごっこをして遊ぶようにその理由を知ることがありません。彼らはそのことについて何もその意味を知らないのです。彼らは自覚せずに読書し、文学を一つにまとめて全て同じものとして楽しめます。トランプ遊びをしている人々の顔つきのように笑うことがありません」と書いてこのプロポを結んでいます。

本物のように描かれた肖像画も風景画も静物画も写真機が発明されるまでは、誰にも絵画の有用性が明確に理解され自覚されていきましたから、美を理解し自覚することも容易でした。しかし、近代の絵画はそれらの有用性に代る新しい有用性を見出し自覚することがなければ美の確立が覚束なくなりました。本物らしく描く努力を徒勞と見做した観念論者たちは、抽象画というメタファー世界の幻想美を現実のものにしようとしてきました。観念を先行させて現実が置き去りになりました。何時しか絵画の有用性が無視された現代アートは、美を観念世界だけで独占しようとしています。美が専制君主に独占されないとも限りません。何故なら、専制君主は有用性を無視して自分の好みで美を限定するからです。しかし、美とは現実の生活から遊離されない有用性の中にあるとアランは言います。有用性に基づく公準は誰にも平等に美を理解することが出来ます。この公準を信用するなら、人間の手で描く絵画は写真よりも本物の実像に近づくことも可能です。つまり本物を写した写真は、見る者が作品に近づけば近づく程、微細な処まで見えて本物らしくなります。反対に、離れば離れる程ぼんやりとぼやけてきて実在を喪失した別物に見えてきます。ところが人間の手で描いた絵画の中には、作品から遠く離れた処から見た方が対象の実像を浮き上がらせて見えてくる秀作があります。真っ白い壁に掛かる一幅の絵だけが表現出来るリアリズムの美がそこに現出します。現実のものになります。正しく写真に対する絵画の勝利です。美の奇跡です。奇跡は現実のものでなければなりません。そして市民の美は有用であるところにあります。美は決して王様や貴族主義者だけのものではないのです。(第巻・完)

アランと共に ( )

(2012年5月登録)

<http://p.booklog.jp/book/46774>

著者: 高村昌憲

著者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46774>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46774>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社: 株式会社 paperboy&co.